

安満宮山古墳

—発掘調査・復元整備事業報告書—

平成12年3月

高槻市教育委員会

安満宮山古墳

—発掘調査・復元整備事業報告書—



平成 12 年 3 月

高槻市教育委員会

序 文

山城盆地に発して大阪湾へと注ぐ淀川は、この三島野に肥沃な大地を育み、また東西交通の基軸として長い歴史を刻んでまいりました。そのなかにあって要衝に位置する高槻市には、先人がこした歴史遺産が数多く所在しております。なかでも安満遺跡は、北部九州に成立した弥生文化がいち早く畿内へ伝わったことを明らかにした環濠集落遺跡としてよく知られております。

平成9年夏、その安満遺跡を眼下におさめる安満山の一画を発掘調査いたしましたところ、安満宮山古墳の存在が明らかとなり、わが国最古の年号鏡である「青龍三年」鏡をはじめとする貴重な銅鏡が5面も発見されました。西暦239年、邪馬台国の女王卑弥呼が魏少帝から下賜された「銅鏡百枚」の一部が、この5面のうちに含まれているのではないかと大きな議論を呼び起こしたのは記憶に新しいところであります。銅鏡をはじめ出土品がいち早く国保有となされましたのも、その重要性の表れであります。

小古墳にもかかわらず5面の鏡を出土した安満宮山古墳の調査成果は、たんに三島の歴史に新たな一節をくわえるにとどまらず、古代史最大の謎とされる邪馬台國論、そして後政権成立の過程を考えるうえで有意義な資料となるものと確信いたします。

高槻市では、この貴重な歴史遺産を大切に保存・公開して、今後のまちづくりへ活用するとともに、新たな市民文化の醸成に役立てたいと考えております。折しも平成10年は市制施行55周年にあたり、その記念事業のひとつといたしまして歴史シンポジウム並びに古墳の復元整備を行いました。成果は本書に併せて収録したところですが、今後とも歴史遺産の保護と活用に努めていく所存でございます。

調査と整備並びに本書の作成にあたりましては、文化庁並びに大阪府教育委員会のご指導を得るとともに、奈良国立文化財研究所をはじめ多くの研究機関、研究者、そして市民の方々のご支援とご協力をいただきました。この場を借りまして皆様に心より感謝申し上げます。

平成12年3月30日

高槻市教育委員会
教育長 溝口重雄

例　　言

1. 本書は、高槻市公園墓地内（高槻市安満御所の町1351-1）に所在する安満宮山古墳の発掘調査及び復元整備事業の報告書である。
2. 発掘調査は、大阪府教育委員会の指導のもと、高槻市教育委員会が主体となり、高槻市立埋蔵文化財調査センター技術吏員鍾ヶ江一朗（現主任）を担当者として、平成9年7月3日から同年10月3日まで実施した。現地調査にあたっては、同センター技術吏員宮崎康雄、文化財専門員川村雪絵（現津市教育委員会）がこれを補佐した。復元整備事業は、市制施行55周年記念事業として位置付けられ、高槻市教育委員会が実施した。事業は同センターが所管し、主務者は鍾ヶ江が担当した。
3. 調査の実施及び出土遺物の整理は、高槻市文化財保護審議会委員原口正三、同センター所長富成哲也、同所長袖佐森田克行の指導を受け、文化財専門員木曾広、同雅波紀子が参加したのをはじめ、下記の方々の協力を得た。
荒井純子、池田理美、井上明子、木村さつき、白銀良子、高橋公一、高橋美智子、柳靖代、橋本久和、堀亜紀、西岡和江、松木信子
4. 地中探査は奈良国立文化財研究所測量研究室長西村康氏に依頼した。また出土遺物の保存処理は同研究所遺物処理研究室長肥塚隆保、主任研究官高妻洋成、客員研究員佐藤昌憲の各氏に依頼した。末の分析は別府大学助教授本田光子氏に依頼した。
5. 写真撮影は文化財専門員清水良真が行った。X線写真・CT画像・電子顕微鏡写真は奈良国立文化財研究所から提供を受けた。
6. 本書の執筆は付論1を本田光子氏、付論2を肥塚隆保氏、その他を鍾ヶ江が行った。また編集は鍾ヶ江が行った。
7. 本書で記載する標高はO.P. (T.P.-1.3m)を使用している。また基準標は墓坑中央を(0, 0)として割り付けた。表記する国土座標は第Ⅳ系である。
8. 安満宮山古墳の出土品は、平成10年3月9日付けで国保有出土文化財（文化庁所蔵）となっている。本書刊行にあたっては、平成12年3月2日付け12委保伝第1の1号で文化庁の許可を得て写真を掲載した。
9. 調査中は、多くの方々が来訪され、貴重な助言をいただいた。また本書作成にあたり下記の方々及び機関から指導・教示を得た。この場を借りて、心より感謝申し上げます。
石野博信、今尾文昭、岡村秀典、尾形充彦、小野山節、小山田宏一、門脇裕二、
金岡忍、神谷正弘、岸本直義、工堀普通、車崎正彦、好地伸、酒井龍一、
佐藤晃一、沢田正昭、白石太一郎、田代克己、坂本敏夫、辻本与志一、田中哲雄、
田中塙、千種浩、都出比呂志、成瀬正和、西川守夫、肥後正幸、福永伸哉、
古谷毅、水野正好、木中真、森下章司、森田稔、柳田康雄、横島勝則、
和田晴吉、文化庁、大阪府教育委員会、奈良国立文化財研究所、東京国立博物館、
大阪府立弥生文化博物館、京都府立丹後郷土資料館

目 次

第1章	安満宮山古墳の位置と環境	
第1節	自然的環境	1
第2節	歴史的環境	2
第2章	調査経過	
第1節	調査の経過	7
第2節	B地点の調査	14
第3章	遺 構	
第1節	墳 丘	17
第2節	墓 坑	26
第3節	木 杓	34
第4節	墓坑遺物出土状況	34
第5節	その他の遺構	43
第4章	遺 物	
第1節	古墳出土の遺物	46
第2節	その他の遺物	74
第5章	安満宮山古墳に関する諸問題	
第1節	古墳の占地	76
第2節	墳丘の復元	77
第3節	埋葬施設及び葬送の方法	80
第4節	出土鏡及び古墳の年代観	83
第6章	保存と公開	
第1節	経 過	87
第2節	古墳の復元整備と出土品複製	87
第3節	普及啓発事業	95
付 論		
1	本田光子 墓坑出土赤色顔料の分析	101
2	肥塚隆保 ガラス小玉の分析調査	104
あとがき		

図版目次

- 図版第1 a. 安満宮山古墳 遠景(南西側から)
b. 安満宮山古墳 遠景(北側上空から)
- 図版第2 a. 安満宮山古墳 全景(南西側から)
b. 安満宮山古墳 全景(北西側上空から)
- 図版第3 a. 墓坑断面(東側から)
b. 木棺埋納坑 坑底(東側から)
c. 墓坑西半 摄影検出状況(南側から)
d. 墓丘盛土検出状況(墓坑北側)
e. 墓丘盛土検出状況(S14m付近)
- 図版第4 a. 北側地山検出状況(トレンチ3西半)
b. 北側地山検出状況(トレンチ3東半)
- 図版第5 a. 北西側地山面の状況
b. 南西側地山面の状況(トレンチ6)
c. トレンチ7全景(南西側から)
- 図版第6 a. トレンチ8全景(南東側から)
b. トレンチ10全景(南西側から)
- 図版第7 a. トレンチ11全景(北側から)
b. トレンチ12全景(南側から)
- 図版第8 安満宮山古墳全景(北東側から)
- 図版第9 墓坑全景(西側から)
- 図版第10 a. 北辺排水溝 部分(東側から)
b. 朱検出状況
c. 南辺排水溝 部分(北側から)
d. 排水口付近(西側から)
e. 排水溝断ち割り(北辺中央、西側から)
f. 排水溝断ち割り(南辺中央、東側から)
- 図版第11 木棺埋納坑
- 図版第12 木棺埋納坑 東側遺物出土状況(中央部から)
- 図版第13 木棺埋納坑 西側遺物出土状況(中央部から)
- 図版第14 a. 東端部掘り下げ状況(北側から)
b. 東半部掘り下げ状況(北側から)
c. 西鏡群検出状況1
d. 西鏡群検出状況2(清掃後)
- 図版第15 a. 鏡群出土状況(西側から)
b. 鏡群・横板材取り上げ後の状況
(西側から)
- 図版第16 a. ガラス小玉出土状況(西側から)
b. ガラス小玉出土状況南群(北側から)
c. 南群中層細部
d. 北群下層細部
- 図版第17 a. 西端部崩落土検出状況
b. 崩落土断ち割り(東側から)
c. 鉄製農工具出土状況(北側から)
d. 西端部完掘状況(南側から)

- 図版第18 a. 木棺埋納坑 東壁(西側から)
b. 北壁東部 工具痕(南側から)
- 図版第19 a. 魚形遺構 全景(南側から)
b. 配石遺構 全景(北側から)
- 図版第20 a. B地区 全景(北側から)
b. B地区 全景(南側から)
- 図版第21 1号鏡(三角縁「吾作」環状乳四神四獸鏡)
- 図版第22 a. 1号鏡鏡背面(出土直後)
b. 1号鏡鏡面
c. 1号鏡部分 神像(東王父)・獸像
d. 外区布目痕
e. 銀断面 C T画像 縦断・横断
f. 1号鏡X線写真
- 図版第23 2号鏡(「吉龍三年」方格規矩四神鏡)
- 図版第24 a. 2号鏡鏡背面(出土直後)
b. 2号鏡鏡面
c. 2号鏡部分 神像(青龍)
d. 「吉龍三年」銘
e. 規矩文細部
f. 銀断面 C T画像 縦断・横断
g. 2号鏡X線写真
- 図版第25 3号鏡(三角縁「天・下・日・月・吉」獸文帶四神四獸鏡)
- 図版第26 a. 3号鏡鏡背面(出土直後)
b. 3号鏡鏡面
c. 3号鏡部分 神像
d. 3号鏡部分 獣像
e. 鏡面
f. 銀断面 C T画像 縦断・横断
g. 3号鏡X線写真
- 図版第27 4号鏡(斜縁「吉作」二神二獸鏡)
- 図版第28 a. 4号鏡鏡背面(出土直後)
b. 4号鏡鏡面
c. 4号鏡部分 神像(東王父)
d. 4号鏡部分 獣像(青龍)
e. 銀断面 C T画像 縦断・横断
f. 4号鏡X線写真
- 図版第29 5号鏡(平縁「陳是作」回向式神獸鏡)
- 図版第30 a. 5号鏡鏡背面(出土直後)
b. 5号鏡鏡面
c. 5号鏡部分 神像(東王父・西王母)
d. 銀断面 C T画像 縦断・横断
e. 5号鏡X線写真
- 図版第31 銘文撰開1(1号鏡)
- 図版第32 銘文撰開2(2号鏡)
- 図版第33 銘文撰開3(3号~5号鏡)
- 図版第34 a. 直 刀
b. 鉄製農工具 斧・刀子・鉈・鑿・鎌
- 図版第35 ガラス小玉
- 図版第36 a. 布出土状況

- b. 布片 1 上面部分
c. 布片 2 下面
d. 布片 1 下面
- 図版第37 a. 出土布 走査型電子顕微鏡写真
b. 現代産苧麻 走査型電子顕微鏡写真
c. 布片 1 の織り密度測定位置
d. 布 A 細部
e. 布 B 細部
f. 布片 1 展開状況
- 図版第38 a. 染着材(朱面) 1
b. 染着材(朱面) 2
- 図版第39 a. 染身材(取り上げ後・上面)
b. 染身材(取り上げ後・下面)
c. 横板材(取り上げ後・下面)
- 図版第40 a. 土 器 占墳出土(表面)
b. 土 器 古墳出土(裏面)
c. 石 器 表採
d. 須恵器 表採
- 図版第41 a. 復元整備状況 全景(南西側上空から)
b. 復元整備状況 全景(北東側から)
- 図版第42 a. 古墳説明板
b. マンガ説明板
c. 墓坑シェルター 内部
d. 墓坑複製 部分

挿 図 目 次

図1 安満宮山古墳の位置	1
図2 安満宮山古墳とその周辺	2
図3 古墳周辺の地形	3
図4 調査位置図	7
図5 調査経過	11
図6 B地点平面図	14
図7 B地点の探査結果	14
図8 トレンチ配置図	17
図9 トレンチ土層図(1) トレンチ1・2・3	19・20
図10 トレンチ土層図(2) トレンチ6・7・8・9	22
図11 トレンチ上層図(3) トレンチ10・11・12	23
図12 安満宮山古墳 平面図	25
図13 墓 坑 平面図・断面図	27・28
図14 排水溝断面図	29
図15 排水溝及び木棺埋納坑台石の石材	31
図16 木棺埋納坑 横断面図	32
図17 木棺埋納坑の工具痕と土質	33
図18 木棺埋納坑 遺物出土状況 平面図(全体)	35
図19 木棺埋納坑 東半遺物出土状況平面図・断面図	37・38

図20 ガラス小玉出土状況(上層)平面図・見通し図	39
図21 ガラス小玉出土状況(中層・下層) 平面図・断面見通し図	40
図22 木棺埋納坑 西半遺物出土状況 平面図・断面図	41・42
図23 配石遺構平面図	44
図24 1号鏡(三角縁「吾作」環状乳四神四獸鏡)	47・48
図25 2号鏡(「青龍三年」方格規矩四神鏡)	51
図26 3号鏡(三角縁「天・王・月・吉」獸文帶四神四獸鏡)	55・56
図27 4号鏡(斜縁「吾作」二神二獸鏡)	58
図28 5号鏡(平縁「陳是作」同向式神獸鏡)	60
図29 直刀	63
図30 鉄製工具 斧・刀子・鉈・鎧	64
図31 鏡	65
図32 ガラス小玉の法量分布	66
図33 ガラス小玉(1)	69
図34 ガラス小玉(2)	70
図35 出土布片のフーリエ変換赤外吸収スペクトル	71
図36 横材 棚蓋材・棺身材	72
図37 土器 占壇出土	73
図38 石器・須恵器 表採	74
図39 Ⅲ地形と墳丘の復元	79
図40 復元墳丘断面図	79
図41 復元整備平面図・西立面図	88
図42 復元整備工事	91
図43 墓坑シェルター断面図	93
図44 鍋及傍発事業	97
図45 分析試料の採取位置	102

表 目 次

表1 ガラス小玉集計表 合計	66
表2 ガラス小玉集計表 南群	66
表3 ガラス小玉集計表 北群	66
表4 ガラス小玉計測表(1)	67
表5 ガラス小玉計測表(2)	68
表6 出土布の織り密度測定値	71
表7 墳丘盛上量の算定	79
表8 赤色顔料の分析結果	102
表9 ガラス小玉の比重測定結果(浮力法)	105

第1章 安満宮山古墳の位置と環境

第1節 自然的環境

安満宮山古墳は、大阪府の北東部、三島地域の東部に位置する。この三島の領域は古代の三島評の範囲に相当し、東は天王山、西は千里丘陵、南は淀川、そして北は北摂山地の山麓に限られた範囲で、現在の行政区分では、東から三島郡島本町、高槻市(摺田地区を除く)、茨木市、摺津市、吹田市・箕面市の一部を含むことになる。

三島地域は、その中央を有馬・高槻構造線を構成する真上断層帯が横断するために、北側の山間部と南側の平野部に二分される北高南低の地勢にある。北半部の大半は古生層・丹波層群の丹波山地からつづく標高

150m~700mの北摂山地が占め、その南側に大阪層群が形成する標高30m~200mの高槻丘陵、奈佐原丘陵、千里丘陵などがとりついている。真上断層は三島西部では丘陵地を分断し、東部では丘陵末端を断ち落とすように走行しているために、東部ではとくに山間・丘陵と平野部の落差が大きい。南半の平野部は、標高10m~30mの段丘と標高3m~10mの沖積地からなる。ここでは、北部山間から流れ出た水無瀬川・桧尾川・芥川・女瀬川・安威川・茨木川などの中小河川が丘陵を刻み、小規模な谷底平野や扇状地を形成しつつ南流し、その南方に大阪平野の一角をなす淀川低地がひろがっている。

安満宮山古墳は、高槻市の磐手地区にあって、高槻丘陵東縁の成合盆地から松尾川が平野部に流れ出る、ちょうどその東側の安満山山塊中腹、南西方向にのびる尾根上に位置する。標高はおよそ120m~125mである。これより東は三島の東を限る天王山山地と南側の男山丘陵がなす山崎狭隘部までの間、幅2kmほどの狭い平野部がつづき、その中央を淀川がゆるやかに蛇行しながら西南流している。いいかえれば、山城盆地の水を集めた桂川・宇治川・木津川の三川が山崎狭隘部で合流して淀川となり、大阪平野に抜け出たところに、この古墳はある。

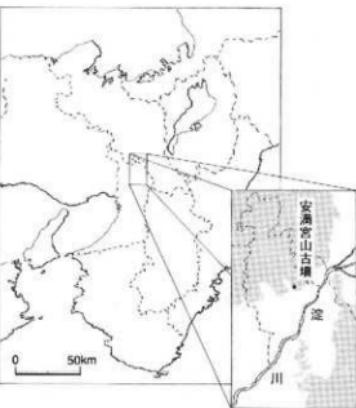


図1 安満宮山古墳の位置

古墳からの眺望は南西側に大きく開けている。南に生駒山、西に六甲山を擁して眼下に大阪湾に注ぐ淀川、そして大阪平野を一望できる。東は、山塊にはばまれて三川合流点こそかなわないものの淀川対岸の男山丘陵南部から、遠く南山城の山々をのぞむことができる。

第2節 歴史的環境

高槻市域は、北部山間から南流して淀川に注ぐ松尾川・芦川・女瀬川といった中小河川によって大きく四分される。なかでも中央部を流れる芦川の西岸には広大な富田台地(低位段丘)がひろがり、丘陵部から段丘にかけての各所で後期旧石器時代の遺構・遺物が発見されている。



- | | | | |
|----------|--------------|------------|-----------|
| 1 安満宮山古墳 | 11 芝谷古墳 | 21 中村塚古墳 | 31 津之江南遺跡 |
| 2 安満山古墳群 | 12 古曾部・芝谷遺跡 | 22 天神山遺跡 | 32 高槻城跡 |
| 3 福之庄古墳群 | 13 霊王山古墳 | 23 安満北塚跡 | |
| 4 福之庄遺跡 | 14 紅葉山遺跡・古墳群 | 24 安満遺跡 | |
| 5 翠手杜古墳群 | 15 奥坂古墳群 | 25 宿勢塚古墳 | |
| 6 桐原古墳群 | 16 真上古墳群 | 26 番地東塚古墳 | |
| 7 異原北塚跡 | 17 真上東遺跡 | 27 異原寺山古墳群 | |
| 8 異原瓦窯跡 | 18 綱領寺山遺跡 | 28 石川牛足墓 | |
| 9 桐原寺跡 | 19 綱領寺山1号墳 | 29 芳川遺跡 | |
| 10 桐原東遺跡 | 20 伊勢寺古墳 | 30 上田部遺跡 | |

図2 安満宮山古墳と周辺の遺跡

発掘調査が行われた郡家今城遺跡A・C地点、津之江南遺跡C地点、郡家川西遺跡H地点などでは、石器・石核・剥片類と調理具たる砾群が確認されており、いずれもキャンプ地と考えられている。そのうち最古に位置づけられる郡家今城遺跡C地点は、瀬戸内技法によるナイフ形石器を主体とする国府文化期に属し、近畿地方で最初にキャンプ地の実態を明らかにした該期の標式資料となっている。国府文化期とそれに後続するナイフ形石器文化のひろがりはほぼ三島全域で認められるが、細石器の類は明確でない。

縄文時代については、淀川沿いの大塚遺跡や柱本遺跡で早期・前期の土器が出土し、有舌尖頭器や石鏃の採集品も少なからずあるが、遺跡の動向はなお分明でない。発掘調査により明確な遺構を作り豊富な資料を出土したのは、後期の芥川遺跡である。土坑墓と土器棺墓からなる墓域が確認され、多量の土器や石製の利器、石皿・敲石などが出土した。土器には山陰及び東日本の影響が認められ、北白川上層1期に先行する時刻の一括資料として重要であり、東西交流を証する貴重な資料となっている。後・晩期においては、沖積地から丘陵縁辺に至る三島のほぼ全城で遺跡数が漸増し、安定的な定住化傾向がうかがえる。そして晩期末、船橋式期から長原式期にかけて遺跡数が飛躍的に増加し、三島地域への稻作文化の波及と受容がはじまる。

三島の弥生時代は、東部・検尾川流域の安満遺跡と、西部・安威川流域の東奈良遺跡(茨木

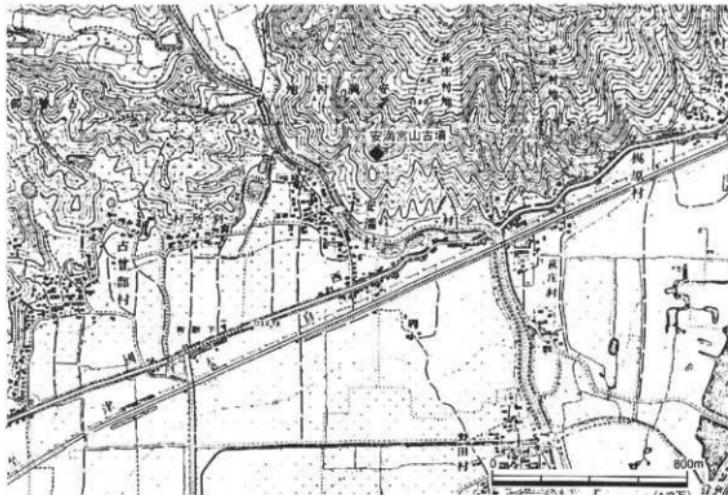


図3 古墳周辺の地形 (1890年)

市の両環濠集落の成立をもって始まったといえる。

安満遺跡は、桧尾川が形成した扇状地の末端、標高7~10m前後に立地している。遺跡の範囲は東西1.5km・南北0.6km。面積は900,000m²におよび、中央に居住域、その南側に生産域、外辺部に墓域が展開している。前期の集落は、居住区のまわりに二重の環濠をめぐらせ、南側に用水路を掘削して井堰を設け水田を經營し、すぐ東側に墓域を形成するなど、すでに安定した農耕集落が営まれていたことを示している。中期の段階では、方形周溝墓を優に100基以上確認していく、集落がひきつづき拡大していくことが知られる。出土品も多彩で、生駒西麓からの搬入土器をはじめ、磨製穂摘貝の原材料となる近江高島産の粘板岩、北陸産の玉など、淀川を介しての他地域との盛んな交流を示唆している。また北摂型広口壺や摂津型水差といった三島独特の器形や複合描文の創出など、他地域にも影響を及ぼす独自の発展を見いだすことができる。

この時期、安満西方の標高20~40mの丘陵上には天神山遺跡や慈願寺遺跡などがあらたに出現し、低地だけでなく丘陵部の開発がすんでいったことがうかがわれる。天神山遺跡は中期全般にわたって継続し、住居跡や方形周溝墓群などが検出されているほか、突線紐II式の銅鐸が出上している。

後期になると、安満遺跡や天神山遺跡は急速に衰退し、かわって標高60~100mの急峻な丘陵上に高地性環濠集落である古曾部・芝谷遺跡が出現する。総数82棟の居住区に想定延長1000mにも及ぶ環濠をめぐらし、河内・近江との関係を保ちつつ石器製作を行なながら瀬戸内系の上器や鉄斧・鉄鎌をもつ、そうした遺構・遺物の在り方に安満遺跡と古曾部・芝谷遺跡が一連の集落群として密接に結びついていたことがうかがわれる。古曾部・芝谷遺跡の存続時期は短く、同時期安満山南斜面に出現した見張り場、萩之庄遺跡(竪穴住居2棟)とともに、後期中頃には廃絶してしまう。古曾部・芝谷遺跡から東へ尾根をくぐった丘陵上にあらたに紅葉山遺跡がひらかれ、竪穴住居が継続的に合わせて18棟営まれているが、もはや提点的集落と呼ぶにふさわしい規模・内容の集落は安満には認められない(ただし安満遺跡に弥生時代後期後半~古墳時代初頭の集落が存在したことは疑いなく、居住形態の変化で認識できていないのかもしれない)。こうした弥生中期末から後期の集落の移動は、およそ畿内とその周辺地域にみられる現象であり、そこには新たな鉄器文化の流入にさいして在来の物資流通システムが再編成される過程がうかがわれる。

弥生時代後期後半以降、安満を核とする桧尾川流域の遺跡群にかつての勢いはなく、かわって西方、芥川流域の大藏司・芥川・郡家川西・津之江南・芝生といった遺跡群が展開していく。この趨勢は古墳時代にはいっても変わらず、のこされた古墳をみるとときいっそう鮮明になる。

古墳時代には郡家川西遺跡の背後にそびえる南平台丘陵上に、前期の前方後円墳3基を盟主とする弁天山古墳群が展開する。ここでは前期初頭に位置づけられる弁天山A1号墳(120m)を端緒に、B1号墳(100m)、C1号墳(70m)と、三島の首長系譜を追うことができる。前期末にはつづいて丘陵巣に郡家車塚古墳(86m)、中期にはいって丘陵正面の平野部に帆立貝式の前塚古墳(94m)が築造される。以後系譜をたどれる大型古墳は姿を消すが、南平台丘陵最奥部には前方後方墳をまじえる幕谷古墳群が営まれ、さらに西方の茨木市域には中期中頃、太田茶臼山古墳(226m)が築造される。その契機は、おそらく平野部の開発による「三島藍野」の成立にあり、このとき埴輪調達のために新池遺跡が開かれ、上室周辺につづきと築かれた土保山古墳(円墳、30m)や番山古墳(帆立貝式、56m)へも埴輪を供給している。

後期には眞の繼体陵とされる今城塚古墳(190m)が三島の中心部に築造され、再開された新池遺跡は埴輪生産のピークを迎えた。同時期、在地の古墳は小規模で、川西4号墳(円墳、14m)などがある。そして前方後円墳の築造が止み横穴式石室をそなえた群集墳の時代、山麓部には塚原・塚脇というそれぞれ110基・50基を数える古墳群が形成される。やがて終末期、著名な阿武山古墳や塚原N2号墳・N5号墳の築造を最後に、三島での古墳づくりはやむ。

一方、松尾川流域では、古墳時代前期から中期にかけて東岸の安満山山斜面に萩之庄1号墳・2号墳、西岸天神山丘陵東部に紅葉山C3号墳やC2号墳が築造されている。萩之庄1号墳は、標高100mほどの尾根上に築かれた全長約20mの前方後円墳である。埴輪を伴い、主体部は横穴式石室で、菅玉や石鏡、車輪石など多數の碧玉製品が出上している。2号墳の内容は不明だがともに前期末と考えられている。中期の紅葉山C3号墳は直径18mの円墳で主体部は木棺直葬2基、周濠内から1基の埋葬施設が検出されている。碧玉製品や滑石製小玉、鉄製品多数が出土した。C2号墳は中期後半、一辺約20mの方墳である。主体部は木棺直葬2基で玉類や鉄製品が出土し、葺石や円筒・形象埴輪が確認されている。この間、一帯には木棺直葬の小墳(10m以下)が10基程度築かれている。

後期中頃以降、大神山丘陵上には狩獵埴輪群で知られる佐神車塚古墳(60m)、中将塚古墳(50m?)の前方後円墳2基のほか、宿弥塚・伊勢寺・羅王山など横穴式石室をそなえた古墳が点在し、群集墳としては安満山山塊南斜面に約40基の安満山古墳群がある。安満山山塊の東方に位置する梶原の山麓には梶原古墳群が所在し、近年名神高速道路拡幅工事に伴って横穴式石室をそなえた円墳18基の調査が行われた。最大の梶原D1号墳(25m)からは、凝灰岩製の家形石棺と希少な双葉剣菱形杏葉など金銅装の馬具が出土している。

後代の律令期、山陽道が三島を貫き、地域の政治経済の中心地となる郡衙は芥川西岸の郡家に置かれるが、この梶原には梶原寺や山陽道大原駅家と考えられている梶原南遺跡が所在する。三島地域の求心力が芥川西岸地域へと働くなかで、淀川が大阪平野へ抜け出る梶原か

ら安満にかけての地域には、ときの政権の注意がつねに注がれていたとみられるのである。

注1 森田克行 後掲文献1992

参考文献

- 大船幸弘 1978 「都家今域遺跡発掘調査報告書—旧石器時代遺構の調査」高槻市文化財調査報告書第11冊 高槻市教育委員会
- 川端博明 1998 「近原古墳群」名神高速道路内遺跡調査会
- 小林健太郎 1977 「『高槻の自然環境』『高槻市史』第1巻 高槻市役所
- 小林行雄 1932 「安満日類土器考」『考古学』第3巻4号
- 橋本久和 1995 「芥川遺跡発掘調査報告書」高槻市文化財調査報告書第19冊 高槻市教育委員会
- 原口正三 1967 「弁天山C1号墳」「弁天山古墳群の調査」大阪府文化財調査報告第17冊 大阪府教育委員会
- 1973 「高槻市史」第6巻考古編 高槻市役所
- 1977 「『考古学からみた原始・古代の高槻』『高槻市史』第1巻 高槻市役所
- 1986 「大阪府安満遺跡とその周辺の遺跡」『弥生文化の研究7』
- 宮崎康雄 1996 「古曾部・芝谷遺跡」高槻市文化財調査報告書第20冊 高槻市教育委員会
- 森田克行 1988 「複合構造文」『弥生文化の研究』10
- 1989 「1大阪府「安満遺跡」【探訪】弥生の遺跡」畿内・東日本編
「三島地方の織文土器」『高槻市文化財年報 昭和61・62年度』高槻市教育委員会
- 1992 「7 桶津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿篇II
- 1993 「先史時代の三島」「新池」高槻市文化財調査報告書第17冊 高槻市教育委員会
- 1995 「桶津」『全国古墳編年集成』

第2章 調査経過

第1節 調査の経過

安満宮山古墳の所在する安満山南西斜面には、高槻市公園墓地が經營されている。国有林の払い下げを受けて山麓に墓園を造成、昭和44(1969)年に開園された。現在、全体計画面積278,500m²のうち第3期分まで終了しており、開設面積は116,076m²、墓所数4,000基を数える。

この安満山に横穴式石室をそなえた古墳が分布することは早くから知られていたが、公園墓地造成工事(第1期)が契機となって分布調査が行われ、横穴式石室を有する古墳が40基以上分布することがあきらかになった。そのため工事に先立って、高槻市教育委員会により工事範囲にかかる円墳5基の発掘調査⁽¹⁾が実施され、以後、一帯は安満山古墳群として周知されてきた。本古墳東方約400mに位置する萩之庄1号・2号墳及び萩之庄遺跡の発見と調査も、このころに行われた一連の安満山踏査の成果の一つである⁽²⁾。

昭和61(1986)年4月には、第3期工事に先立って本古墳と同じ尾根の北側約80m地点で確認調査を実施している。この調査では表土直下もしくは薄い流土下に岩盤を認め、摩滅した埴輪片1点を採集したのみで何ら遺構は検出しなかった⁽³⁾。工事は計画どおり施工され、古墳の存在は全く気づかれないままに北側約30m地点までの墓園造成が行われた。

こうした経過のなか、同公園墓地全

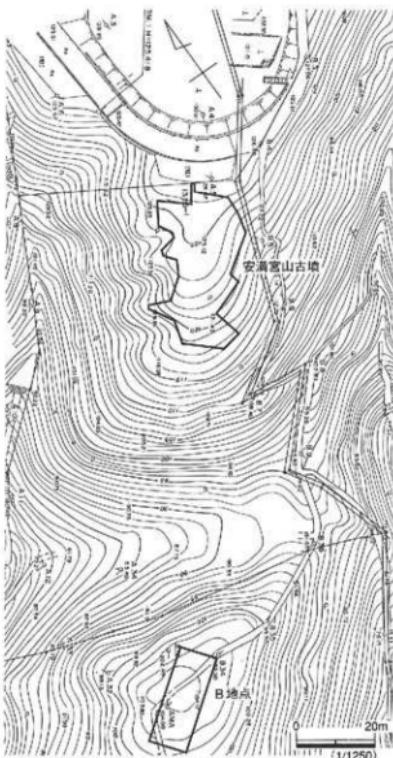


図4 調査位置図

体計画の進捗に向けて拡張計画が日程にのぼり、基本計画策定のための事前調査の一環として埋蔵文化財調査が検討された。そこで高槻市教育委員会では、所管の高槻市環境衛生部公衆衛生課と協議をすすめ、平成8(1996)年秋に計画対象地の現地踏査を実施した。そして次に掲げる確認調査予定地2地点(A地点・B地点)を選定し、現地調査は翌平成9年度に実施することとなった。

A地点：墓園の既設駐車場南側に隣接する、尾根上の狭い緩斜面。昭和61(1986)年確認調査地の南側約80mにあたる。

B地点：A地点の南西約100mに位置する同一尾根上の独立丘頂部。通称「前山」と称する。

現地調査は、平成9年6月19日付で高槻市長から土木工事等に伴う発掘通知書が提出されることを受けて、トレーンチ調査による遺構・遺物の有無等の確認を目的として、平成9年7月3日に着手した。まずA地点にトレーンチをト字形に設定して人力で掘削を開始。作業3日目の7月7日にトレーンチ内の溝状遺構の掘削・立木抜根作業中に銅鏡が出土し、本古墳の存在が明らかとなった。そのため教育委員会ではただちに現場保存を図る一方、庁内関係先及び大阪府教育委員会等関係機関とも協議のうえ、調査方針を確認調査から古墳の発掘調査に切り替えて調査を進めることとなった。

すなわち墓坑をいったん封鎖して、墳丘及び墓坑掘形等の規模確認を念頭に調査区を拡張、外回りの状況を一定明らかにしたうえで墓坑の調査にとりかかることとしたのである。そこで以後調査区を拡張して墳形等の把握に努めつつ、7月20日に墓坑の掘り下げに着手して遺構・遺物の検出作業をすすめ、途中8月2・3日の現地説明会、8月30日の緊急報告会などをはさんで9月12日までに実測・取り上げ等の記録作成作業を終了した。この間、本古墳の重要性の認識が深まるなかで現地保存の可能性が探られ、斬ち削りや埋め戻しなど調査手法も保存公開を念頭に行うこととなった。また古墳の調査進捗をはかりながら8月7日から27日まで、B地点の調査を実施している。記録作成にひきつづき実施した古墳の埋め戻し作業は10月3日に終了し、これをもって高槻市公園墓地拡張予定地内の今次確認調査を完了した。

調査日誌から(図5-1~8)

平成9年

7月3日(木) A地点の調査に着手(図5-1)。尾根筋に沿ってト字形に幅1mの南北トレーンチ1及び東西トレーンチ2を設定。下草伐採後人力にて掘削をはじめる。深さ0.2~0.3mで固結した砂層や粘土層、岩盤に達し、遺物・包含層とも認められない。唯一トレーンチ1の中央で、さっくりとした黄褐色土を認め掘り下げる。深さ1.4m以上あり壁はほぼ垂直、

溝状遺構とする。埋土は均質で無遺物。

7月4日(金) レンチ1を北側へ延長、人頭大の石を用いた石組みを検出。一方溝状遺構は深さ1.6m、底幅0.8m、上縁幅3.6mの二段掘りと判明。サブレンチで東端を検出、西側の崖面では検出できず長さ5m強と推定し、さきに東側を追求することにして推定範囲の立木伐採にかかる。

7月7日(月) 溝状遺構内の立木を伐採。埋土を掘り下げつつ抜根作業中に、銅鏡が出土し墓坑と判明(図5-2)。ただちに作業を止め3面の存在を確認、排土を回収する一方で埋文センターへ連絡し応援を仰ぐ。この間動いた鏡片を原位置へ納め、出土状況を観察。確認された銅鏡は上から1号鏡(三角縁環状乳神獸鏡)、2号鏡(方格規矩鏡)、3号鏡(二角縁獸文帶神獸鏡)の3面。1号鏡は一面に赤色顔料がのつていて鏡背面を上、2号鏡・3号鏡は鏡面を上に3面重ねて置かれており、1号鏡と2号鏡の間には白色の布片が認められた。鏡群を挟んで上下に木質がのこり、それらの上には灰白色の細砂が厚さ1~数cm堆積していた。また墓坑断面をあらためて観察したところ、坑底に赤色顔料のごく薄い層を確認した。午後、小雨のなか現状を記録。木質の下につづく鏡片は原位置にとどめ、鏡と布の応急取上げを行って墓坑を厳重に封鎖した。

7月8日(火) 墓坑断面の記録及び墓坑養生作業。

7月9日(水) 墓形確認のための調査区張張に備え、樹林伐開。レンチ3・4・5を設定、掘削を進める。午後より台風接近のため墓坑周辺の養生強化。

7月10日(木)~13日(日) 台風8号に伴う風雨のため現場作業中止。古墳名を安満宮山古墳と命名。

7月14日(月) 墓坑西半部の南側から精査に着手。レンチ1圧化。墓坑南側で盛土らしき上層と地山整形とみられる部分を見いだす。

7月15日(火) 墓坑西半1段目の東西断面を圧化。北側の表土を除去し、墓形を検出する。レンチ6設定。レンチ1を北側駐車場まで延長、駐車場に沿ってレンチを設定。レンチ1とレンチ2で両された墓坑東南側から表土除去に着手。

7月16日(水) 墓坑西半の1段目掘り下げ。坑底周縁で幅0.2mの小砾を敷きつめた排水溝を検出し精査に努める。西辺の南半分は谷の貫入で失われている。

7月17日(木) レンチ1とレンチ3で両された墓坑北西方の表土除去に着手。小雨が強まるなかテントを設営、8日ぶりに墓坑東側の養生を解いて原位置の2号鏡片を取り上げて「青龍三年」の銘を確認。1段目を墓坑、2段目の掘り込みを本棺埋納坑と呼称する。

7月18日(金)・19日(土) 雨天のため現場作業中止。

7月20日(日) 墓坑精査に着手(図5-3)。排水溝精査中、トレンチ2内の排水溝上面で赤色顔料粒を検出。平行して木棺埋納坑東半部の壁面清掃。埋土除去をすすめ、小口近くで坑底南側から扁平な割石数個を検出。西半部は埋納坑埋土を深さ0.3mまで除去。土器片1点検出(図5-4)。一方埴丘については、墓坑を中心に約30m四方の範囲の樹林を伐開、表土除去をすすめる。南側では低い段状構造を3ないし4段検出。北側右組み付近では拳一人頭大の石群あり、地山まで掘り下げを行う。埴丘平面図作成に着手。

7月21日(祝) 墓坑精査。埋納坑東半部、北側を坑底まで掘り下げる前日検出した石の上面に赤色顔料の付着を確認。さらに1~3号鏡の西側0.2mで、新たに銅鏡2面(4号鏡・5号鏡)とガラス小玉10数個、墓坑直交方向の板材を検出。板材は坑底より浮いており、1~3号鏡すぐ西を含め約0.3m間隔で3本検出。断面記録後、銅鏡付近を清掃して応急的に取上げる。4号鏡は「吾作」銘の二神二獸鏡、5号鏡は「陳是作」銘の向向式神獸鏡で、どちらも鏡背面を上に重ねて置かれていた。1号鏡のような赤色顔料の付着はみられない。

埋納坑西半部については、南側から掘り下げをすすめ(図5-5)、南辺小口近くで赤色顔料の付着した扁平な川原石数個を検出。同レベルで小口部~北辺にかけて灰白色細緻混じりの粘質土層を認めた。同層をのこして黄褐色理土除去をすすめ、南辺西端から東へ1.0mのところで鍔刀の切先部を検出。埋納坑は東側が幅広く、副葬品出土状況からも被葬者頭位は東側の可能性強まる。墓坑排水溝については、西南部をのこしほば検出終了。南辺はやや石が大きく幅も広い。埴丘部については表土除去・測量図作成を続行。前方後円墳等の可能性うすれ小さな方形墳との判断に傾く。

7月22日(火) 木棺埋納坑内の遺物検出作業。中央部及び西側を精査、西側南辺では鉄刃に続き板状鉄斧、有袋鉄斧、ヤリガンナを検出。中央部ではガラス小玉の広がりを追求、南北2群あり西側は板材の下へ続くこと、南群は連接状況を一定とどめることなどが判明。排水溝は検出作業を終了。市長、助役、教育長視察。

7月23日(水) 墓丘部表土除去作業と並行して墓坑細部の写真撮影を行う。

7月24日(木) 墓坑全景撮影。のち墓坑尖測準備。

7月25日(金) 調査区を北側へ拡張し石群を追求する。尖頭器・須恵器片出土。墓坑排水溝・埋納坑遺物出土状況の実測に着手。台風接近にそなえ墓坑を厳重に封鎖し作業を終える。

7月26日(土)~29日(火) 台風9号直撃、さらに雨はつづき現場作業中止。墓坑埋土の洗浄作業に集中。29日埋文センターで報道発表。

7月30日(水) 墓坑尖測。現地説明会準備に着手。



5-1 調査着手前



5-2 東鏡群出土状況



5-3 墓坑調査風景



5-4 土器片出土状況



5-5 木棺埋納坑西側掘り下げ状況



5-6 現地説明会風景



5-7 棺材取り上げ



5-8 墓坑養生埋め戻し

- 7月31日(木) 墓坑実測。遺物出土状況終了、レベル測定。
- 8月1日(金) 排水溝実測、出土状況見通し図作成。墓坑及び調査区清掃。
- 8月2日(土)・3日(日) 13時～16時、現地説明会(図5-6)。参加者初日約2,000人、二日目約4,500人。炎天下長時間お待ちいただき見学数分にて参加者に申し訳なし。
- 8月4日(月)～6日(水) 鉄器取上げ。鉄刀・板状鉄斧取上げ後、ヤリガンナ3点の下で鎌・刀子各1点を検出、図化。ガラス小玉検出作業。埋納坑西端部を精査、赤色顔料の付着した石を北辺からも検出。
- 8月7日(木)～11日(月) 全景写真撮影準備。7日から安満宮山古墳群B地区の調査に着手、同日下草伐採・探査準備。8日、遺跡探査を実施。
- 8月12日(火) 墓坑及び全景写真撮影。高槻市議会議員団来訪。13日～17日盆休み。
- 8月18日(月)～22日(金) 棺蓋材・横板材をウレタン養生して取上げ後、ガラス小玉検出作業を行って出土状況等を撮影。北側の配石遺構を実測、撮影。
- 8月25日(月)～29日(金) ガラス小玉実測、現状で2群合計1002個確認。埋納坑の縦断面・横断面実測。排水溝断ち割り。埴丘南方のトレンチ実測及び平面図作成。棺身材をウレタン養生して取り上げ(図5-7)。
- 8月31日(日) 高規現代劇場中ホールにて「安満宮山古墳緊急報告会」開催。基調報告鍼ヶ江、基調講演森田克行、記念講演原口正三氏・木野正好氏。参加者353人。
- 9月1日(月)～5日(金) 埋納坑壁面等補測。ガラス小玉は連接状況・レベル等を記録後、アクリル樹脂で固定してウレタン養生し2塊で取上げた。各トレンチ及び北側配石遺構埋め戻しに着手。
- 9月8日(月)～12日(金) 墓坑補測・撮影及び赤色顔料・石等の試料採取等を行い、墓坑埋め戻し準備をする。
- 9月15日(月)～10月3日(金) 墓坑及び周辺の埋め戻し作業(図5-8)。川砂を詰めたビニール袋を排水溝及び埋納坑底面に敷き詰めたのち、ブルーシートを介して上蓋で掘形上面まで埋め戻し、さらにシートを挟んで土を積み、風雨による侵食や雨水浸透を極力抑えるよう努める。10月3日、作業を終え本古墳の現地調査を完了した。

第2節 B地点の確認調査

安満山古墳群B地点は、安満宮山古墳と同一尾根上に位置し、古墳からは南西方へ約100m隔たっている(図4)。標高は約105m(O.P.)で古墳との比高差は25m足らずであるが、この間は西側からの谷の貫入によって深さ約40mの鞍部となっていて独立丘の外見を呈する。地元では通称「前山」と呼ばれており、丘頂をややはざれたところに三角点が設置されている。高槻市公園墓地の拡張予定地内にあたりが、現状はクヌギ・カシ・ヤマモモなどが密生する国有林であり、農水省大阪営林局京都営林署と協議のうえ、原状復帰を条件にその許可を得て確認調査を実施した。

調査対象地は、丘頂部の南西向き緩斜面約450m²(東西方向12m、南北方向40m)の範囲である。「前山」の通称からうかがわれるよう、平野部からは安満山山塊を背景に樹林に覆われ

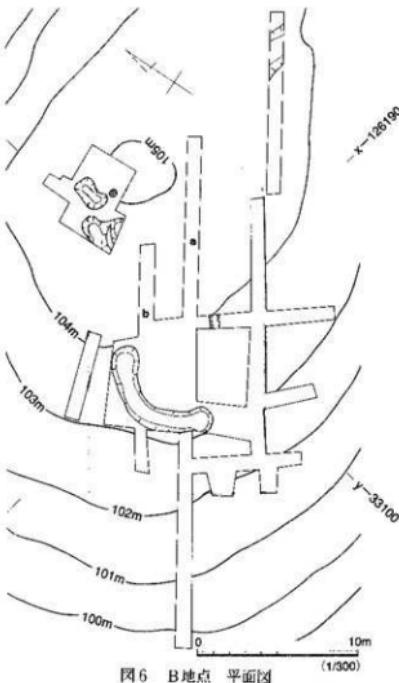


図6 B地点 平面図

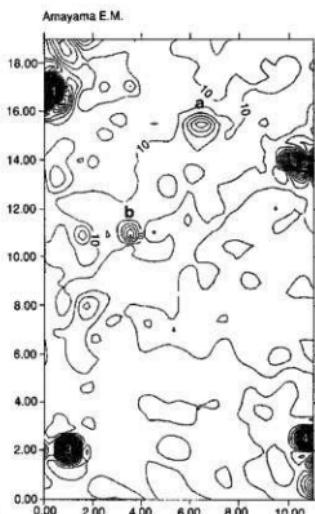


図7 B地点の探査結果

図6中央の範囲で囲んだ部分が探査範囲。
1・2・3・4・a・bは特異点。
印し1～4は地表の金網片等の可能性が大。

た丘頂部がひときわ目立ち、A地点の状況に鑑みて何らかの埋納遺構等の存在も予想されるため、事前に遺跡探査を実施した。実施にあたっては奈良国立文化財研究所の協力を仰ぎ、同研究所・西村康氏の指導によって電磁誘導探査法による探査を行った⁽¹⁾。

探査は対象地のほぼ中央、東西11m×南北19mの範囲について行い、図7に示すように6か所(1~4、a・b)の磁気特異点を認めた。そこで調査は、それら特異点をカバーするよう幅1mのトレンチを設定し、人力で掘削して遺構・遺物の検出に努めた。作業は、とくに井戸状の磁気特異点(a・b)について慎重に行ったが、結果的に遺構は検出されず、遺物も全く出土しなかった。しかし発掘の結果明らかになった地山の起伏等は探査結果にあらわれた島状の構造とよく符合することが判明し、重要な成果となった。

調査の結果、各トレンチとも厚さ0.05~0.15mの腐食土を除去するとただちに表層が細緻化した岩盤が露呈し、堆積土はほとんど存在しない状況が明らかとなった(図6、図版第20a-b)。そのなかで黄白色ないし黄褐色上層が北東隅と中央部の2か所に認められたため、トレンチを拡張して追求した。その結果北東隅では径0.2m、深さ0.15mのビット1個と、2.1m×1.1m、深さ0.3mの不整な長方形の窪み、それと方向を同じくして南へ続く深さ0.2m、幅1.2m以上の溝状の窪みが検出された。窪みの形状はどちらも岩盤の節理の方向性と一致していて、埋土は明黄褐色上で遺物は認められなかった。また中央部では延長8.5m、幅1.1~1.5m、深さ0.3mの湾曲した溝状の窪みが確認された。表面は風化が進んだ岩盤であり、埋土は黄褐色上で遺物は何ら出土しなかった。これらの埋土はいずれも単純層であり、窪みは樹根もしくは風倒木の類と考えられる。このほか中央部と南東部にそれぞれ幅0.5m・深さ0.05m、幅2.1m・深さ0.25mの溝状の窪みが認められたが、腐食土層が0.05~0.1m覆っているだけで地表に起伏がそのままあらわれており、水筋と考えられた。

以上のように、B地点の確認調査では遺構が存在する兆候は認められず、遺物も全く出土しなかったため、本調査を実施する必要性はないものと判断された。立地状況からすればむしろ意外な結果だったが、それにはB地点の岩盤の状況—安満宮山古墳のそれと比べて5cm掘り下げるのも困難なほど堅く、粘土層の貫入や流土・堆積土層もみられない—が与かっているのかもしれないと思われた。

注1 原口正三 1973 「安満山古墳群」『高槻市史』第6巻考古編 高槻市役所

2 原口正三前掲書、「萩之庄古墳群」

3 高槻市教育委員会 1989 「高槻市文化財年報 昭和61・62年度」

4 電磁誘導探査は、簡易型の金属探知機で地表面の金属性片を検知清掃したのち、カナダGeonics社製EM38型を使用して1mピッチで測定された。結果は第2次磁界の等強度曲線で表されている(図7)。

第3章 遺構

第1節 墳丘

a. 立地と現況

古墳は、北東から南西方向へのびる狭長な尾根の先端部を占め、標高は120.5～125mをはかる(図版第2-8)。一帯はマツ・クヌギ・カシ・ヤマモモ・スギなどが混在する二次林である。以下、便宜上この尾根筋に沿って山側を北、直交方向を東西として記述する。

尾根筋を拓いて設けられた北側の駐車場の標高は約126mあり、そこから南へ長さ約20m、幅は駐車場寄りで10m、先端で5mほどの平坦な緩斜面が舌状にのびている。傾斜変換点は124.5～124.0m付近にあり、尾根の東・西斜面はそのまま、東側深さ40m・幅50m、西側深さ35m・幅50mをはかる開析谷に一気に落ち込んでいる。加えて西斜面は3本の小開析谷が西側から貫入しており、中央の小谷は尾根筋の半ばへ迫り、墓坑の西南側が流出するほどに抉りこんでいる。小谷は北からそれぞれ幅3.5m・深さ3m・幅15m・深さ8m・幅10m・深さ5mある。谷底には崩落した岩塊が多数みられ、小谷の間に岬状にのこった部分も細礫化した岩盤が露出していて、侵食は現在も進行している。南側斜面は幅約13mの斜面地となっている。斜面裾には短い緩斜面が取りつき、その下方は東西斜面がまわりこんで尾根前方「前山」との間の鞍部につづいている。

以上の状況から調査前には自然の尾根地形と判別がつかず、確認調査のため設けた

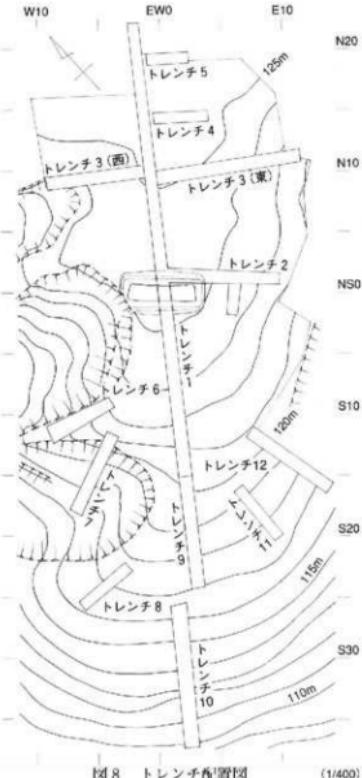


図8 トレンチ配置図

(1/400)

トレンチ 1において墓坑が検出され、古墳の発見に至ったものである。古墳の盛土は後世の崩壊流出や削平によってその大半が失われ、墓坑も上半が削平されていた。地山は赤褐色～黄褐色の風化の進んだ泥岩・砂岩系の岩盤もしくは礫土で、おむね厚さ0.05～0.1mの表土直下に検出された。

b. 各トレンチの所見

古墳の規模形状及び地山面の状況を探るために、尾根上に幅1mのトレンチを12か所設定した(図8)。トレンチ1・2は当初の確認調査段階で設定したもので、3～12は測量区の拡張に伴い、それぞれ斜面に平行もしくは直交するように設けた。

トレンチ1 尾根筋に沿って設けた南北方向のトレンチである(図9、図版第3)。北側駐車場から緩斜面を縱断して南側傾斜面まで幅1m、延長37.7mある。地山面の標高は125.95m～119.2mをはかり、比高差は6.75mある。基本層序は表土(腐食土)0.05～0.15m、地山である。地山は赤褐色ないし淡黄褐色の風化がすんだ砂岩系の岩盤、もしくは岩盤由来の礫土及び粗砂である。黄白色及び赤褐色粘土層の貫入が南北方向にみられ、地山面では縞状の多彩な色調・土質が観察された。

このトレンチでは、N10.3m～N8.5m地点で石組みを、N1.75m～S1.55m地点で東西方向に設けられた墓坑・木棺埋納坑を検出した。また墓坑南側のS9.5～S13.25m地点では地山整形痕とみられる直線的な傾斜面を検出している。なおトレンチ北端から南2.0mの間は駐車場建設のさいに地山面に達する改変を受けている。

北側の石組みは、地山を0.05～0.25m掘り込み人頭大の石を据え並べたもので、その北側には地山面上に厚さ0.3m、長さ6.5mにわたり拳大角螺旋混じりの淡褐色土層(整地層)が認められた。この整地層はトレンチ東側にはつづかず、ほぼ石組みの延長ラインから西に納まっていた。

墓坑掘形は上線幅3.5m、現存深さ0.4mの断面逆台形で周縁に排水溝をそなえ、中央に一段深く、断面U字形で幅1.3m、深さ1.2mの木棺埋納坑が掘られている。埋土は表土直下からほどんど坑底まで、さっくりとした均質な黄褐色土が1.6mにわたってつづき、わずかに坑底直上で厚さ数cmの細螺旋混じり粘土層と細砂層、坑底に朱面が認められた。

墓坑北側では、掘形に切られた灰白色粘土粒混じりの黄灰色土層を地山面上に認めた。掘形際の厚さは0.2m、地山面の上界にしたがい薄くなりN3.7m地点でおわっている。トレンチ東側では同層は検出されず、東側はトレンチ1内に納まっていたものとみられる。上は比較的綿まっており、地山粘土塊を切っていることと考え合わせ古墳の盛土と判断された。

墓坑南側は、表土直下で岩盤由来の赤褐色及び黄褐色礫土となるが、S9.5～S13.25m地点

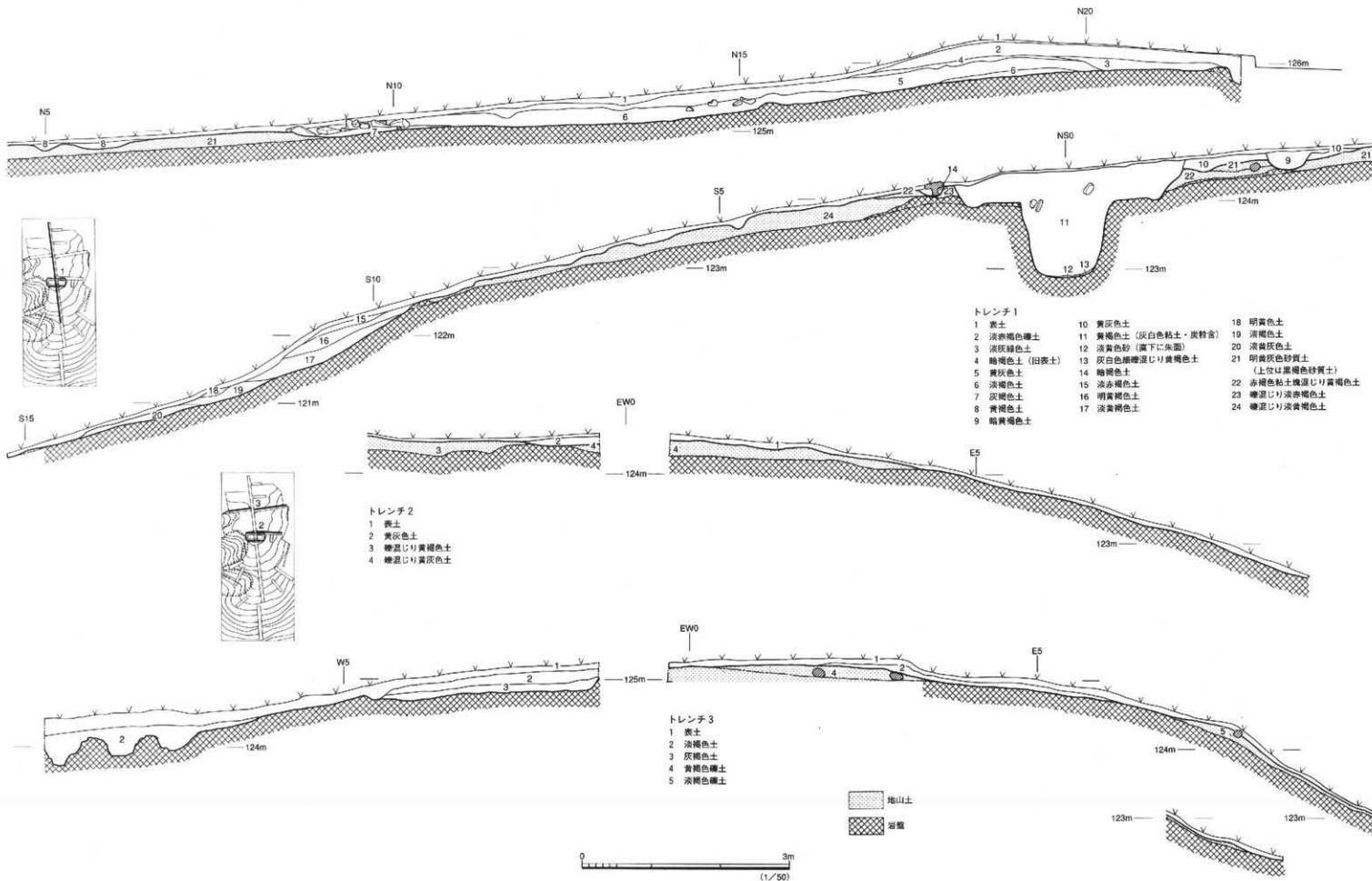


図9 トレンチ上層図(1) トレンチ1・2・3

の直線的な傾斜面には最大厚さ0.5mの黄褐色ないし淡赤褐色上層が堆積しており、流出土と判断された。流出土層の下部には、傾斜面標からS14.3m地点まで、厚さ0.2mの淡黄灰色及び淡褐色上層がつづいている。両層は界面及び上面がほぼ水平方向であり、盛土と判断される。それより先は表土直下ですぐ地山となる。したがって古墳南辺は盛土層の先端、S14.3m付近と考えられる。溝・段などの区画施設は認められない。北辺については上面が削平されており不明である。

トレンチ2 トレンチ1の途中から東へ、緩斜面を横断して東側斜面に設けたトレンチである(図9)。墓坑掘形の東半部北辺にかかる結果となったが、排水溝はトレンチ南側の底で検出し得た。幅1m、長さ20mあって地山面の標高は124.45m～122.5mをはかり、比高差は1.95mである。層序は表土(腐食土)0.05～0.1m、以下すぐに地山となり、盛土・流出土とともに認められなかった。地山はトレンチ上半(緩斜面)では疊上、下半斜面部ではしっかりした岩盤である。斜面部に溝・段などの区画施設は認められなかった。途中、南側へサブトレンチを設定したが表土直下で地山を検出したにとどまる。図9では墓坑掘形西半部壁面の土層を付した。

トレンチ3 緩斜面の北辺部に、尾根を横断するようトレンチ1と直交して設けた長さ30mの東西トレンチである(図9、図版第4)。地山面の標高は125.2～122.4m(東側)であり、比高差は2.8mある。東半部では表土直下で疊土の地山となり、盛土・流出土層ともみられなかった。また地山整形痕や溝、遺物などは検出されなかった。一方西側の淡褐色上整地層は、小開析谷の岩盤部でおわっていて、西側から貫入した谷先端の溜みを埋めるようにほどこされていることがうかがえる。

トレンチ4・5 緩斜面北東側、駐車場寄りに東西トレンチを2か所設けた。層序は、トレンチ4では表土0.1m、以下堅く綿まとった淡黄褐色粗砂層(地山)となり、トレンチ5では表土0.05m、黄褐色砂質土(盛土)0.3～0.4m、以下堅緻な黄橙色の岩盤(地山)である。盛土下部には腐食土層が縞状に認められ、駐車場建設に伴い地山が削平されていることが知られた。なお駐車場南縁に沿ってトレンチを設け断面を観察した結果、表土・盛土(0.05～0.3m)以下は堅緻な岩盤となり、駐車場は尾根筋を平坦に削平して建設されたことが確認された。

トレンチ6 古墳西南側には、中央と南の小開析谷に挟まれて岬状にのこった西斜面があり、南斜面とゆるやかな稜をかたちづくっている。そこで旧地形等をさぐるためにトレンチ6を設けた(図10、図版第5b)。表土直下は、風化がすすみ節理に沿って表層が細礫化した岩盤であった。流土など堆積土層は認められず、遺物は検出されなかった。トレンチ先端は鞍部にあたり、前方はいったん約0.4m高くなったち急傾斜で下っている。なお地山面の状況は、中央と北の小開析谷の間にのこる部分も同様であった(図版第5a)。

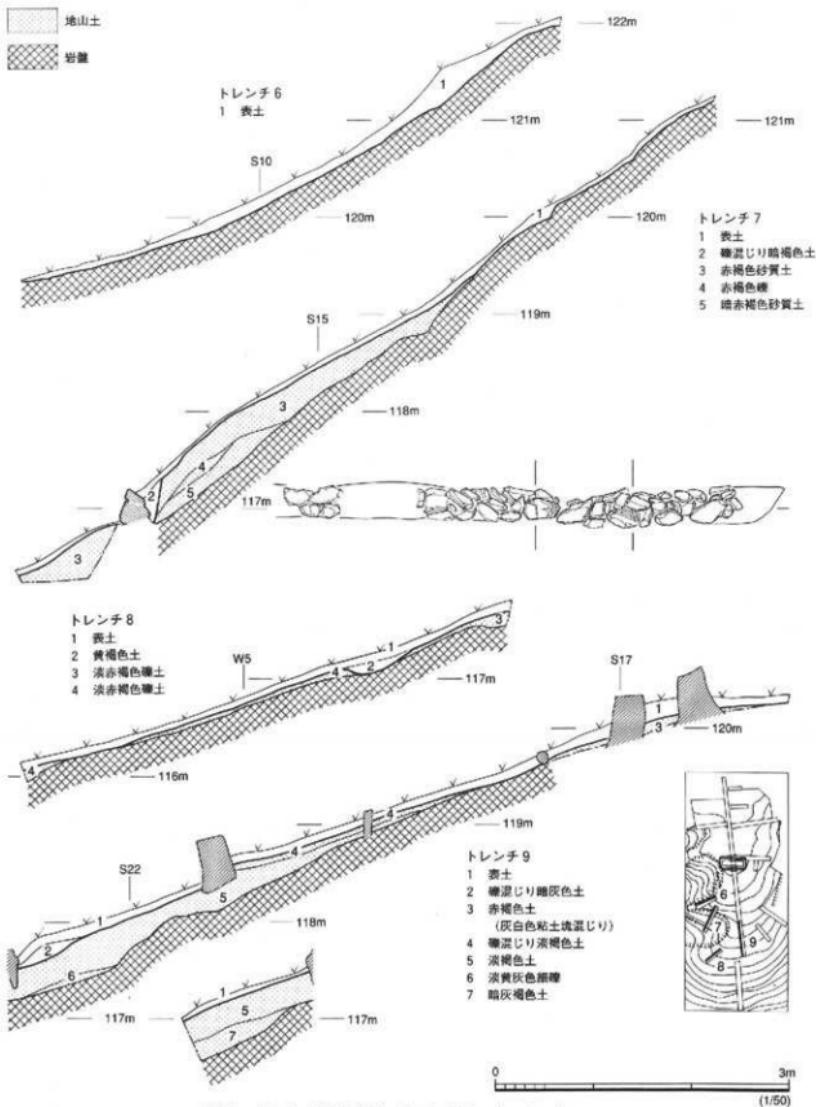


図10 トレンチ土層図(2) トレンチ 6・7・8・9

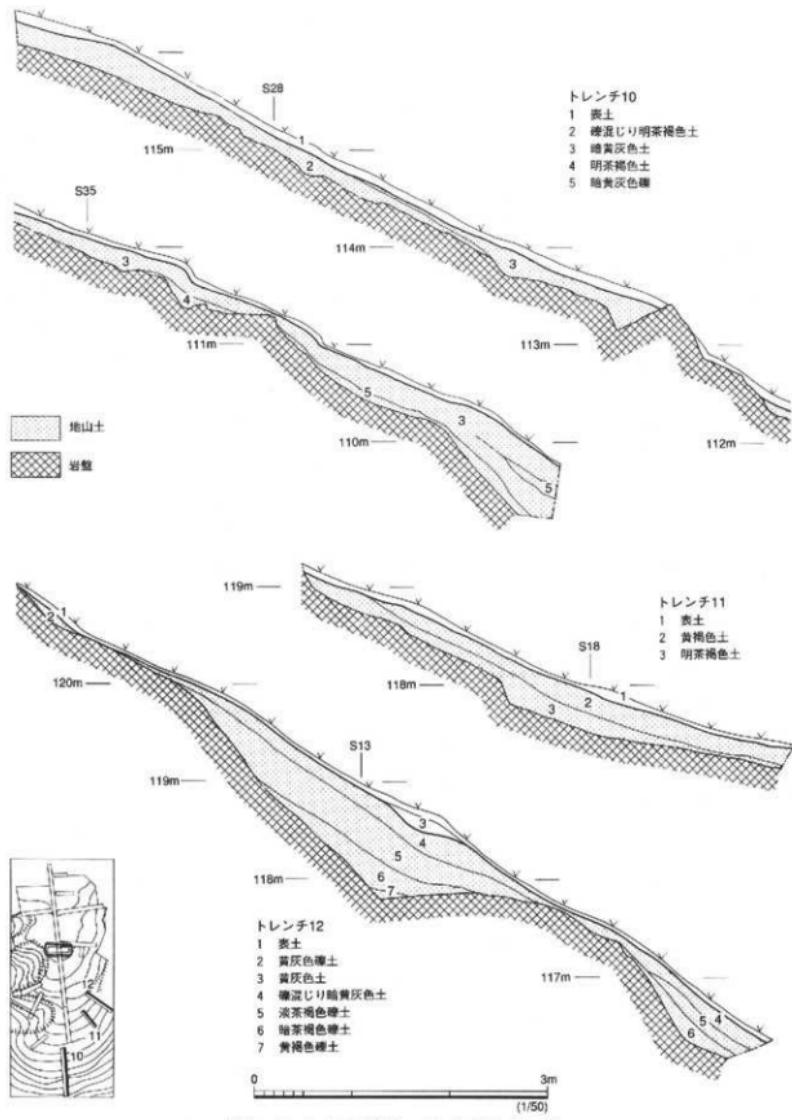


図11 トレンチ土層図(3) トレンチ10・11・12

トレンチ7 南西側の小開析谷北側斜面で高さ0.4m足らずの低い石垣を検出したため、斜面直交方向に設けたトレンチである(図10、図版第5c)。調査の結果、トレンチ上半では表土直下で表層が細礫化した岩盤が検出され、トレンチ下半では岩盤上に赤褐色系の疊・細礫・砂質土の流上層が認められた。石垣はこの流土層を切り欠いて積まれており、裏込めには腐食土が混入していた。

トレンチ8 南西側の小開析谷南側に設けたトレンチである(図10、図版第6b)。黄褐色～淡赤褐色の岩盤上に同系色の薄い疊土層を認めた。遺構・遺物とも検出されなかった。

トレンチ9 トレンチ1を延長するかたちで設けた尾根筋の南北トレンチである(図10、図版第6a)。緩斜面から急傾斜地に転じるあたりに位置し、表土直下で地山疊土層を検出した。疊土層の堆積はトレンチ下方で厚さ約0.5m認められ、以下は固結した粘土もしくは風化が進んだ岩盤である。

トレンチ10 トレンチ9南側の急傾斜地に設けた南北トレンチ(図11、図版第6c)。トレンチ9が立木のため延長できず、西側へずらして設定したものである。表土下に岩盤の起伏に応じて厚さ0.2～0.5mの疊ないし疊土層が認められたが、遺構・遺物ともにまったく検出されなかった。

トレンチ11 古墳前方の南東斜面に設けたトレンチである(図11、図版第7a)。岩盤の起伏に応じて疊混じり土が最大0.45m検出され、流上層と判断された。同層から遺物は検出されなかった。

トレンチ12 古墳南東側の東側斜面に設けたトレンチである(図11、図版第7b)。岩盤が節理に沿って大きく落ち込んでおり、表土下で厚さ最大約1mの淡黄褐色土層が認められた。同層から遺物は検出されず、堆積状況からも地山と判断された。

c. 墓形と規模

古墳は尾根先端の地形を利用して築造されたと考えられ、トレンチにつづいて古墳を含む尾根上約800mの全面踏査を行った。しかし古墳築造後の墳丘流出・削平が著しく、墳丘盛土は墓坑の北側と南側の2か所で確認されただけである。区画溝、埴輪列、葺石などの外表施設は認められなかった(図12)。

墓坑は、舌状の緩斜面の先端にあたる標高124.5～124.0m付近の傾斜変換点上に、尾根筋に直交して東西方向に設けられている。

墳丘盛土を認めた1か所は墓坑北側、N1.7～N3.7m地点の中央西寄りで、墓坑掘形に切られた灰白色粘土粒混じり黄灰色上層が約1.5m×2mの範囲で地山面上に認められた。もう1か所は墓坑南側の斜面下方である。ここではS9.5～13.25m地点で地山整形痕とみられる直線的

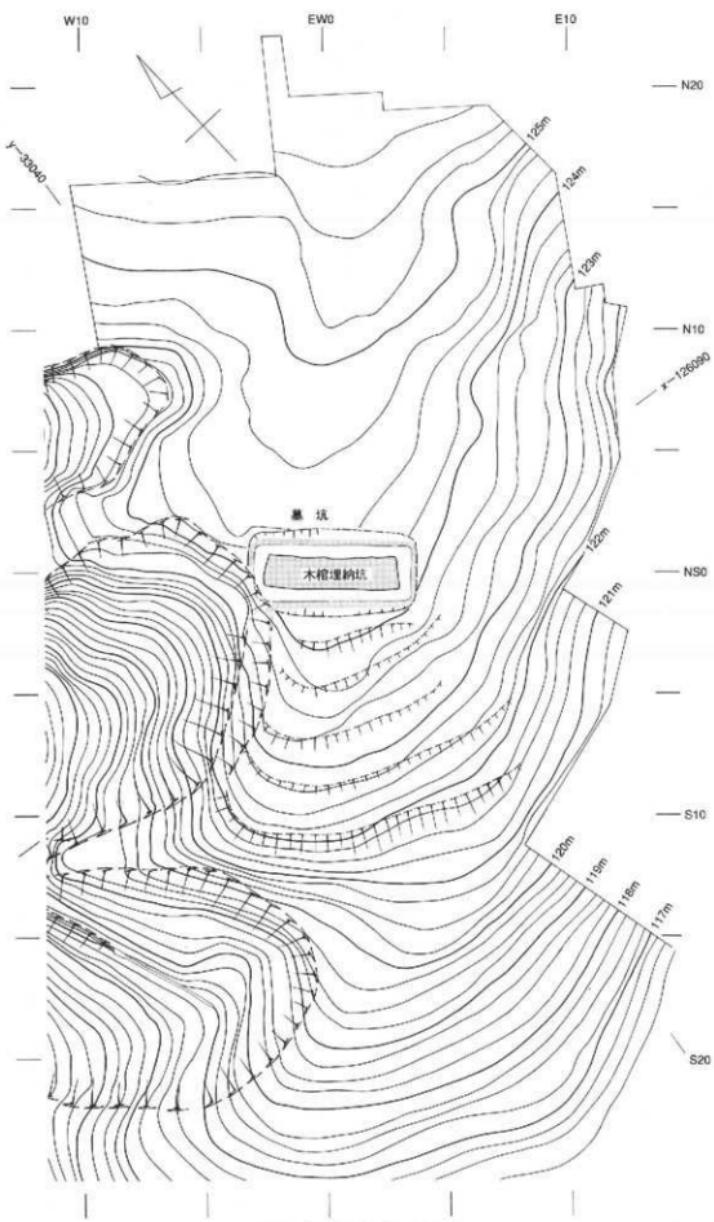


図12 安満宮山古墳 平面図

(1/200)

な傾斜面があり、厚さ最大0.5mの流出土の堆積層を検出した。そしてその流土層の下層で、S 10.2~14.3m地点にかけて、尾根東側約3mの範囲に厚さ0.2mの水平方向の盛土層が認められた。その先端は標高120.5m付近に位置し、古墳南辺にあたると考えられる。

南側斜面の、とくに西側半分は尾根筋に直交するととのった傾斜面を形成していて、わずかに崩落を免れている西斜面とゆるやかな稜をかたちづくっていることが注意される。また標高120.5~121.5m付近は、等高線がほぼ直線的に東斜面近くまではしつつある。おそらく築造後の盛土流出等により一定改変を受けつつも、墳形を反映しているのであろうと推察される。なお斜面上半の表上面に高さ0.1m、幅1.8~2mの階段状遺構、南西側の小谷北斜面端で高さ0.3m、延長4.75mの低い石垣遺構を見い出したが、いずれも近代のものと判断された。

墓坑北側については、区画溝や地山整形痕は検出されなかった。前方部や隣接部といった構造を想定することはできず、古墳北辺を直接的に示すデータもない。そこで西側から貫入する小谷に着目すると、中央の小谷は古墳築造後に発達したことが明らかである。その成因としては盛土荷重に地盤が耐えられず崩壊した、あるいは新たな水筋が形成されたなどが想定されるが、北・南の小谷についても、中央同様に古墳築造を契機として形成、発達した可能性が高い。東側斜面には、尾根筋をはさんで北小谷とほぼ対応する位置に浅い窪みが認められる。規模の違いこそあれ、両者は墳丘築造新たにできた水筋がかたちづくったと推察され、両者を結ぶN 7m付近が古墳北辺と考えられる。そして東側斜面については、さきの窪みから南へ約2mの間で標高122.0~123.5mの等高線が墓坑直交方向にはしつつあり、古墳東辺の位置と方向性を示しているものと考えられる。

以上から、墳形については、わずかに旧状を保つ南辺とくに南西側の形状から長方形墳と考えられ、その規模は南北方向21m、東西方向は地形の制約から判断して20m以下と推定された。

第2節 墓坑

墓坑 墓坑は尾根に直交して東西方向に設けられ、主軸方位はN-44°-Eである(図13、図版第8-9)。上方が削平され、また西側からの小谷の貫入により西南部の墓坑底が崩落しているため全形は不明だが、現存する掘形規模は上面で東西7.1m×南北3.6m、坑底で東西6.9m×南北2.8m、深さ0.1~0.4mをはかり、平面形は隅丸の長方形を呈する。掘形の北側中央で墳丘盛土が最大0.15m認められるが、以下は地山上であり、坑底は北側・南側とともに0.1m程度岩盤を掘り下げている。坑底はわずかに南西側へ傾斜し、標高124.1~123.95mをはかる。

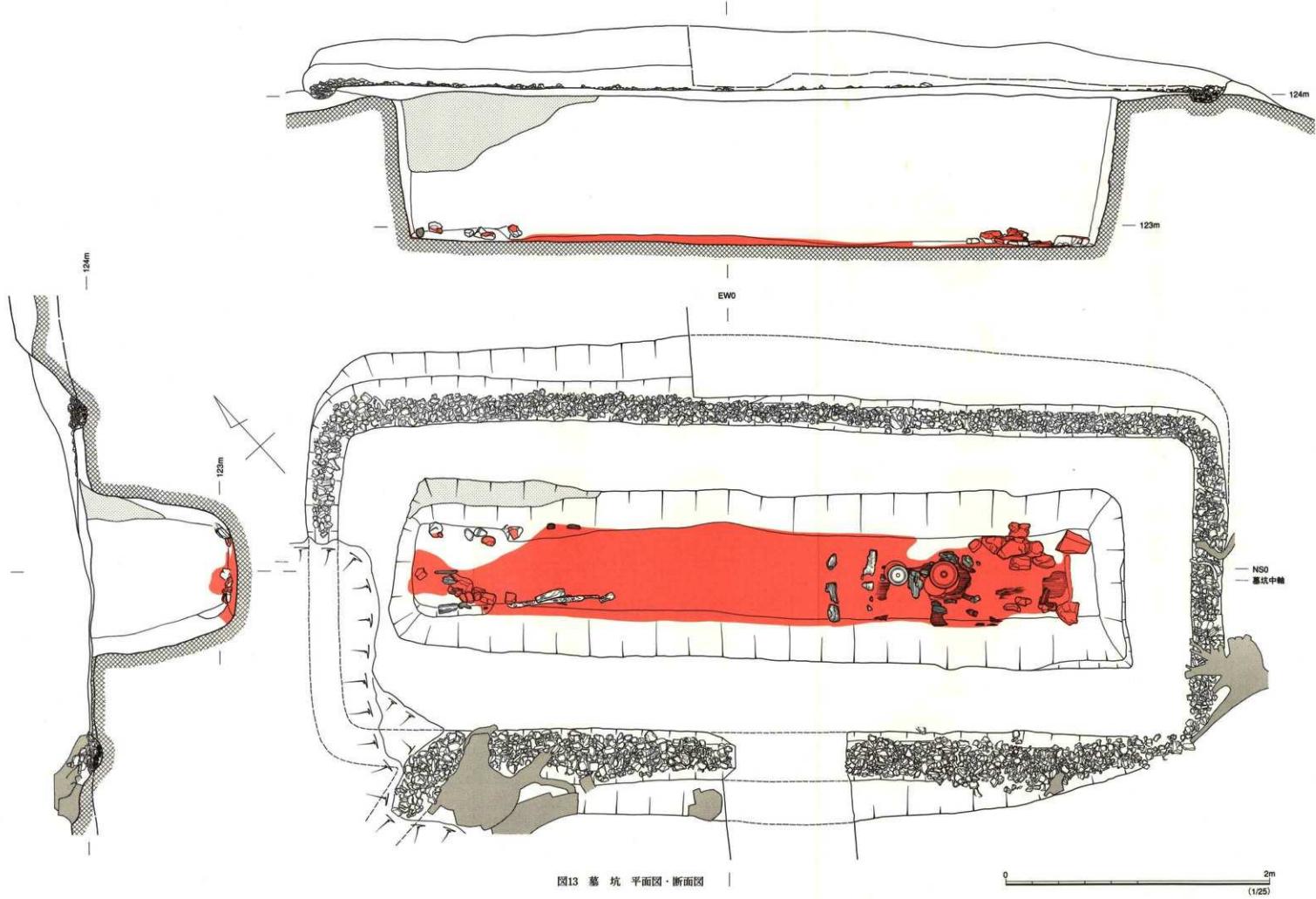


图13 墓坑平面图·断面图

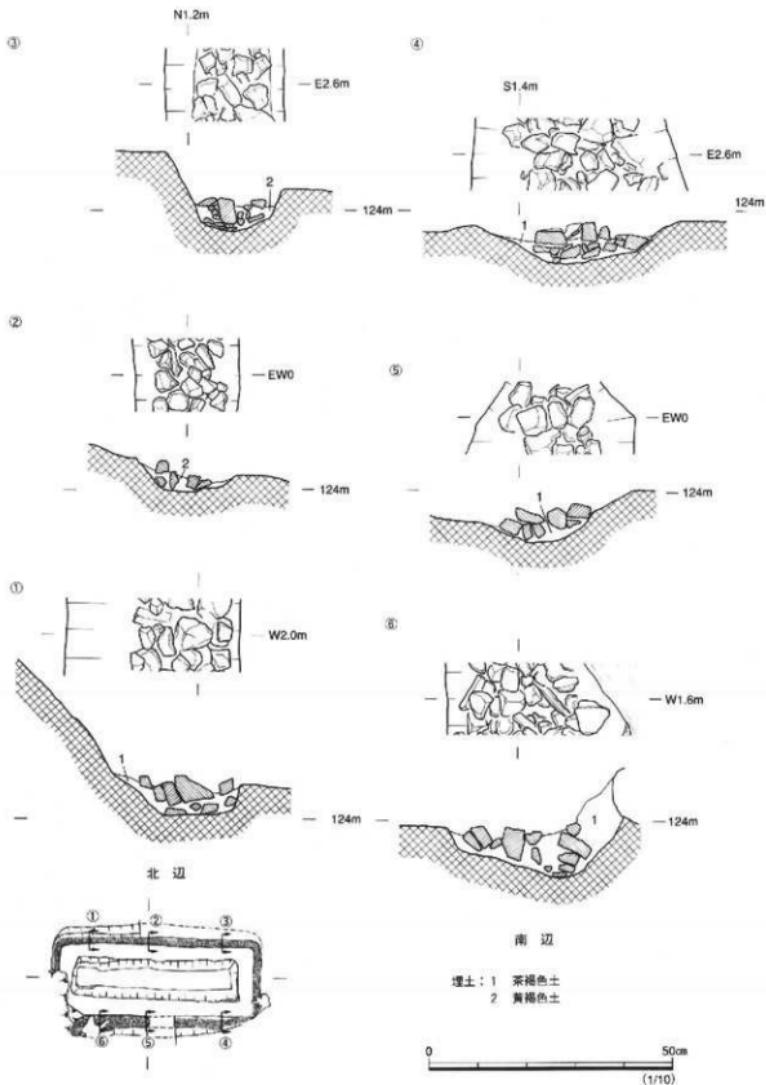


図14 排水溝 断面図

掘形下端周縁には径3~7cmの小石を充填した幅0.2~0.3m、深さ0.1mの暗渠排水溝をめぐらせ、底面中央に木棺埋納坑が設けられていた。

墓坑掘形の斜面角度は、北辺西寄りでは墓坑底面上約0.15mで屈曲し、下方は約60°、上方は約50°をはかる。北辺中央ではこれが逆転し、下方は約45°、上方が約50°となっている。角度が緩いのは墓坑底面に近いためであろう。

排水溝 排水溝は、外縁で東西6.9m×南北2.8mをはかり、溝底高は、北辺西側①で標高124.01m、北辺東側③で同123.96m、南辺東側④同123.89m、南辺西側⑥で同123.88m(図14、図版第10)、西辺は崩落部際で123.97mをはかる。北溝は西から東へ、東溝は北から南へ、そして南溝は東から西へわずかに傾斜しており、南西隅部に排水口をそなえていたとみられる。しかし排水口は墓坑底崩落のため確認できなかった。排水溝を通観すると北溝より南溝の方がやや溝幅が広く、大き目の石を用いる傾向にある。また北溝のE1.8m~2.8m地点は径3~4cmの石が際立って目立つ。逆に径7cm程度、ときに10cmを超える大振りの石が揃っている部分はW1.8~2.7mの間や、南溝のE1.3~2.2m、W0.3~1.3m地点に認められる。石材についてみると、暗赤色系のチャートの角礫や灰褐色系のチャートの亜角礫ないし円礫を主とし、地山岩盤に由来する黄灰色系泥岩や砂岩の角礫も用いられている(図15)。暗赤色系のチャートはとくにエッジが鋭く、大きい礫を小割りして得たようである。石材は現在も周辺土壤中にふつうに見いだされるものであるが、暗赤色系チャートは分布に偏りがうかがえ、また南辺東隅や西辺はチャートがごく少ない。こうした石材のばらつきや石の大きさの違いは、小石を敷設した際の作業区分を示すと考えられ、長さ0.9~1.1m程度を単位として、のべ20回程度に分けて行われたとみられる。

なお北溝のE1.2m地点の小石の上面に、3mm×5mm程度の朱色の小塊を1点検出している(図版第10a・b)。棺埋葬時には排水溝内に石が敷設されていたことを示すものであり、葬送の手順を考えるうえで興味深い。

木棺埋納坑 木棺埋納坑は、墓坑中央部に設けられたもので、上縁長5.6mあって幅は西端で1.1m、東端で1.3mをはかる(図版第11)。深さは約1.2mあり、坑底長5.2m、幅は東西両端とともに約0.75mをはかる。坑底の標高は西端で122.93m、東端で122.84mと東側が0.09m深く、上縁幅も広い。坑底には木棺が直葬されていた。

墓坑と埋納坑の埋土は、さっくりとしたほぼ均質な黄褐色土層で、径0.5cm程度の炭粒をわずかに含み、拳大の礫が上方で少數検出されたものの、明確に分別できなかった。埋納坑にあっては、表土直下からほぼ均質な黄褐色土層が約1.5mにわたってつづき、黄褐色礫土層3~5.5cm、灰白色細砂層0.3~1cmとなって坑底に至る。木質及び副葬品は灰白色細砂層に覆われた状態で出土している。ただし坑底西端部では、北西隅にかけて厚さ0.1~0.15mの灰白色細

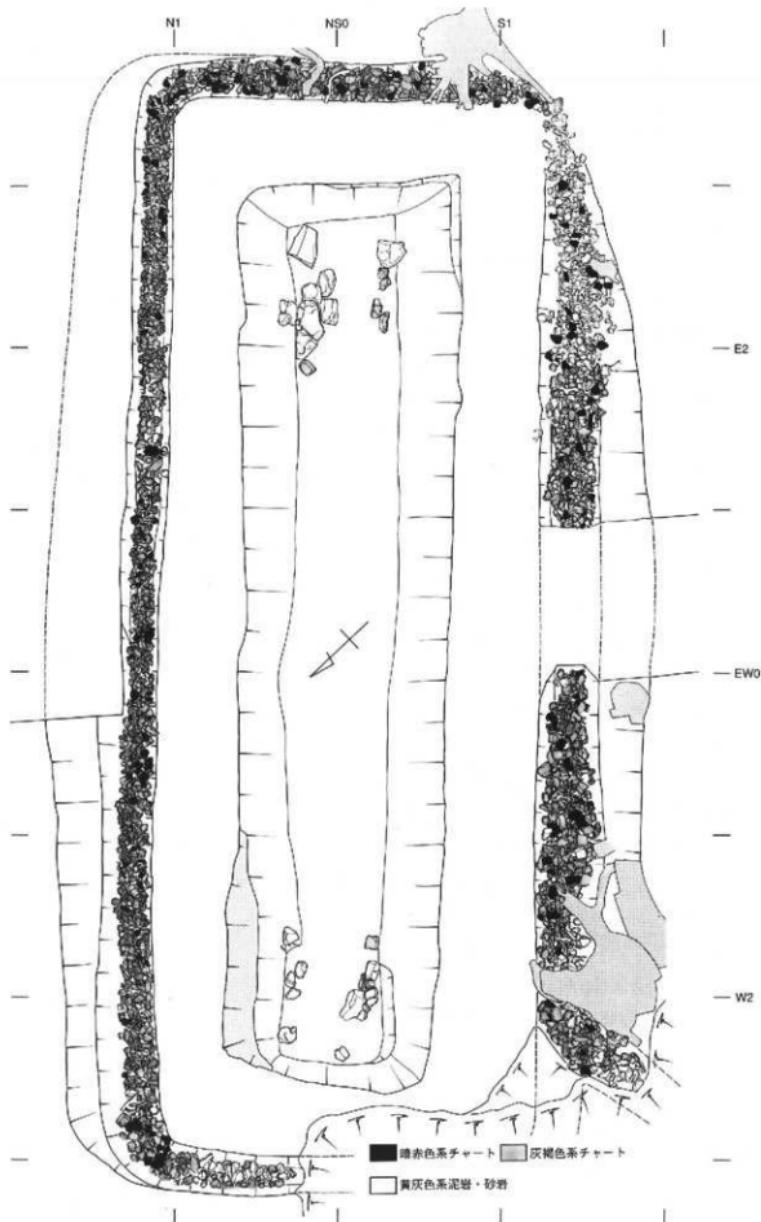
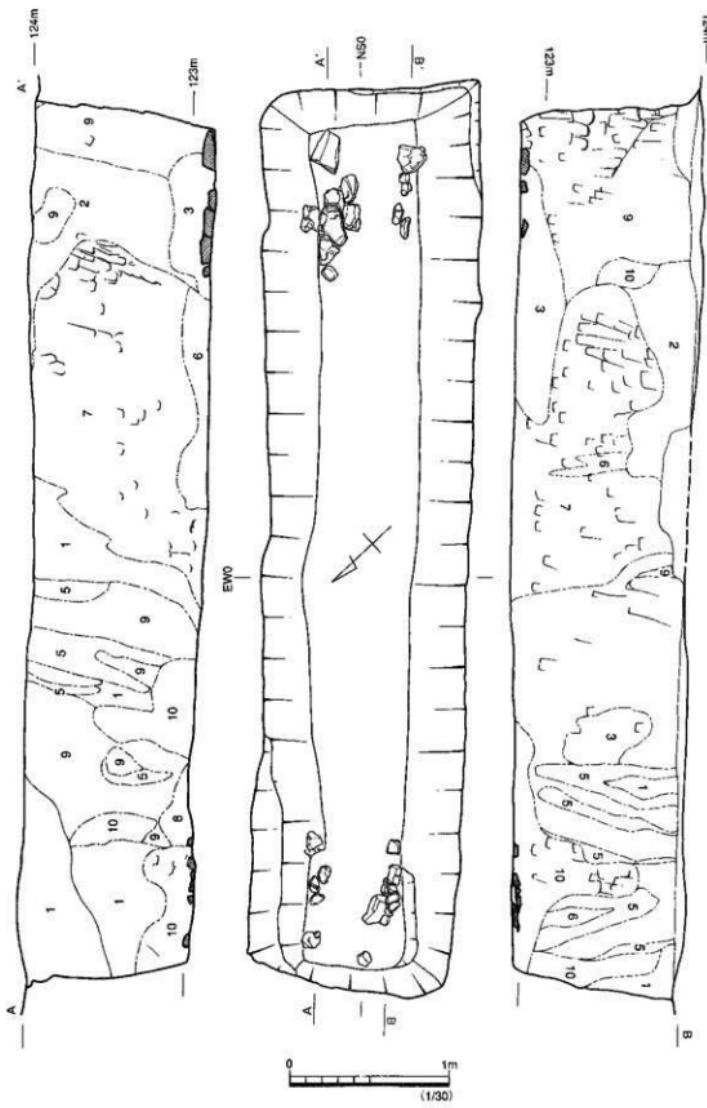


図15 排水溝及び木棺埋納坑台石の石材

(1/30)



- A-A', B-B'は東西の台石中心を結ぶライン
 1 黄白色粘土
 2 赤褐色軟泥じり土
 3 灰褐色軟泥じり土
 4 灰白色軟泥混じり赤褐色粘土
 5 黄白色粘土
 6 黄灰色粘土
 7 赤褐色硬質粘土
 8 黄白色岩盤
 9 灰白色岩盤
 10 灰綠色岩盤

図17 木棺埋納坑の工具痕と土質

第3節 木 棺

木棺は大部分が腐朽消失しているものの、その残片が埋納坑のほぼ全長にわたって、坑底及び両側壁の隨所から検出された。また棺内底部に塗られていた朱が、坑底のほぼ一面に認められた。東側では坑底東端から0.1m離れたところで、灰褐色砂質粘土上に朱が帯状に0.03mの幅でのこっており、棺の東側小口板の痕跡とみられる。西側では西壁の南寄りに幅・高さとも0.25mの範囲に朱が認められ、小口板が倒れて寄りかかったものとみられる。両側壁については坑底から0.1~0.15mの高さまで朱の痕跡が認められた。さらに坑底端部両側邊では、棺を支える台石として置かれた扁平な割石やチャートの円礫が、数個ずつ検出された。割石は泥岩質で最大20cm×15cm、厚さ7cmをはかる。台石は西北部の数個をのぞいて上面(垂直投影面)に朱が認められた。

以上の所見は、棺が埋納坑ほぼ一杯に納められたことを示している。その形状は、銅鏡付近で同質の棺蓋材・棺身材がのこっていたこと、両端部の台石上面を見通すと北側・南側それぞれに外開きで東下がりの直線が引き通せることなどからして、割竹形木棺と判断した。とくに坑底の形状から下面の曲率がゆるく両側邊が立ち上がり氣味の横断面を想定することができ、その幅は最大で西側0.7m~東側1.1m以内、埋納坑への埋置を考慮すれば0.7~0.9m程度と考えられる。

第4節 墓坑遺物出土状況

墓坑内から出土した遺物には、銅鏡5面(1~3号鏡)のほか、ガラス小玉1,641点、鉄刀1点、刀子・鉈各2点、板状鉄斧・有袋鉄斧・鑿・鎌各1点がある。いずれも木棺埋納坑の坑底で検出した。棺内に埋葬された副葬品と考えられ、銅鏡・ガラス小玉は東側から(図19、図版第11・12・14~16)、鉄器類は西側から(図22、図版第11・13・17)、それぞれまとまって出土した。このほか、墓坑埋土中から上器片が出土している。

銅鏡5面は、東西2つのグループに分けて置かれていた。第1のグループ(東鏡群、1~3号鏡)はE1.4m地点のほぼ中央部で、上から1~3号鏡の順に、3面が重なった状態で出土した。2号鏡・3号鏡は鏡面を上に向け直接重ねていたが、1号鏡のみ鏡背面を上に向け、朱が分厚く付着していた。3面の中心は、3号鏡に対して2号鏡は南西側へ約8cm、1号鏡は北へ約3.6cmずれていた。また1号鏡と2号鏡の鏡面間に白色~淡黄白色の布が遺存していた(図版第36a)。1号鏡背面に布目圧痕が認められ、対して2号鏡・3号鏡背面には布・布目とも

認められなかったことから、1号鏡を包んでいたものと判断される。

鏡群の上には棺蓋材が厚さ最大2.8cm遺存しており、その下面(棺内側)には朱が付着し3号鏡の鋸や乳の圧痕も認められた。この東鏡群の下には棺身材が東西約36cm×南北約32cm、厚さ最大3cm遺存しており、その上面には3号鏡の外縁や鋸の圧痕とともに朱が認められた。朱は1号鏡北～西側に分厚く、1号鏡上面にまとめて撒かれた朱が流れ出たものと推察された。

第2の鏡群(西鏡群)は、東鏡群の西0.2mから出土した。疊土、細砂の順で堆積土を除去すると上から順に4号鏡・5号鏡の輪郭がとらえられ、4号鏡上面に東西方向と南北方向のごく薄い木質が認められた(図版第14c)。2面は鏡背面を上にして直接積み重ねてあり、両鏡の中心は5号鏡に対して4号鏡が南東側へ約3cmずれていた。5号鏡の下は木質の痕跡をとどめるのみですぐ坑底となる。朱は坑底及び5号鏡に薄く付着していたが、4号鏡背面には全く認められなかった。また布等の繊維は検出されなかったが、4号鏡上にのこっていた南北方向の木質からみて、両鏡が木箱に納められていた可能性もある。

東西の鏡群間では、幅10.2cm、厚さ最大1.2cmの南北方向の板材が棺身材と同レベルで出土した(横板材1)。上面には東西方向の木片が、下面には東西方向の木質が認められたから、棺内に置かれてあったものと考えられる。

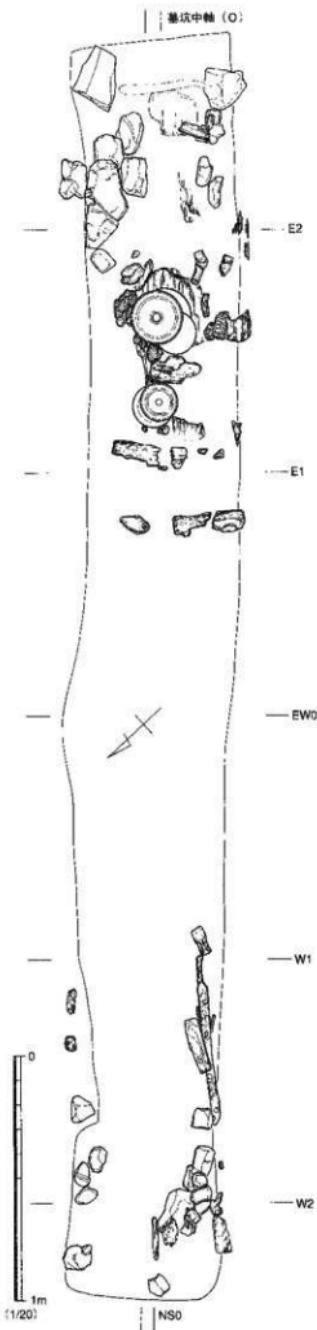


図18 木棺埋納坑遺物出土状況平面図(全体)

ガラス小玉は木棺内の中央東寄り、西鏡群の西縁にほとんど接して、約0.1m隔てて南北2群に分かれて出土した(図20、図版第15・16)。全体では東西15cm・南北25cmほどの広がりをもつ。北群の玉は細砂直下から朱にまみれた状態で、また南群は東半分が東西方の木質下にあったが、やはり最大厚さ0.8cm程度の朱の層中から検出された。南群はよく連接状態を留め東西13cm・南北5cm、北群は二次的に乱れた状態にあるものの東西9cm・南北12cmの範囲にまとまっていた。両群の東西方向にはそれぞれ若干の遊離玉を検出したが、両群間は空隙地であり、本米2塊に分けて置かれたものとみられる。さらに下層にも小玉の存在が予想されたため、現状を記録後2塊を樹脂で固定して取り上げ、当初検出面から順次下層へ3.4回にわけて取り上げをすすめた(図21、図版第16c・d)。その結果、南群737個、北群836個、遊離分など68個の合計1,641個が確認された。玉の下方には東西方向の木質が認められたが、周囲及び孔には、織り糸などの繊維は何らのこっていなかった。

ガラス小玉のすぐ西側と、さらに約0.2m隔てた西側では、長さ50cm以上、幅8~9cm、厚さ最大1.5cmの南北方向の板材(横板材2・3)を、ほぼ水平に坑底から約5cm浮いた状態で検出している。坑底上の灰白色細砂との間は黄褐色小礫まじり粗砂層である(図版第15a・39c)。木棺が腐朽していく過程で、いち早く流入した上砂が材下方に入り込んだものと考えられる。東西鏡群間の板材と合わせみれば、約0.2m間隔で少なくとも3本の材が横桟状に棺内に架けられ、その間に副葬品が置かれていたことになる。

鉄製品は埋納坑西端から約1m東、W0.9~1.7mの南辺で、まとまって出土した(図22)。直刀は切先を西側にして刀を南側に向けており、その中央部下側で上から順に鉗2点、鑓1点、刀子2点が刃先を東側に、鎌が刃を北側、折り返しを右側下へ向けた状態で出土した(図版第17c)。鉗と鑓は刃先から3分の2ほどのところを支点に扇形に出上し、もとは東ねであったようである。刀子1は鑓の下側に銛着していた。板状斧(斧1)は直刀中央部上、有袋斧(斧2)は同じく革の先にあり、いずれも刃先を東側に向けていた。これら鉄製品は、埋納後に大きく動いた痕跡はみられないこと、木質やその銛着、繊維痕等は見いだせないことから、未着柄・抜き身のものが一括して納められた可能性が高い。なお鉄製品上面に朱は認められず、また出土地点付近に木質はまったく遺存しなかった。以上の所見から、これら鉄製品は棺内に埋納されたものと考えられる。

坑底表面の朱には、部分的に濃淡が認められた。厚さ0.5~2mm程度あって鮮赤色を呈するところは東から南辺の台石付近、1号鏡及びその北側、ガラス小玉付近、及び横板材3から有袋斧までの空隙地、西側南辺の台石付近などである。ガラス小玉付近はとくに分厚く、3~8mmあって玉が朱に埋もれていた。このうち東西の台石付近は木棺内底に撒かれていた朱の沈降が石の上面で停止したものであり、その他3か所は埋葬時の最終段階で再度、朱が撒かれ

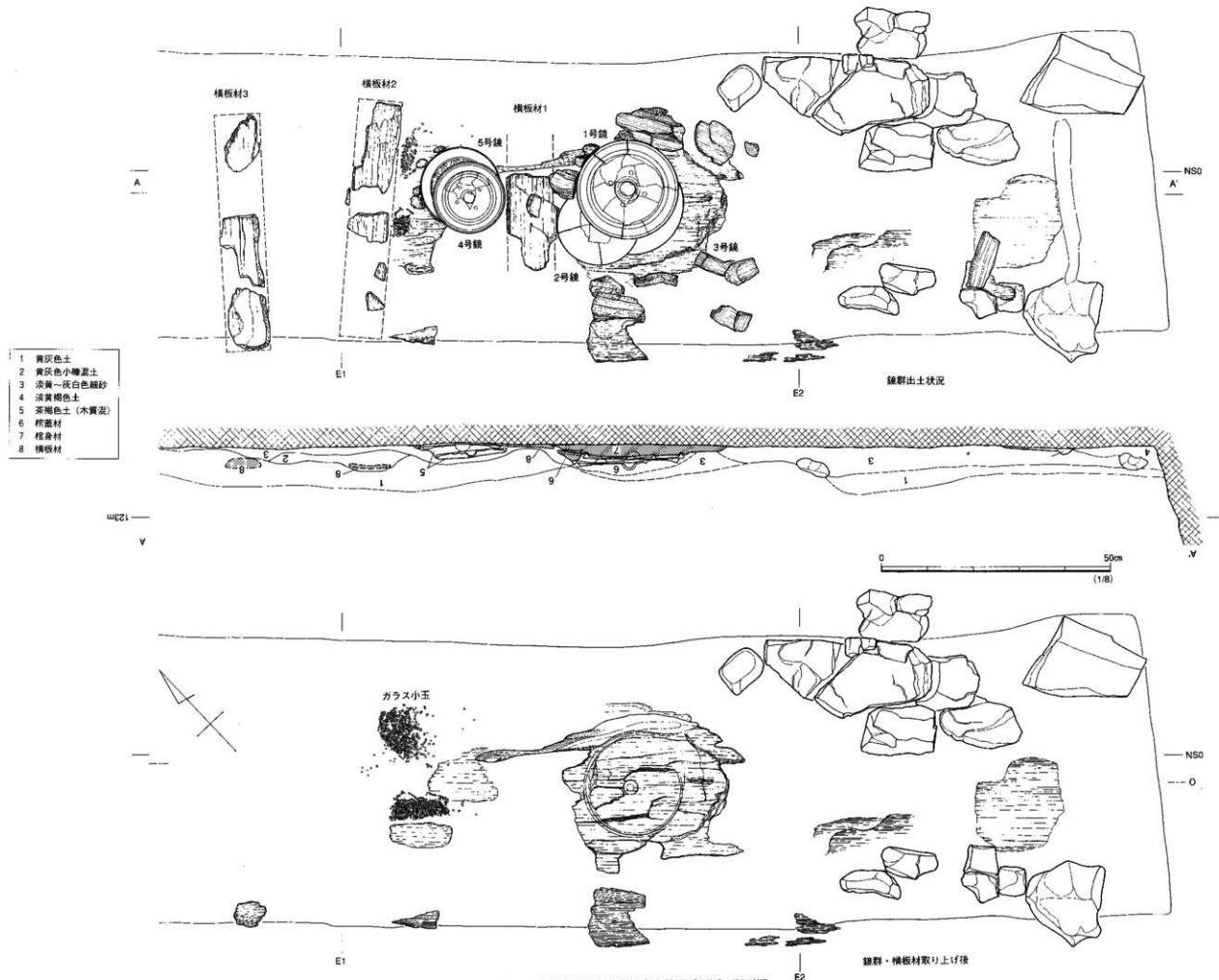


図19 木殉納坑東半遺物出土状況平面図・断面図

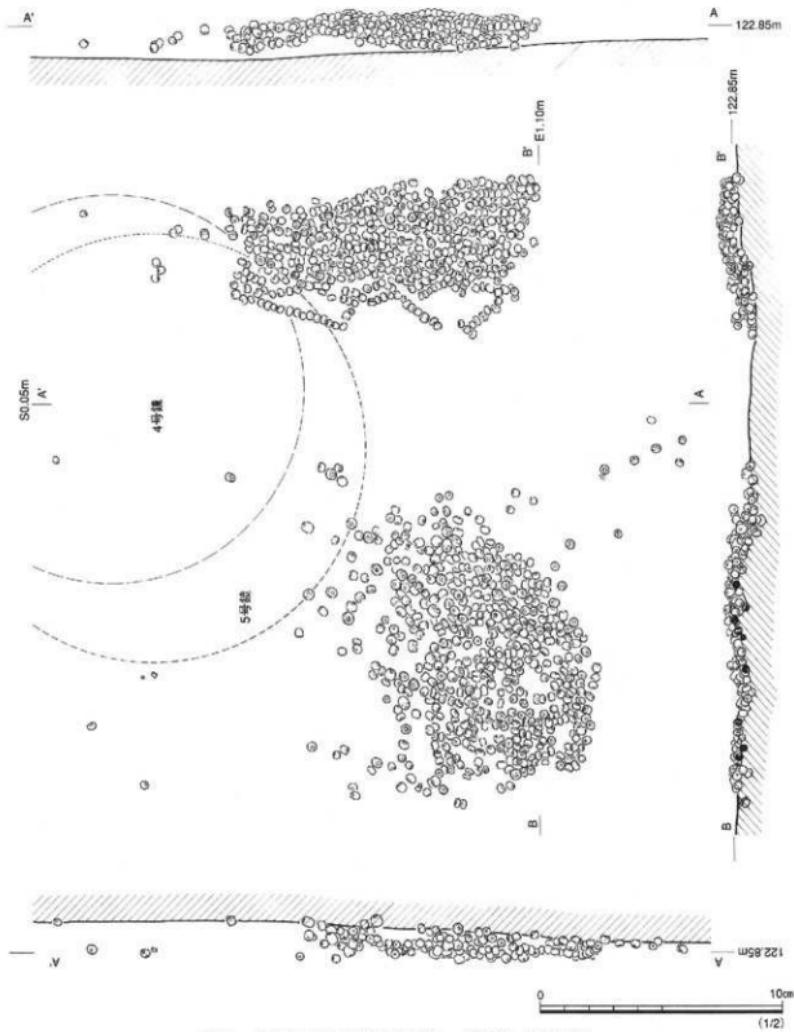


図20 ガラス小玉出土状況（上層） 平面図・見通し図

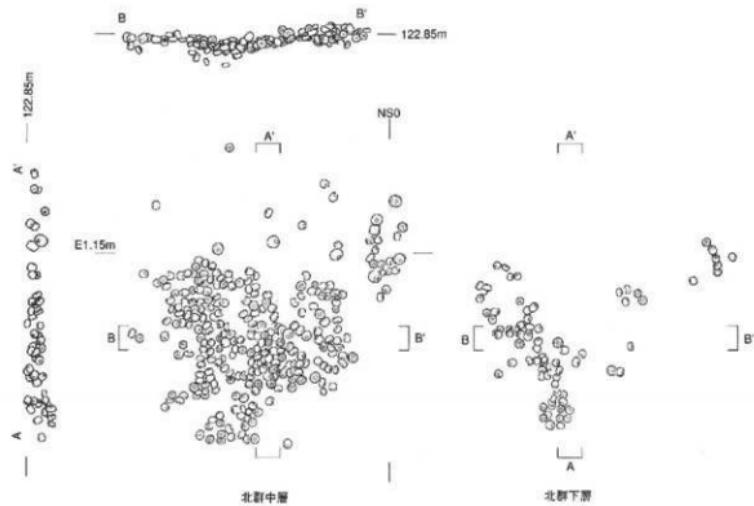
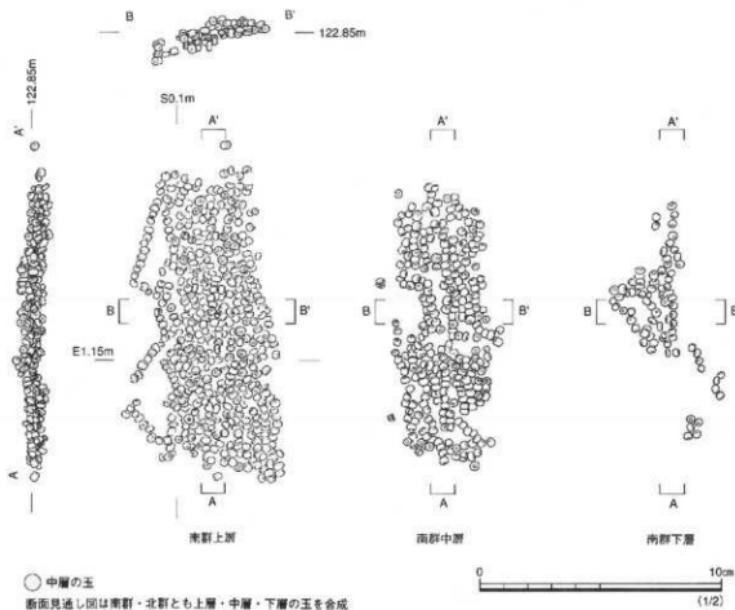
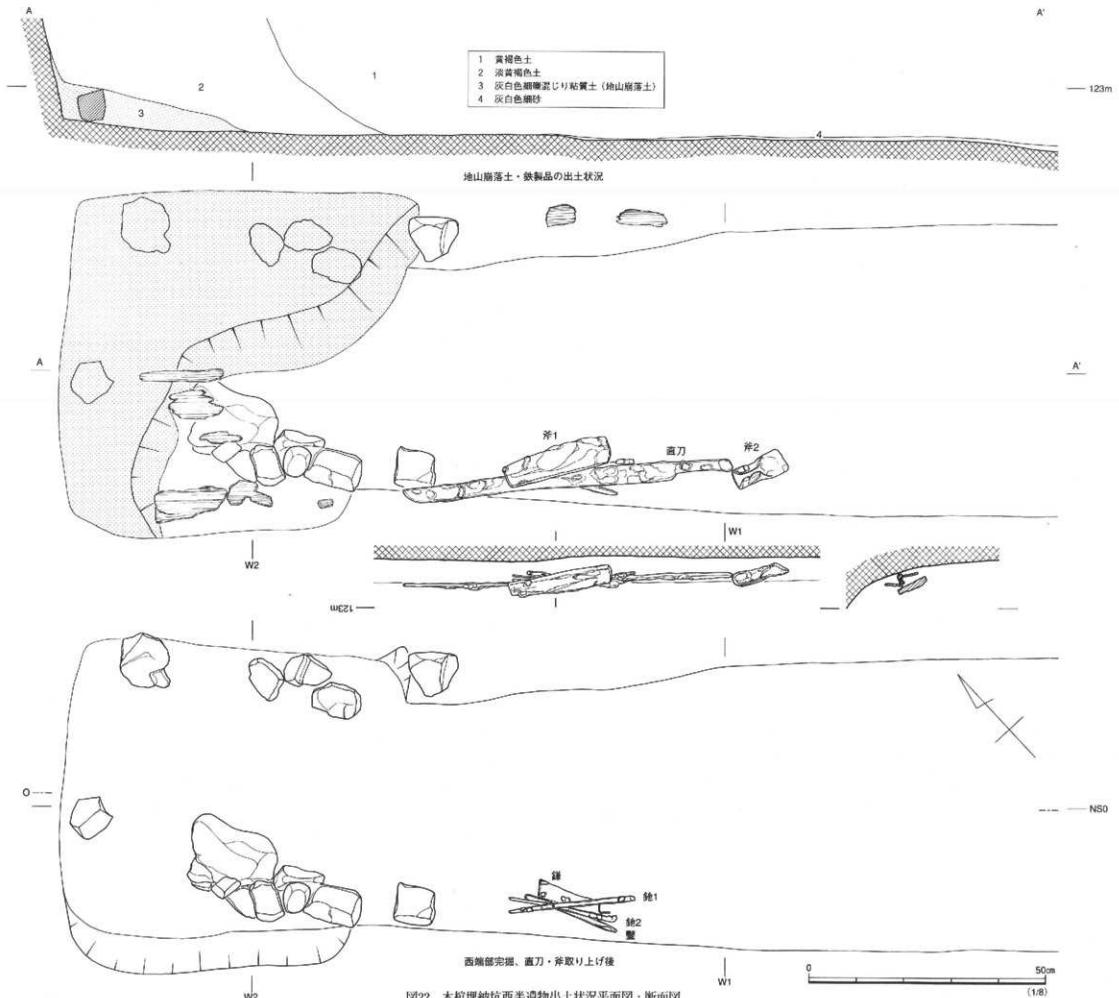


図21 ガラス小玉出土状況（中層・下層）平面図・断面見通し図



たところと理解される。

なお埋納坑の形状及び副葬品の配置からすると、被葬者の頭位は東と考えられる。

以上の副葬品のほか、墓坑の埠上である黄褐色土層中及びその周辺から土器片が2点出土している。いずれも方4cm足らずの小破片で異個体である。1つは埋納坑西北寄りの、N0.07m・W1.26m地点の埋納坑上縁から約0.16m下がったところで、ほぼ水平方向に内面を上にして出土した(図5-4)。いま1つは排土洗浄を墓坑周辺掘削土まで拡大中に検出したもので、出土状況は明らかでない。埋上約11m³中から出土したことを明確に確認できるのはさきの1点だけであり、埋納時や墳丘上での祭祀に伴うものとは考えがたい。墓坑埋戻しあるいはその後の混入品であろう。

第5節 他の遺構

a. 配石遺構

古墳北側にある小開析谷の東側及び北側の緩斜面上、東西15m×南北8mの範囲から、石組みと疎らな列石を検出している(図23、図版第19)。

緩斜面西半で検出された石組みは、人頭大のチャート系の石を西面を揃えてほぼ尾根筋方向に延長1.8mにわたって据え並べたものである。西側の地山面は石の下端と同レベルにあり、傾斜地の裾を高さ0.05~0.25m切り欠いて石を据えたという表現がふさわしい。石の東面は裏込めに隙をぬませてあった。石組みの南端及び南端から西へ3.2m地点と北へ8.4m地点を結ぶ三角形の範囲には、地山面上に拳大角礫混じり淡褐色土層(整地層)0.1~0.3mが認められた。同層上面の石組み西側には拳大~人頭大の礫が石敷状に集中しており、同層西端は北側小開析谷へ落ち込んでいる。整地層・石組みとともに、この谷の拡大をとどめるべくほどこされた可能性が高い。

一方東半部では、尾根筋からやや東側へはずれたところで、扁平な20cm×30cm程度の石の連なりが南北約11mにわたって検出されている。方向性は尾根筋とほぼ同じである。地山を若干掘り窪めて石の平らな面を上に据えたもので、表土上に露出しているものも認められた。

上記の整地層や裏込めから遺物は出土せず、遺構の時期を特定するには至らなかった。なお表土除去・遺構検出作業中に、西側緩斜面の表層から石器及び須恵器片が出土している。

b. 階段状遺構

古墳南側の斜面で、高さ0.1~0.2m、幅2m程度の低い段を4段見出した。段と段の間は地形なりに傾斜しており、各段の方向もほぼ等高線の走向に沿っている。古墳に囲む地山整

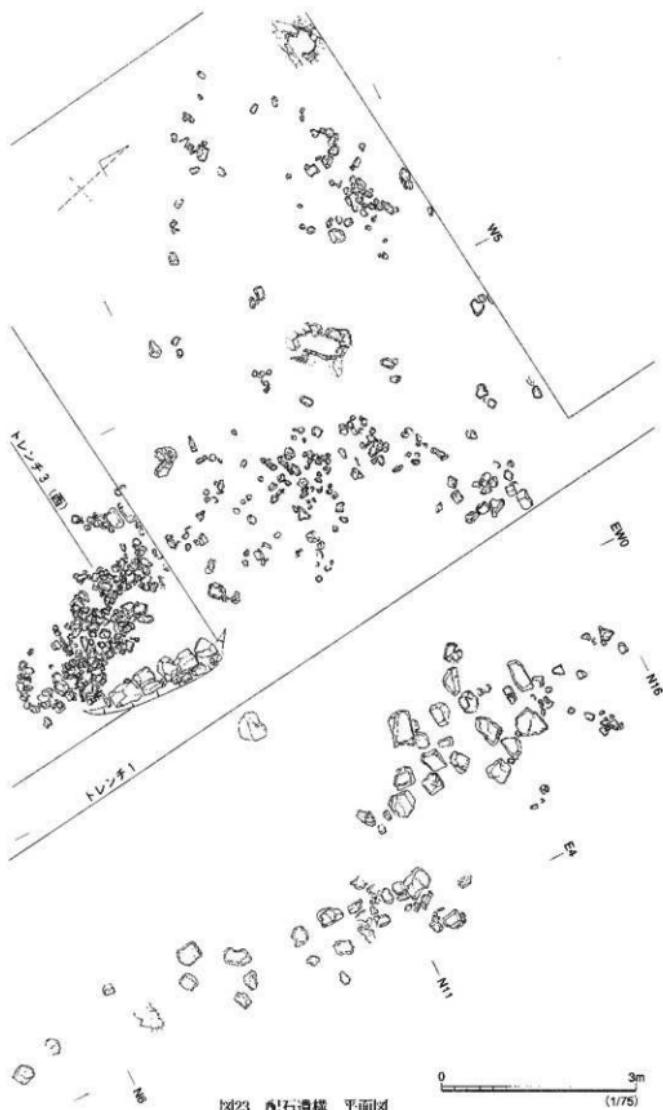


図23 配石造構 平面図

0 3m
(1/75)

形の痕跡の可能性も検討したが、南側斜面に限定されていること、部分的に地山面に影響を及ぼしている個所はあるものの大半が表上層に納まっていることなどから、堆丘流出後にはどこされたものと判断された。

c. 石垣

古墳南側の小開析谷北側斜面で検出した(図10、図版第5c)。高さ0.3~0.4mの低い石垣である。斜面の流上層を高さ0.3m、奥行き0.4m程度切り欠いたところへ人頭大の岩塊を2段、小口積みしている。石垣を積むためにほどこされた斜面の切り欠きは延長約5.4m。小谷の最奥部からはじまり、トレンチ6前方の岬状に岩盤が屹立している部分でおわっている。石垣は東西両端約0.3m分が脱落し、長さ約4.75m分が遺存していた。裏込めには地山の砾を用い、腐食上の混入も認められた。当該斜面地は現状においても崩落が生じており、それを防ぐための施設と考えられる。

注1 排水溝及び木棺埋納坑で検出した赤色顔料の分析を別府大学助教授本田光子氏にお願いしたところ、分析に供した8試料は採取位置・色調・濃淡にかかわらず、すべて水銀朱であることが判明した(付論「赤色顔料の分析」を参照されたい)。

2 奈良国立文化財研究所客員研究員佐藤昌憲氏のご教示によれば、銅鏡出土地点の土壤をpH6.5の蒸留水に懸濁して水素イオン濃度(pH)を測定した結果、pH約4.8となって埋没環境はかなり酸性の強い土壤であることが明らかになった。このような土壤中ではセルロース系の布(麻布、綿布など)は遺存にくいが、今回出土した布が青銅鏡に挟まれるような状況にあったことから考えて、銅イオンが布の腐朽を抑制していた可能性が高いとのことである。棺材の遺存状況にも同様のことと考えられる。

第4章 遺物

第1節 古墳出土の遺物

a. 鏡

安満宮山古墳から出土した鏡は5面ある。紀年銘鏡1面、三角縁神獸鏡2面を含む良好な一括資料である。いずれも割れた状態で出土しているが、2号鏡をのぞきほぼすべての破片を検出し完形に復元された。鏡は比較的少なく、表面は漆黒ないし緑黒色の色調を呈し安定しており、鏡同士が接していた部分は白銅色の輝きをとどめるなど遺存状況は良好である。

現状は洗浄・防錆処理をほどこして接着復元している。なお1号・3号・4号鏡の断面は、鉢の右側に神像、左側に獸形を描き、乳は中心からの位置を示している。

1号鏡(三角縁「吾作」環状乳四神四獸鏡)

直径21.8cm、重さ約1,100gである(図24、図版第21・22)。厚さは外縁で0.9cm、外区内縁で0.4cm、内区の図像のない部分で0.1~0.15cmをはかる。これまでに同型鏡は確認されておらず、類似鏡として奈良県・伝富雄丸山古墳出土の四神四獸鏡などが知られている。

遺存状況は良好で、色調は鏡面の約3分の2と鏡背面の一部に白銅色をとどめるほか、わずかに赤みがかった金属光沢をもつ漆黒色を呈する。

全体として鏡背面の図像はやや甘く不鮮明で浅い。図の上方及び右下方には銘帯から櫛齒文にかけて文様が流れたり盛り上がって失われているところがあり、鋳型の崩れとみられる。また盛り上がった裝状の線(鋳型の傷とみられる。図示した)とは別に、鏡背全面にわたって細かいひびがみられ、とくに鉢や神像・獸形など突起部において著しい。

鋳造後の研磨は、鏡面の全部、鏡背面の外縁・外区・鉢について行われているが、内区は鏡上がったままとみられる。なお本鏡の鉢や文様凹部、細かいひびの内部などには、微小な粒が混在して格子状にみえるデンドロイド(樹枝状品)が観察された。その表面は粗面でいわば艶消し状態にあり、平滑に研磨された光沢面とは好対照をなしている。

鏡背面の構成 中央に鉢と鉢座があり、内区は乳によって4つに区画され、それぞれ侍童を伴い獸の背に乗る4体の神像や小角獸などが配されている。その外側は銘帯、さらに櫛齒文帯がめぐらされている。外区は櫛齒文、複波文、銘文が配され外縁へ至る。

鉢 鉢は、半球状を呈し直徑3.4cm、高さは鏡背面から1.6cmをはかる。鉢孔は図の上を起点として 60° ~ 240° 方向に設けられ、縦0.4cm、横0.8cmをはかる断面長方形である。その下辺は



图24 1号鏡（三角線「四作」環狀乳四神四獸鏡）

鏡背の平坦面から0.1cm上にある。鏡表面は研磨をほどこしているが孔縁の整形はしていない。鏡座は鏡とは独立した扁平な半円形断面のもので、有節重弧文1帯に4小突起を配している。有節重弧文はほぼ等間隔に配置された梅円文8個と弧文で構成されており、小突起は楕円文の間に割り込むかたちで配置されている。楕円文の内側に隆起は認められない。なお鏡座の鋸には、施文のさいの割り付け痕であろうか、細い圓線が内外ともめぐっている。

乳 乳は4個ある。低い円座をもち、鏡背面からの高さ0.65cm。なかほどにゆるい稜があり先端は尖り氣味に丸くおさめていて、低平な円錐台の上に円錐を重ねたような形状を呈する。

内区圖像 神像は4体ある。図で右に位置する1像は頭部に三山冠をかぶり、両手を胸の前で組んでいる。他の3体の頭部は齧である。上の像には両手の拇指と揃えた四指が表現されている。下の像は左腕の隆起が右腕に比べて大きく、左手を肩まで挙げているように見える。そのほか、顔や下半身などは、全体によく似た表現である。そこで4像のうち右の三山冠をかぶるものは「東王父」、上は彈琴像とみて「伯牙」と判断され、したがって左が「西王母」、下の神像は「黃帝」であろうか。「東王父」と「黃帝？」の左脇には侍仙が配されている。前者の侍仙は側面形で、後者のそれは正面形に表現されている。また「西王母」の左脇には天蓋をくわえた瑞鳥、「伯牙」の左脇には小龍が配され、4神像の左右はそれぞれ神像を向く小禽獸6体と小神像1体で埋められている。それら小像は「東王父」侍仙の左から右回りに、飛翔する鳥、首を伸ばす鳥、魚をくわえた鳥、首を伸ばす鳥、振り返る鳥、小神像、振り返る四足獸となっていて、「伯牙」にそえられた小龍のところは省かれている。

獸像は4体あり、頭部の表現に違いがあるが頸部以下は同形である。すなわち「東王父」が胡坐する1像は側面形で、他3像は正面形にあらわされ、「西王母」が胡坐する像は天蓋のためか巨は省略されている。4像で内区を左回りに全周し、その外方、銘帯との間を多数の小珠で埋めている。以上の神獸と小禽獸は19体を数える。

銘 帶 銘帶は幅0.5cm。銘文は、右回りに「吾作明鏡 練取好同 文章皆 口帥口工 上有東王父上西母 師子辟邪甚 □巨□□□□□不老 吏人得之 位至三公 其樂兮」の49文字(図版第31)。「西王母」は「王西母」と記され、「巨」と文末の「甚」は鏡字である。字の大きさは文頭の「吾作」などの高さ4mmから文末「樂」の7.8mm、「兮」の14mmまでばらつきがあり、字間もやや不揃いである。なお銘帶には、約1mm間隔の平行する突線が長さ3~5cm単位で右上から左下に走っているのが認められた。一見すると銘をほどこす前に刷毛目原体で表面を均したかのようである。

銘帶外側の櫛齒文は放射状にほどこされているが、突部は幅狭で低く、疎らにみえる。また銘文の「吾~同」の間に明瞭なように、約30°ごとにわずかに向きが変わっていて施文の単位がうかがえる。

外区 外区は、外向きの鋸歯文十複波文十外向きの鋸歯文で構成され、外区内側斜面は無文である。外区の鏡背側断面は、内縁から匙状にゆるやかなカーブを描いて一気に外縁に至る。外区は鋳造後に研磨がほどこされており、最も外側の鋸歯文などは凹部がごく浅く、本来三角形であるべき鋸歯の頂部が台形を呈している部分さえ見受けられる。文様帶外辺に研磨が強くほどこされた結果と考えられる。

なお鏡背外区に付着した泥や朱に、本鏡を包んでいた布の布目痕が認められる。鏡面には布片が付着していた。そのため当該箇所は出土時のまま固定している。

2号鏡（「青龍三年」方格規矩四神鏡）

直径17.4cm、重さは約545gである（図25、図版第23・24）。厚さは外区で0.4～0.45cm、内区の図像のない部分で0.12～0.18cmをはかる。京都府・大田南5号墳の「青龍三年」方格規矩四神鏡と同型である。ただし鉤孔の向きは90°異なる。他鏡と同様に削りて出土し、土裏にして約400袋の堆土を洗浄したがついに全破片の検出に至らず、欠落部を生じた。完形で埋納されたことは疑い得ないところであり痛恨のきわみであるが、大田南5号墳の同型品から全貌をうかがうができるのはせめてものである。

遺存状況は全般に良好であるが、3号鏡の鏡面と接していた鏡背面の約4分の1周の外区から銘帯にかけて、及び鉤頭部に緑青鉛が認められる。それ以外はわずかで、1号鏡と接していた鏡面の約3分の1と、3号鏡と接していた鏡背面の一部に白銅色をとどめ、他は金属光沢をもつ黒色の色調を呈する。

鏡背面の図像は鮮明だがやや浅い。図の右下方、銘文の「王」と「青」の間に獎状の線が放射状に認められるほか、銘帯の3カ所に同様の繋がある。また四神や櫛齒文、外区の複波文などに盛り上がって文様がつぶれているところがある。いずれも鋳型の傷とみられ、大田南5号鏡より鋳型は傷んでいる。

鋳造後の研磨は、鏡面の全部、鏡背面の外縁・外区・鉤について行われている。また方格部と規矩文の内面はタガネで削り直しており、鉤座・圓線・図像・銘文・外区にもタガネ等の溝整痕がある。タガネ遣いは粗く手早く施されている。1号鏡と同様に、図像とくに外区鋸歯文の凹部には、デンドロイドが顕著に認められる。

鏡背面の構成 扁平な鉤のまわりを方格で区画し、内区に四神と瑞獸、T.L.V字形の規矩文などを配し、銘帯、櫛齒文帯をめぐらしている。外区は鋸歯文、珠点付複波文、鋸歯文で構成され半縁となる。

鉤 鉤は、扁平な半球状を呈し直徑2.9cm、高さは鏡背面から0.95cmをはかる。鉤孔は図の上を起点として35°～215°方向に設けられている。縦0.3cm、横0.7cmの断面長方形で、その下



图25 2号镜「青龍三年」方格规矩四神鏡

辺は鋲座上面から0.1cm上にある。孔縁の整形はしていない。鋲座は素円で径3.6cm×3.7cmのやや歪んだ円形である。上面は反時計回りに、タガネで円周方向に不整に研削されている。

方格 方格は一辺5.6cmで中央がやや外側にふくらむ。内側に突線で鋲座に外接する一辺3.75cmの方格を描き、その間に各辺に3字ずつ右回りに十二支銘と、円座をもつ半球形の小乳10個を配する。銘は直線的な字体で鎌倉風である。突線内側、鋲座の四隅には四葉文から変形した花文を線描きしている。

内区間像 規矩文は、方格各辺中央に外向きのT字形、相対する位置に正L字形、方格四隅に相対してV字形を配していて、T字の横線内側に2個ずつ、乳座をもつ半球形の乳を合計8個配置している。方格、規矩文とともにややいびつで、方格とL字形の隅は鈍角、V字形の隅は鋭角になっている。これら方格及び規矩文の溝内は、それぞれタガネで研削して断面V字形に仕上げている。研削面には溝に平行する条痕(刃こぼれ痕)と、直交方向の細かな凹凸が認められ、溝底は一方の斜面が深く切り込んで溝をなしてたり、逆に小さな稜があるこったりしている。こうした痕跡から、平刃のタガネを片側1~3回ずつあててV字の斜面を片側ずつ削り替えてることがわかる。図右側のT字形の横棒左斜面と、下側のT字形の縦棒は未調整で、その形状は断面U字形を呈している。この未調整の部分と比べると、文様にメリハリを利かせるうえで、平刃による研削の結果である溝底の条線やそれと直交する細かな起伏は、大きな効果をあげている。

「青龍」「朱雀」「白虎」「玄武」の四神は、線描で方格の左寄りに左向きで、そして右寄りには4体の瑞獸・人物が右向きに配されている。よって方格の隅をはさんで青龍と人物、朱雀と鳥、白虎と人物が乗る馬、玄武と振り返る走獣が向き合う格好になっている。そしてこれらと規矩文の間は、18個の渦文で埋められている。なお青龍の前肢と後肢、白虎の後肢には鉛潰れた部分があるが、タガネで上面を調整している。

銘帯 銘帶は幅0.6cm。銘文は岡下からはじまり、右回りに「青龍三年 顔氏作鏡成文章左龍右虎辟不詳 朱爵玄武則陰陽 八丁九孫治中央 緋如金石宜飲王」の39文字(岡版第32)。陰陽八丁は縁青銘のため判読できないが大田南5号墳出土鏡から補える。字体は直線的で、字の高さは文頭「三」の3.1mmからなかなか「爵」の9.3mmまでばらつきがあり、字間も文末にいたって詰まるなど不揃いである。また「三年、左、壽、金石」は綴がかかっていて、「年」のみタガネをあてている。内側の闇線、規矩文付近もタガネの調整痕が認められる。闇線を介して外側の歯文は放射状。ただし図の上を起点として $40^{\circ} \sim 110^{\circ}$ 、 $150^{\circ} \sim 210^{\circ}$ の間にみられるように、外側が右方向へわずかに斜行する部分がある。

外区 外区は外向きの锯歯文十珠点付複波文十外向きの锯闇文で、縁は平縁。複波文は岡の上部 340° から 20° にかけてやや乱れ、1か所交叉するところがあってそこには珠文が欠け

ている。施文の終始点であろう。外区については、鋸歯文を構成する三角形の一方の斜辺(頂点を上にしたとき左側)にほぼ平行する段や擦傷がついているのが認められる。おそらく幅広の刃物で外区表面を研削した痕跡と考えられ、時計回りにそれを行ったのち、さらに研磨をくわえたものと考えられる。

3号鏡(三角縁「天・王・日・月・吉」獸文帯四神四獸鏡)

直径22.5cm、重さ約1,175gである(図26、図版第25・26)。外縁は外縁で1.1cm、外区内縁で0.3cm、内区の図像のない部分で0.15~0.25cmをはかる。同型鏡と目されるものとして兵庫県・安田古墳出土鏡と東京国立博物館所蔵写真資料の2例があり、類似鏡として兵庫県・櫛現山51号墳1号鏡などがある。

遺存状況はきわめて良好で、鏡面の2号鏡背面外区に対応する緑青鉛、及び鏡背面に小さな緑青鉛を認めるほかは、全体が金銅光沢をもつ白銅色を呈する。なお本鏡は大きく2片に割れて出土したが、X線像をみると内部に多数の亀裂をはらんでおり、鏡面もそれを反映して微妙に屈曲している。

鏡背面の図像はやや甘く、また全面に微小な皺と空隙が広がっていて図像の観察に困難を覚えるほどであり、全体として鋳上りは粗い。図の右側、対になった獸形の間及び獸帶から櫛齒文帯にかけて、さらに図右下方の外区鋸歯文には、盛り上がって文様が失われているところがあり、鋳型の崩れとみられる。また號状の線が放射状に、図の上を起点として 10° ・ 20° ・ 60° ・ 90° ・ 120° ・ 180° ~ 190° ・ 280° の方向に、長いものでは鏡座から三角縁の内側斜面まで伸びている。この號は平坦面では突起し、図像の降起部では比較的深い號となって続いている場合があり、鏡についても比較的深い號が外側の號から連続して、主として放射状に走っているのが認められる(鏡の號は図では省略した)。

鋳造後の研磨は、三角縁の面斜面に顕著に認められるが、鏡面及び外区、鉢などは1号鏡などに比べると艶出しといえる程度にとどまっている。とくに鏡面では、いたるところにデンドロイドが観察され、むしろ鋳放しに近い。内区では紐のほか、乳頭部や図像降起部に光沢がみられる。

鏡背面の構成 中央に鉢と鉢座があり、内区は孔によって4つに区画され、2体一組の神像と2体一組の獸像を交互に配置した複像式である。神像間には傘松形文様が配され、界囲は外向きの鋸歯文。その外側には獸文帯がめぐらされ、さらに櫛齒文帯となって外区となる。外区内側斜面は外向きの鋸歯文がほどこされている。外区は鋸歯文十珠点付き波文十鋸歯文十外周突線で構成され、突出した三角縁となる。

鉢 鏡は半球状を呈し直径3.5cm、高さは鏡背面から1.65cmをはかる。鏡孔は 65° ~ 225° 方向

に設けられている。縦0.5cm、横0.85cmの断面長方形で、その下辺は鏡背平坦面から0.2cm上にある。鋲孔は比較的整っているが、孔縁は整形していない。鋲表面は放射状に縫が走り、頂部には直径3mmほどの丸みを帯びた突起がある。鋲座は、鋲とは独立してて断面は扁平な半円形を呈し、椭円文8個と弧文で構成される有筋重弧文1帯を配している。椭円文の内側はわずかに降起している。

乳 乳は4個ある。乳座をもたず、下半に上向きの鋲巻文を巻いている。鋲巻文の数は、神像の右隣(図では左上と右下)の乳が7個、左隣(同右上と左下)は8個ある。乳の底径1.4~1.5cm、鏡背面からの高さ0.8~0.9cm。先端は尖り気味に丸くおさめている。

内区圖像 神像は、2体一組で鋲をはさんで対置され、計4体ある。4体とも翼をもち三山冠をかぶるなど良く似た表現がなされているが、細部は多少違いがある。図で右上に位置する神像の三山冠は、他の3体が鋸歯状であるのに対して櫛歯状の表現がなされ、またV字形の衿の両側の弧文も多い。そしてこの上側の2体は、下半身の隆起に縫線が表現されている。獸像は、向き合う2体が一組となり鋲をはさんで対置され、計4体ある。頭部は正面形にあらわされ目を欠き、頭部以下は側面形に描かれるなど、いずれも共通した表現がなされている。なおそれぞれ左側の獸像は頸部から胸部にかけて弧文を配するのに対し、右側の獸像では弧文は頸部だけにほどこされている。

傘松形文様は、2体の神像の間にあって鋲をはさんで対置されている。いずれも頂部の小乳状の珠文からのびる柄に三日月形の房状の傘を3段重ね、基部に振り文をもつ円環を置いている。図上方の円環内には珠文を配している。

獸文帯 鋲巻文を配し一段高い界縁の外側に、5方格と5小孔で10区画に分けられた獸文帯がめぐる。5方格は縦0.65~0.7cm、横0.65~0.8mm、背面からの高さ0.12cmあり、「天」「F」「日」「月」「吉」銘が字の上を内側に、右回りに1文字ずつ鉄出されている(図版第33)。5小孔は円座をそなえ高さ0.25cm。10の区画には、それぞれ1体から2体の獸像が配されている。配列は右回りに「犬」、魚とそれを追う首を伸ばした鳥、〈小乳〉、走獸、「王」、首を交差させた一対の鳥、〈小乳〉、魚と蛇(玄武)、「日」、振り返る走獸、〈小乳〉、走獸、「月」、翼を広げた鳥、〈小乳〉、人物、「吉」、走獸、〈小乳〉、向き合う一対の鳥である。走獸・鳥などは背を内側に頭位右として描かれているが、人物は腹側が内、頭位が左となつてひとり異なっている。

獸文帯の外側は櫛巻文帯がめぐる。放射状ながら施文はやや不揃いで、図の50°~120°、250°~310°の間は外側が左側にやや斜行している。

外 区 外区の内側の斜面には外向きの鋲巻文がほどこされている。外区は内側から、外向きの鋲巻文、上下に珠文を配した単線の波文、外向きの鋲巻文の3帶で構成され、外周突線がめぐらされて三角縁となる。波文は比較的揃っているが、山が丸くなったり(図の330°方

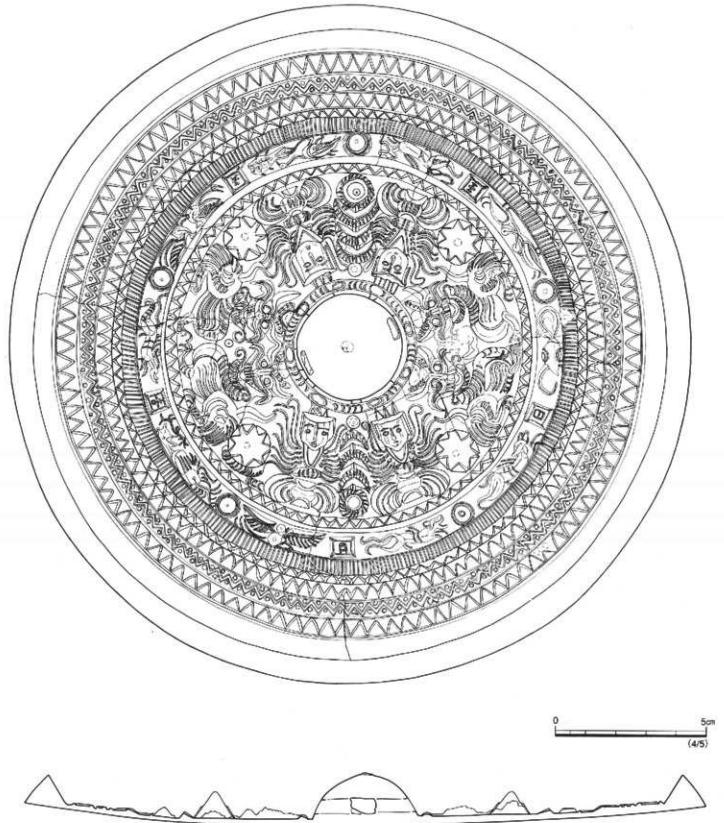


圖26 3號鏡（三角緣「天・王・日・月・吉」獸文帶四神四獸鏡）

向)、ピッチが乱れる一画がある(同90°～150°方向)。140°方向には、施文の終始点であろう、波文がうまくつながらず食い違っているところがある。

4号鏡(斜縁「吾作」二神二獸鏡)

直径15.8cm、重さ約438gである(図27、図版第27・28)。厚さは外縁で0.7cm、外区内縁で0.2cm、内区の図像のない部分で0.1cmをはかる。類似鏡に大阪府・和泉黄金塚古墳鏡や鳥取県・造山3号鏡などがある。

遺存状況はきわめて良好で、鏡面及び鏡背面とともに、柔らかい金属光沢を放つ濃緑灰色の安定した色調を呈する。本鏡は5号鏡の鋤によって内区約3分の1が打ち抜かれるような形で小さく割れ、外区は1か所破断した状態で出土した。そのため全破片を接合しようとするとかえって全体が重む恐れがあり、現状では、打ち抜かれた内区を別破片で保管している。

鏡背面の図像は精緻で、鋤上がりも良好である。鋤造の際、冷却時の条件が異なるのか評らかではないが、他鏡にみられる表面凹部のデンドロイドもほとんど認められず、きめの細かい均一な鉄肌である。図上側の鋤孔下半から神像頭部にかけて形が崩れ文様が甘くなっているところがあり、縁は図の右方90°の方向に1条あってその右では櫛歯文が一部つぶれてい る。

鋤造後の研磨は鏡面、外縁、外区、乳、鋤にほどこされている。また図像の隆起部とくに直線は、弱い研磨がほどこされたのかあるいは手すれか判然としないが、光沢があって黒ずんでみえる。

鏡背面の構成 中央に鋤と鋤座があり、内区は乳によって4つに区画され、侍仙を伴う神像と獸像を交互に1体ずつ配置し、圓線を介して銘帯、さらに圓線を介して櫛歯文帶で構成されている。外区内側斜面は無文で、外区は鋤齒文十菱形珠文付き複波文十鋤齒文十外周穴線で構成され、短く立ち上がって斜縁となる。

鋤 鋤は、扁平な半球状を呈し直径2.65cm、高さは鏡背面から1.12cmをはかる。鋤孔は図の上を起点として10°～195°方向に設けられ、やや左側に偏っている。鋤孔断面は縦0.35cm、横0.65cmの隅丸台形で、その下辺は鋤座の約0.2cm上にある。孔縁は整えられ、半滑で丸みを帯びているが、一方の孔縁は下半が鋤座まで崩れていて、その表面は泡立ったようになっている。鋤座は素文で、径3.08cm、鏡背平坦面からの高さ0.1cmある。縁は圓線状に小さく隆起している。

乳 乳は4個ある。半球形で、素文の円座をそなえる。乳の底径0.9cm、鏡背面からの高さ0.45cm。径1.2cmの円座の縁は、鋤座と同様に圓線状に小さく隆起している。

内区図像 神像は、侍仙を伴い2体ある。図上側の像は、鋤齒状の三山冠をかぶり、丸顔、

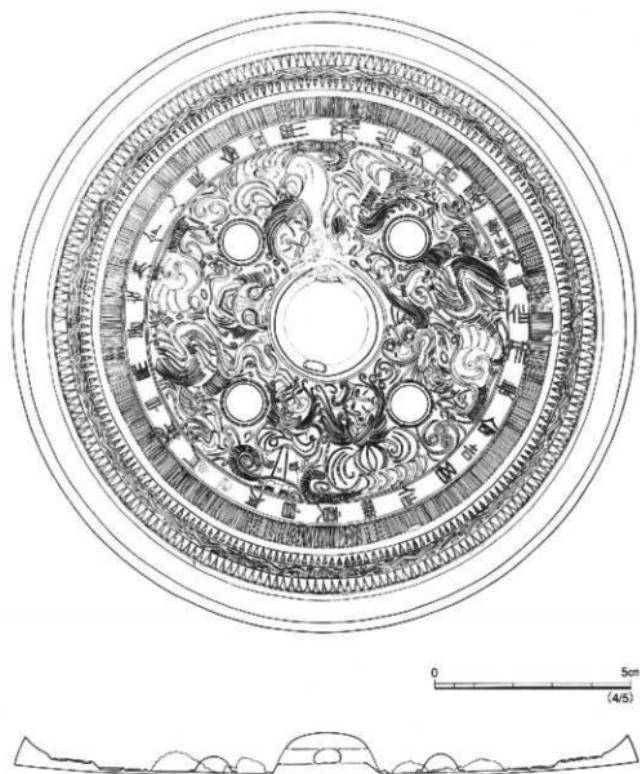


図27 4号鏡（斜線「吾作」二神二獸鏡）

有臂で頸を右に90°近く傾げて衿は鶴先形。頸部と体軸の中心を揃えているために衿の合わせは右袂までずれこんでいる。両袂は大きく隆起し、両手は裾から出して胸前へかざし、大振りの弧文は下半身であろうか、左端に細かい刻みをもつ尾が取りついている。「東王父」である。左側に側面形の侍仙を配している。岡下側の像は、双巻冠をつけ顔はやや面長、やはり頸を傾げているが衿合せの傾きは上の像ほどでない。両手は袂中で重ねていって、下半身の表現はさきと共通している。「西王母」である。侍仙は正面形で左手を挙げ單袍の裾から尾のがび、両足も表現されている。獸像は左向きに、頭部は正面形で以下は側面形にあらわされ、図の右が白虎、左が青龍である。そしてこれら岡像の余白は、渦文や巴文で埋められている。いずれも描線は流麗で力強い。

銘帯 銘帯は幅0.57cm。銘文は図右下からはじまり、右回りに「吾作明鏡白有己 青龍白
馬居左有 令人長命宜子孫 作史高遷車生采耳 作師長命吉」の34字(図版第33)。隸書風の
角ばった字体で鮮明に鋳出されており、字の大きさは銘文後半の「子孫」が高さ7mm、「車」
が3mmと開きがあるものの他は4~5mm程度であり、字間は文頭「吾」と文末「吉」の間をのぞ
けばほぼ揃っている。

樹齒文は放射状に、圓線より低く鋳出され、樹齒の断面は蒲鉾形で密に施文されている。
外区 外区は、外向きの鋸齒文、菱形の珠文を上下に配した複波文、外向きの鋸齒文の3
帶で構成され、その外側に外周突線をめぐらしている。外側の鋸齒文は、図の左270°方向に
鋸齒が重なっているところがあり、割り付けの終始点であろう。

外縁内側斜面は、外周突線外側で斜めに短く立ち上がって稜をなしたのち、ゆるく湾曲して頂部にいたる。外縁はよく研磨がほどこされていて、外側斜面と内側斜面・鏡面のなす2
稜は軽く面取りされている。

5号鏡(平縁「陳是作」同向式神獸鏡)

直径17.6cm、重さ約714gである(図28、図版第29・30)。同型鏡はみられないが、内区に同様なモチーフをもつものとして和泉黄金塚古墳の画文帶同向式神獸鏡、島根県・神原神社古
墳「景初三年」鏡、群馬県・柴崎蟹沢古墳「正始元年」鏡があげられる。

遺存状況は良好で、鏡面及び鏡背面とともに、にぶい金属光沢のある漆黒色の安定した色調を呈する。ただし鏡面や外縁の一部に経青銹を生じている個所がある。

鋳上がりは良好であり、微小なひびはほとんど認められない。ただデンドロイドは鉢や外
区の文様凹部に認められる。図の上を起点として40°~90°・120°~150°・240°~300°・330°
方向の外区文様帶には文様凹部がつぶれたりしているところが20か所以上あり、號は50°~
270°の方向に上方を横切って走るものと、その途中から330°の方向へ分岐してのびるもの

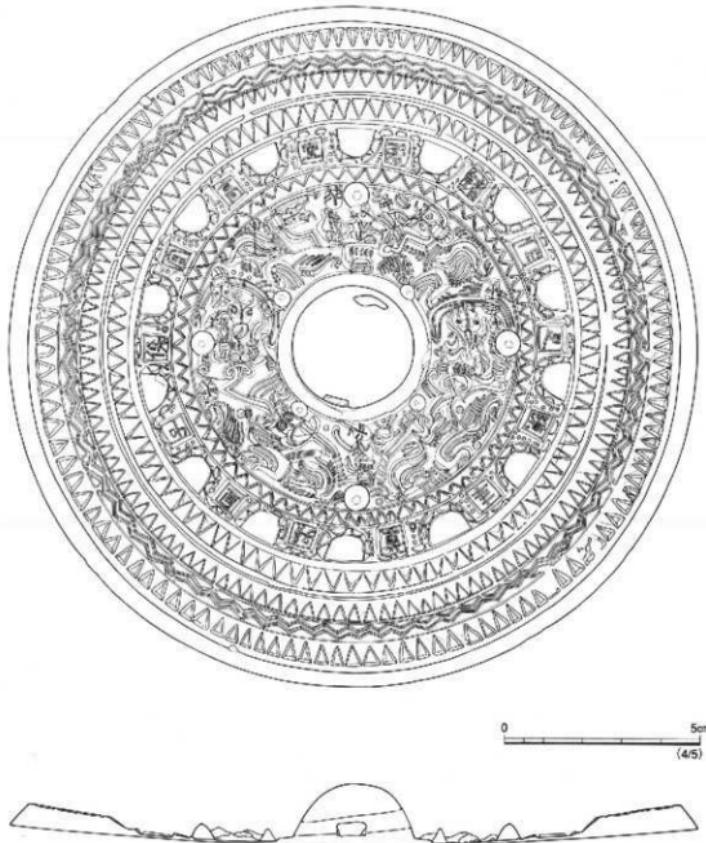


図28 5号鏡（平縁「陳是作」同向式神獸鏡）

目立つ。

鋳造後の研磨は鏡面、外縁、外区、鉢にほどこされている。乳や図像の隆起部は、弱い研磨がほどこされたのか手ずれか判然としないが、光沢があって黒ずんでみえる。

鏡背面の構成 中央に鉢と鉢座があり、上下左右に4神像、上位・中位・下位に各一对の6獸像を配した同向式で、鉢座まわりと界囲ぎわにそれぞれ4小乳を配置している。界囲の外側は半円形と方格を交互に14ずつ配した半円方形帶となり、方格には1文字ずつ銘が鋤出されている。外区内側斜面は鋸齒文をほどこしている。外区は、内側から沈線十鋸齒文十複波文十鋸齒文で構成され、縁は平縁である。

鏡 丈高の半球形を呈し直径3.1cm、鏡面からの高さは1.6cmである。鉢孔は15°-195°方向に設けられている。鉢孔断面は縦0.3cm、横0.75cmの長方形で、岡下の方の鉢孔下辺は鉢座とほぼ一致し、他方は鉢座から0.25cm上方にあって鉢孔は傾いている。前者の孔縁は長方形だが後者は勾玉形で、いずれも鋤放しである。鏡の表面は研磨されているが、側面には縱方向(俯瞰すれば放射状)の条痕が観察される一方、頂部には凹周方向に浅い渦みが不連続に認められる。おそらく鉢上がった段階で鏡の凹凸が激しかったため、研削後に研磨をほどこしたのである。鏡の側面の立ち上がりが直線的なのは、そのためかもしれない。鉢座は素文で、径4.0cm、鏡背平坦面からの高さ0.1cmである。

小乳 小乳は鉢座まわりと外辺界囲ぎわに、それぞれ4個ある。いずれも乳座はない。鉢座まわりのものは正方位から45°振った位置に配されている。径0.4cm、背面からの高さ0.3-0.35cmで、中ほどで屈曲して丸く突き出し、低平な円錐台に釣鐘を載せたような形状を呈している。外辺の小乳は正方位に配され、径0.6cm、高さ0.4cmの丸みを帯びた円錐形を呈する。

内区図像 神像は4体ある。上位の像は、双巻冠をつけ瓜ぞね顔、頸を右に傾げて神座上に端座し、膝上に突帶で琴が表現されている。「伯牙」である。左右に2像を伴う。左、「成達」は三山冠をかぶった座像で、右「鐘子期」は髪を結った立像であらわされている。中位右は、三山冠をかぶり端座する有翼の「東王父」である。横向きのC字形の天蓋がかざされている。右に正面形立像の侍仙を伴うようであるが小乳にかかっていて判然としない。中位左は、双巻冠をつけ端座する有翼の「西王母」である。やはり天蓋がかざされている。こちらも左側に侍仙を伴うようであるが、小乳のため判然としない。下位の像は、頭を右に傾げて神座に端座する。「黄帝」であろうか。翼と尾が表現されている。「伯牙」と「黄帝?」の像は、それぞれ上下に小乳があるため小さい。これら神像や侍仙の表現は、顔と頭(冠)の区別がなく、鼻梁の線が額から頭頂部まで貫いていて、むしろ獸像の頭部の表現に通じるところがある。

獸像は上位・中位・下位にそれぞれ一対、合計6体ある。上位の像は、「伯牙」など3像を

はさんで外向きに対置されている。巨をくわえる頭部は正面形、以下は側面形に表現されている。中位の一对は、それぞれ左右の天蓋を支える頭部のみ表現されている。天蓋の外寄りの屈曲部をくわえているが、右は正位、左は上下逆位となっている。下位の獸像は、「黄帝?」をはさんで内向きに対置されている。巨をくわえる頭部は左側が正面形、右側は側面形にあらわされていて、頭部以下は側面形である。巨の一端は上にのび、それぞれ「東王父」「西王母」の神座を支える格好となっている。このほか下位左の獸像の尾の先に、人であろうか、小さな頭部が表現されている。以上の神像・獸像は合計15体を数える。像と像の間には、弧文や珠文が配されている。

図像部の外側は、細い圓線と外向きの鋸齒文をほどこした界囲がめぐる。界囲は周囲より0.1cm高くなっている。圓線は全周で図像や小乳に侵されていて施文時の割り付け線とみられ、図の右上方、棲が二重になっているあたりが終始点と考えられる。また界囲の鋸齒文は図下方にピッチが乱れた部分がある。施文の終始点であることをうかがわせる。

半円方形帯 幅1.0cmあって、半円部と方格部がそれぞれ14個、交互に配されている。半円部は無文で、外周に5つ(但し「孫」と「萬」の間の半円部は4つ)の小花文を巻き、幅を界線で縮めている。上面は小花文上縁よりわずかに下にあり、施文時に平坦面を整えたさいの調整痕が認められる。方格部は縦0.7~0.75cm、横0.62~0.75cmほどで、銘が1文字ずつ鋳出されている。方格部の外側、半円部と半円部の間には、小花文が3つずつ配されている。半円部と方格部の間は、それぞれ1~7個の珠文で埋めているが、「保」の右と「萬」の左は小円環を1個ずつ加えている。

銘は「陳是作鏡 君宜高官 保子宜孫 萬年」の14字(図版第33)。「官」は鏡字である。篆書風の丸みを帯びた字体で、各方格部の中央に字の上を外側に1文字ずつおさめて四周を突線で囲っているが、「鏡」には余白がとれなかつたのか突線はみられない。

半円方形帯の外側は幅0.2~0.25cmほどの素文の界囲がめぐり、外区内側斜面には外向きの鋸齒文がほどこされている。

外 区 内側に沈線をめぐらせ、文様帶は外向きの鋸齒文、複波文、外向きの鋸齒文の3帯で構成され、平線の外縁となる。有溝突帶の退化とみられる沈線は最大で幅1.5mm、深さ0.5mm程度で、図の90°・170°・290°・330°の方向にはかずれるように途切れたところがある。また外側の文様帶は、全般に凹部がやせていて鋸齒文や複波文の頂部が圓線などとつづいているところが多い。凹部の鋳つぶれたところが20か所以上散見され、おそらく鋳上がり時の不具合を整えるために上面を強く研削したものであろう。本鏡の外区上面は微妙に波打ち、文様帶に斜行する条痕やごく浅い段がついているのが認められる。おそらく2号鏡と同じように、幅広の刃物で外区表面を研削したのち、さらに研磨をくわえたものと考えられる。

b. 鉄製品

鉄製品は、直刀 1 点、斧・刀子・鈍各 2 点、鎧・鎌各 1 点の総数 9 点がある(図29~31、図版第34)。調査途上の観察では鈍 3 点と考えていたが、うち 1 点はその後の整理作業のなかで刀子と判明している。現状は錆落とし後、脱塩・樹脂含浸を行い保存措置を講じている。なお法量はすべて現状での計測値である。

直刀 切先を西に、刃を南に向けて出土した。全長 68.0cm、刃身長 54.8cm のほぼ完形品である。身は幅 2.5~3.0cm、背の厚さ 0.4cm でやや内反りする形状を呈する。闇は片闇で、斜めに茎基部へつづく。茎部長 12.5cm、幅は 2.3cm~1.3cm あって茎尻は一字文字尻である。重量は約 474.0 g である。目釘穴は鍛るために X 線写真によっても判然としない。刃身・茎部とともに木質や布等の痕跡・錆着は認められず、柄・鞘とも存在しなかった可能性が高い。

斧 2 点出土した。斧 1 は短冊形の板状斧、斧 2 は有袋斧である。

斧 1 は直刀中央部の上で、刃を東に向けて出土した。全長 22.6cm、厚さ 1.0cm である。基部幅は 5.0cm、刃部は一端を欠いており、最大幅は刃部から約 3 分の 1 のところで 7.0cm をはかる。重量は約 738.7 g である。弧を描く刃部は研ぎ直されているとみられ、現存幅 6.2cm だが本来は幅 7.5cm 程度あったものと考えられる。刃は両刃である。

斧 2 は直刀の東側で、刃を東に向けて出土した。ほぼ完形で全長 11.2cm、刃部幅 4.7cm、厚さ 0.5cm をはかる細身のものである。袋部は長さ 7.5cm、上端で外径 3.7cm × 2.4cm あって基部へ向けて徐々に幅がせまくなり、最小幅は全体のほぼ中位にあって 3.3cm をはかる。重量は約 72.9 g である。刃部はゆるやかに弧を描き、刃は両刃である。

刀子 2 点出土した。刀子 1 は、切先を東に、刃を北にむけて闇の下面に錆着して出土した。全長 10.1cm、刃部長 6.8cm、刃部幅 0.7~1.0cm、背の厚さ 0.2cm、茎部長 3.2cm あり、ほぼ完形である。闇は直角の小さな片闇で、茎部に目釘穴はなく茎尻は一字文字尻である。重量は約 8.3 g である。

刀子 2 は、切先を東に、刃を北にむけて出土した。全長 9.5cm、刃部長 5.6cm、刃部幅 0.6cm をはかり、背の厚さは 0.1cm と薄い。重量は約 2.5 g である。闇は片闇で茎部へ斜めに移行する。茎部は長さ 3.5cm、

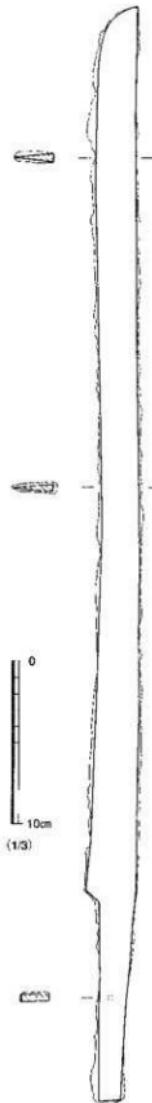


図29 直刀

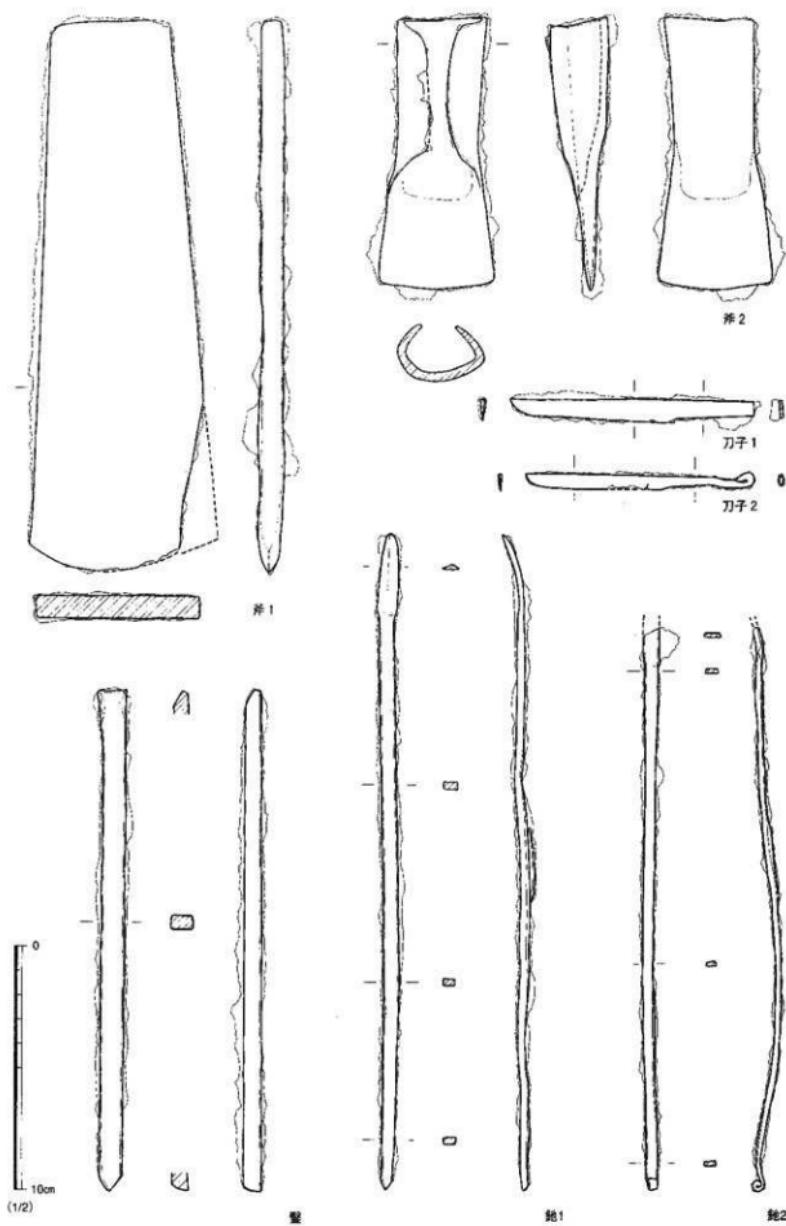


図30 鉄製工具 斧・刀子・鋤・鑿

幅0.4cm、厚さ0.2cmあるが、途中で刃側に湾曲させ、茎尻は先端を背側に折り曲げて藤手状におさめている。

鉈 2点出土した。鉈1は完形品で全長26.9cm、そのうち刀部は長さ3.4cm、最大幅0.8cm、最大厚0.2cmである。両側に刃をつけ、やや反りをもつ。鎌のため基部付近ははっきりしないが鎌は三叉鎌であろう。刀部をのぞく部分は長さ23.5cm、幅0.6cm、厚さ0.3cmをはかり断面形状は長方形

を呈する。基部末端はゆるく尖らせておさめている。重量は約28.4gである。

鉈2は刃部先端を欠く。現存長23.1cm、うち刀部は1.7cm、最大幅0.8cm、最大厚0.2cmである。形状は鉈1と共通するとみられ、復元長25cm程度であろう。鎌化がはげしく鎌は明確でない。刀部をのぞく部分は長さ21.4cm、幅0.5cm、厚さ0.2cmをはかり断面形状は長方形を呈する。基部末端はやや薄く幅狭に仕上げ、刀子2と同様に折り曲げて藤手状におさめている。重量は約12.9gである。

鑿 1点出土した。刀部の一部を欠くがほぼ完形である。全長20.5cm、刃部幅1.2cmをはかる。刃は片刃である。刀部をのぞく部分は長さ19.9cm、幅0.8cmあって、厚さは基部で0.8cm、刃部で0.6cmと刃部へむかってわずかに薄くなる。断面形状は角が丸みを帯びた長方形を呈する。基部末端から0.6cmの範囲は両側刃を面取りし、主頭形におさめている。重量は約82.3gである。

鎌 1点出土した。ほぼ完形で全長14.0cm、幅3.7cm、背の厚さ0.3cmである。重量は約62.8gである。背側は直線的だが刃側は途中で2度屈曲しており、もとは先端が幅狭の直刃だったものを研ぎ減りしたともみられる。基部には、先端を左に刃を下に置いたとき上方へ向く折り返しがつく。折り返しの形からほぼ直角に柄がつくタイプと考えられる。

C. ガラス小玉

ガラス小玉は1,641個を数える。うち完形品は1,539個あり、表1~3にその法量別数量を示した。形状・色調など特徴的なものを選び、図化した(図32・33、図版第35、表4・5)。

直径3~4mm、厚さ2~3mmのものが全体の約67%を占め、平均値は直径3.9mm、厚さ2.7mmほどである。大半は、ほぼ中央にある最大径からなだらかに平らな両端面につづく太鼓形を呈す

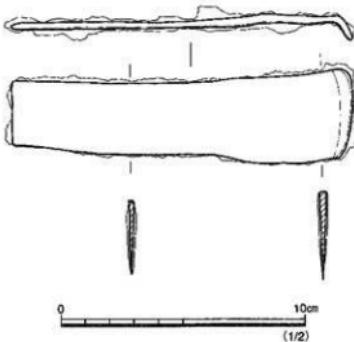


図31 鎌

る。直径/厚み比は1.4~2程度、孔径は1.5mm前後とよく揃っている。しかし直径/厚み比が1.0に近い円柱状のものの中には、側面観が平行四辺形を呈するものがある。また厚さ1.5mm以下の薄手のものや直径4.5mm・厚さ3.5mmを超える大振りのものは北群に集中しており、南群の方が大小のばらつきが小さくまとまっている(図34)。気泡は多く、球形で、表面に開口しているものも多數認められた。色調は透明で深いスカイブルーを基本とするが、劣化のすんだものは濁った淡緑色ないし白色を呈する。肥塚隆保氏に分析をお願いし、これらはカリガラスであり、色は、銅イオンによる着色であることが判明している(付論2参照)。

さて、南群737個、北群836個、その他68個の玉は、出土位置からみて被葬者へ直接装着された状態とは考えがたい。そこで本来の形状・用法は連接構造から推定することになるが、その連接構造の詳細は、取り上げ時の観察によつてもなお明確でない。ただ南群では東西方向に並ぶ各列が、両端部で水平もしくは垂直方向に小さな弧を描いて連なる状態が観察され、15列

厚	-3.0mm	-3.5mm	-4.0mm	-4.5mm	-5.0mm	-5.5mm	計
-1.5mm	—	3	7	3	—	—	13
-2.0mm	—	58	128	13	1	—	200
-2.5mm	2	131	422	49	2	—	606
-3.0mm	3	148	325	31	7	—	514
-3.5mm	2	55	78	4	15	4	158
-4.0mm	1	16	3	4	15	6	45
-4.5mm	—	—	—	—	1	1	2
-5.0mm	—	—	—	—	1	—	1
計	8	411	963	104	42	11	1539
計測除外外分							102
合							1641

表1 ガラス小玉一覧表(単位:個)

厚	-3.0mm	-3.5mm	-4.0mm	-4.5mm	-5.0mm	-5.5mm	計
~1.5mm	—	—	—	—	—	—	—
~2.0mm	—	23	39	9	—	—	71
~2.5mm	61	186	31	1	—	279	
~3.0mm	1	76	162	23	—	262	
~3.5mm	2	20	47	1	—	70	
~4.0mm	—	7	—	—	—	—	7
~4.5mm	—	—	—	—	—	—	—
~5.0mm	—	—	—	—	—	—	—
計	3	187	434	64	1	—	689
計測除外外分							48
合							737

表2 ガラス小玉南群 一覧表(単位:個)

厚	-3.0mm	-3.5mm	-4.0mm	-4.5mm	-5.0mm	-5.5mm	計
-1.5mm	—	3	7	3	—	—	13
-2.0mm	—	31	86	4	1	—	122
-2.5mm	1	66	224	16	1	—	308
-3.0mm	2	70	152	7	7	—	238
-3.5mm	—	31	26	3	13	—	77
-4.0mm	1	8	1	4	12	4	32
-4.5mm	—	—	—	—	1	6	2
-5.0mm	—	—	—	—	1	1	1
計	4	209	496	37	36	11	793
計測除外外分							43
合							836

表3 ガラス小玉北群 一覧表(単位:個)

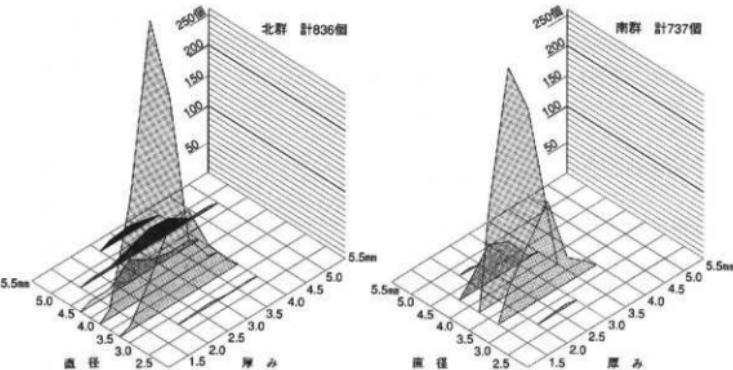


図32 ガラス小玉の法量分布

No	長径mm	短径mm	厚みmm	孔径mm	備考
1	2.9	2.6	2.2	1.5	北群
2	2.7	2.7	2.8	1.5	~
3	3.0	2.7	2.9	1.5	~
4	2.6	2.4	2.8	1.0	南群
5	3.8	2.7	4.1	1.1	~
6	2.9	2.8	3.7	1.0	~
7	2.9	2.8	3.7	1.0	北群
8	3.3	3.3	1.7	1.5	~
9	3.4	3.3	2.0	1.5	~
10	3.5	3.3	1.6	1.5	~
11	3.4	3.5	1.7	1.7	南群
12	3.6	3.2	3.1	1.5	~
13	3.5	3.2	2.1	1.5	北群
14	3.3	3.3	1.9	1.5	~
15	3.5	3.4	1.7	1.5	~
16	3.5	3.5	2.4	1.5	~
17	3.4	3.2	2.4	1.5	~
18	3.4	3.2	2.4	1.5	~
19	3.3	3.2	2.2	1.5	南群
20	3.3	3.3	3.0	1.0	北群
21	3.6	3.3	2.2	1.4	南群
22	3.2	3.0	2.6	1.6	~
23	3.6	3.2	2.5	1.4	~
24	3.4	3.3	2.5	1.0	北群
25	3.3	3.3	2.2	1.5	~
26	3.1	3.1	2.8	1.0	~
27	3.4	3.4	3.0	1.5	~
28	3.3	3.1	3.0	1.5	南群
29	3.3	3.2	2.1	1.0	北群
30	3.1	3.0	3.1	1.2	南群
31	3.3	3.3	2.5	1.0	北群
32	3.3	3.2	2.5	1.2	南群
33	3.4	3.4	3.0	1.5	北群
34	3.1	3.0	2.6	1.0	~
35	3.4	3.3	3.3	1.5	南群
36	3.0	2.8	3.3	1.5	~
37	3.4	3.4	3.0	1.5	北群
38	3.1	3.2	3.4	1.0	~
39	3.4	3.1	3.4	1.0	~
40	3.2	3.1	3.8	1.0	~
41	3.1	2.8	3.2	1.0	~
42	3.3	3.2	3.6	1.5	南群
43	3.2	3.1	3.6	1.0	北群
44	3.5	3.3	3.4	1.4	南群
45	3.3	3.3	3.7	1.5	北群
46	3.1	3.1	3.2	1.5	~
47	3.3	3.0	3.8	1.5	南群
48	3.3	3.1	4.0	1.2	~
49	3.3	3.3	3.8	1.0	~
50	3.2	3.1	3.4	1.0	~
51	3.2	3.2	3.9	1.0	北群

No	長径mm	短径mm	厚みmm	孔径mm	備考
52	3.3	3.2	3.6	1.5	北群
53	3.6	3.4	3.6	1.5	~
54	3.6	3.5	2.1	2.0	~
55	3.8	3.4	2.1	2.0	~
56	3.9	3.6	1.5	1.5	~
57	3.5	3.5	1.9	1.0	~
58	3.7	3.5	1.9	1.8	南群
59	3.7	3.7	1.8	2.0	北群
60	3.7	3.7	2.1	1.5	~
61	3.5	3.2	2.1	1.5	南群
62	3.6	3.4	2.0	1.6	~
63	3.7	3.4	2.1	2.0	~
64	3.5	3.5	2.0	1.0	北群
65	3.6	3.6	2.1	2.0	~
66	3.4	3.3	2.6	1.6	南群
67	4.2	3.8	2.2	2.3	~
68	3.8	3.7	2.1	1.7	~
69	3.7	3.7	2.4	2.0	北群
70	3.7	3.7	2.4	2.0	~
71	4.0	3.7	2.1	1.0	~
72	3.7	3.3	2.9	1.5	~
73	3.8	3.7	2.1	1.9	南群
74	3.9	3.7	2.4	1.0	北群
75	3.7	3.4	2.5	1.0	~
76	3.7	3.6	2.4	1.5	~
77	3.6	3.3	2.2	2.0	~
78	3.6	3.5	2.3	1.5	南群
79	3.8	3.7	2.8	1.5	北群
80	3.7	3.6	3.0	1.0	~
81	3.6	3.5	2.3	1.5	南群
82	3.6	3.5	2.6	1.0	北群
83	3.8	3.6	2.2	1.5	~
84	3.8	3.6	2.2	1.0	~
85	4.0	3.8	2.2	2.0	~
86	3.8	3.7	2.4	1.6	南群
87	3.7	3.6	2.5	1.0	北群
88	4.0	3.9	2.1	1.8	南群
89	3.7	3.5	2.1	1.5	北群
90	3.9	3.8	2.2	2.0	南群
91	3.4	3.3	2.3	1.0	北群
92	3.7	3.6	2.2	1.5	南群
93	3.8	3.8	2.1	2.0	北群
94	3.5	3.5	2.4	1.0	~
95	3.4	3.4	2.8	1.0	~
96	3.6	3.5	2.7	1.5	南群
97	3.8	3.8	2.0	1.5	北群
98	3.3	3.3	3.0	1.5	~
99	3.9	3.8	2.5	1.2	南群
100	3.7	3.5	2.9	1.2	~
101	3.8	3.8	2.7	1.5	北群
102	3.6	3.3	3.1	1.7	南群

表4 ガラス小玉計測表(1)

No	長径mm	短径mm	厚みmm	孔径mm	備考	No	長径mm	短径mm	厚みmm	孔径mm	備考
103	3.7	3.6	2.7	1.4	南群	154	4.1	3.6	2.1	1.5	北群
104	3.9	3.4	2.7	1.6	~	155	4.1	3.9	2.8	1.4	南群
105	3.8	3.8	2.7	1.5	北群	156	4.0	3.8	3.0	1.3	~
106	3.6	3.2	3.0	1.0	~	157	3.9	3.9	2.7	2.0	北群
107	3.8	3.4	2.6	1.5	~	158	4.0	3.9	3.0	2.0	南群
108	3.6	3.4	2.5	1.5	~	159	4.1	3.8	2.6	2.0	北群
109	3.7	3.4	2.8	1.4	~	160	4.0	3.8	2.9	1.5	南群
110	3.9	3.7	2.6	2.1	~	161	4.0	3.8	2.8	1.5	北群
111	3.8	3.3	2.9	1.3	南群	162	4.0	3.7	2.6	1.5	南群
112	3.5	3.4	2.8	1.4	北群	163	4.1	4.0	2.6	1.0	~
113	3.8	3.6	2.7	1.6	南群	164	4.2	3.8	2.6	1.5	~
114	3.8	3.7	2.6	1.5	北群	165	4.3	4.0	3.4	1.0	~
115	3.9	3.7	2.6	1.7	南群	166	4.4	4.2	3.3	1.5	北群
116	3.6	3.4	3.0	1.3	~	167	4.0	3.9	3.2	2.0	南群
117	3.7	3.4	3.0	1.6	北群	168	4.4	4.2	3.8	1.0	北群
118	3.5	3.2	2.8	1.9	~	169	4.4	3.9	3.8	1.5	~
119	3.6	3.4	3.1	1.5	~	170	4.7	4.1	2.2	1.9	南群
120	3.6	3.4	3.0	1.5	南群	171	4.9	4.6	2.1	2.0	北群
121	4.1	3.8	2.0	1.5	北群	172	5.0	4.4	2.8	1.5	~
122	3.7	3.4	3.2	1.6	南群	173	5.5	4.4	3.0	2.0	~
123	3.7	3.6	3.4	1.4	北群	174	5.0	4.9	3.0	2.0	~
124	4.3	4.0	1.5	2.0	~	175	4.7	4.7	2.7	1.5	~
125	3.9	3.9	2.0	1.5	~	176	4.6	4.6	2.1	2.0	~
126	4.1	3.9	4.8	1.5	~	177	4.9	4.4	2.8	1.5	~
127	4.0	4.0	2.0	1.5	南群	178	4.6	4.4	3.0	2.0	~
128	4.2	4.1	2.1	2.0	北群	179	4.7	4.9	3.0	2.0	~
129	4.2	3.9	2.2	2.0	~	180	4.9	4.7	2.7	1.5	~
130	4.2	4.1	1.6	1.5	~	181	4.7	4.2	3.4	2.0	~
131	4.2	4.2	2.0	2.0	南群	182	4.8	4.6	3.1	2.0	~
132	4.3	4.2	2.2	1.6	~	183	5.0	4.5	3.5	1.5	~
133	4.3	3.2	2.7	1.5	~	184	4.9	4.7	3.1	2.0	~
134	3.3	3.4	2.3	1.5	北群	185	4.9	4.8	3.5	1.8	~
135	3.6	4.1	2.0	2.0	南群	186	5.0	4.7	3.7	1.5	~
136	4.1	3.7	2.2	2.0	~	187	4.9	4.4	3.8	1.6	~
137	4.5	4.0	1.9	2.0	~	188	4.7	4.6	3.8	1.8	~
138	4.4	4.0	2.1	1.5	北群	189	4.9	4.4	3.2	2.2	~
139	4.1	4.0	2.2	1.5	~	190	4.9	4.8	3.6	1.5	~
140	4.1	3.9	2.4	1.5	~	191	4.7	4.6	3.4	1.6	~
141	4.0	3.8	2.5	1.5	~	192	4.5	4.4	3.6	1.3	~
142	4.0	3.9	2.2	1.0	~	193	5.0	4.7	3.9	2.2	~
143	4.1	4.0	2.3	1.5	~	194	4.7	4.6	3.6	1.9	~
144	4.2	3.9	2.5	1.4	南群	195	4.6	4.3	4.1	1.6	~
145	4.0	3.9	2.1	1.5	北群	196	4.9	4.1	5.7	1.6	~
146	4.1	3.9	2.6	1.5	~	197	4.9	4.8	3.0	2.5	~
147	4.4	4.1	2.3	2.0	~	198	5.1	4.6	4.0	1.5	~
148	4.1	3.9	2.2	2.0	~	199	5.2	4.7	3.5	1.8	~
149	4.1	4.0	2.3	1.6	南群	200	5.0	4.9	4.3	1.5	~
150	4.1	3.8	2.0	1.5	北群	201	5.3	5.2	4.5	2.2	~
151	4.01	4.1	2.1	1.5	~	202	5.3	4.6	3.8	2.2	~
152	4.2	3.9	2.2	1.9	南群	203	5.1	4.6	3.2	2.0	~
153	4.0	3.6	2.3	2.0	北群	204	5.7	5.2	3.2	2.2	~

表5 ガラス小玉計測表(2)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36
37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48
49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72
73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84
85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96
97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108
109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120
121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132

図33 ガラス小玉(1)



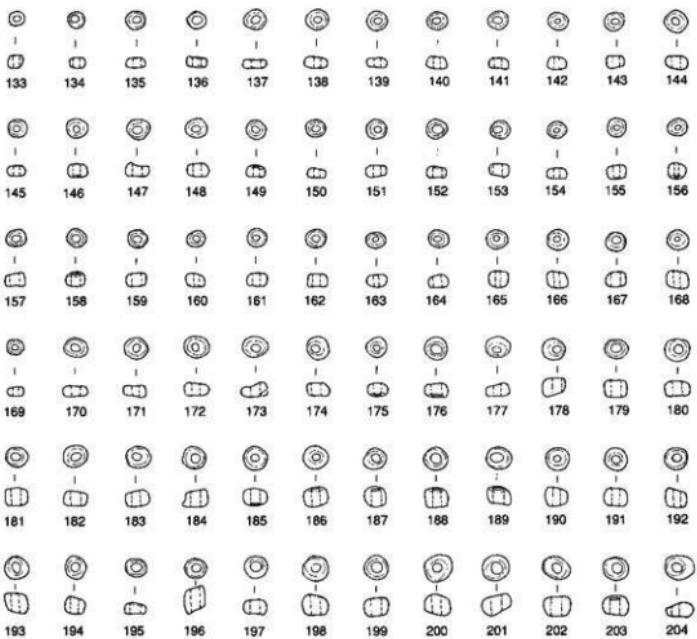


図34 ガラス小玉(2)

0 2cm
(1/1)

以上を一連でトレースすることができた。列同士が等間で交叉するなどの状況は認められない。北群は二次的に乱れた出土状態にあって、各列が短く、列同士のつながりを追うことがむずかしいが、縁辺部では南群と共通する状態が見いだせた(図版第16c-d)。したがって両群とも玉すだれや籠のような構造をもつものではなく、一綴りもしくは一連の環を幾重にも折り返し疊んで置いたものと考えられる。南群の玉を一綴りにすると総長約198cm、北群は同225cmの長さになる。それぞれを環にすれば、南群径63cm、北群径71cm前後となって、その場合、南群では3回折り返し、北群では4回折り返したものを見たことがうかがえる。本来は頭部もしくは胸部を飾っていたものを分離したと考えられる。

d. 布

1号鏡鏡面と2号鏡・3号鏡の鏡面間に挟まれ、幾重にも折り畳まれた状態で出土した(図版第36)。大小6片あり、布片1は11.5cm×6.5cm、布片2は6.7cm×5.4cmをはかる。いまなお柔軟さを保ち展開可能と判断されたため、折り目を展開して本米の形状を追求するとともに繊維の分析と保存処理をほどこすこととした。この分析と作業は佐藤昌憲、高妻洋成氏にお願いした⁽²⁾。

その結果、顕微赤外分光分析法による分析及び光学顕微鏡、電子顕微鏡による観察から、出土布の繊維は現代産苧麻とよく一致し、苧麻との見解を得た(図35、図版第37a・b)。淡い黃白色を呈し、染料等は検出されなかった。織りは平織りであるが、布片1からは、織り密度が約12本/cm×約16本/cmの細かい布(布A)と、約10本/cm×約9本/cmの粗い布(布B)の2種類が存在することが判明した。図版第37eに顯著なように乙巻き1糸から3糸の撚り糸が用いられており、一般的に織り密度が細かい方が絹糸と考えられるから、図版第37でいえば布Aは水平方向、布Bは垂直方向が絹糸とみられる。布Aは出土時上面にあったもので、1号鏡背面の細かい布目痕に対応するとみられ、1号鏡を直接包んでいたと考えられる。

各断片を展開した結果、布片1からは31片、布片2からは20片が分離され、そのうち最大のものは約19cm四方の不定形に展開できた(図版第37f)。各片の折目(折縫)を展開するとすべて単重となり、たとえば紬紗の表生地と裏生地のように、2枚を重ねて一緒に疊んだのではなかったことになる。また紐や縫い目は認められず、袋状の構造は想定できない。したがって2枚の布は、1号鏡を包むにあたり、それぞれ単重で風呂敷のように用いられたと考えられる。

検出状況から、織目の粗い布を下に、細かい布を上に2枚重ねたところへ1号鏡を鏡面を上に向けて置き、まず目の細かい布に製をつけて鏡を包み、ついで粗い布を畳んだのち、上下返して2号鏡・3号鏡の上へ置いたのである。

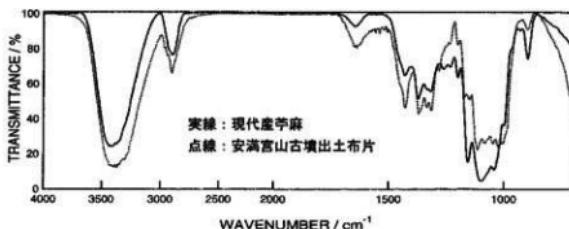


図35 出土布片のフーリエ変換赤外吸収スペクトル

	X方向糸	Y方向糸
布A-a	11.7±0.4	15.9±0.6
布B-b	9.9±0.3	8.8±0.2
布B-c	9.6±0.2	8.4±0.2
布B-d	10.0±0.4	8.8±0.6

* 摂定位置は図版第37cを参照

表6 織り密度測定値(本/cm)

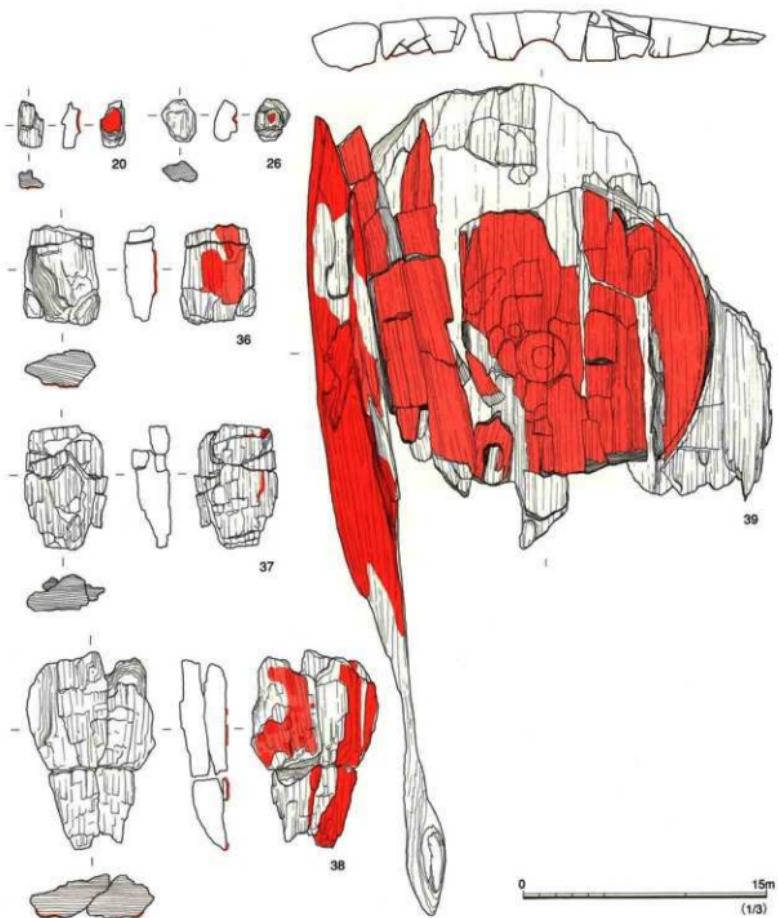


图36 棺材 棺蓋材20・26・36～38・棺身材39

e. 棺材及び横板材

棺材(棺蓋材・棺身材)及び棺と直交方向に出土した横板材がある。

資料化した棺材は、東鏡群(1号鏡～3号鏡)周辺に部分的に遺存していたものである。樹種鑑定は今後に期されるが表面観察からコウヤマキと考えられる。棺蓋材・棺身材ともに内側にあたる面に朱が付着している(図36、図版第38、39a・b)。棺蓋材1～38のなかには朱面側が面を呈する20や円錐形の小さな瘤みをもつ26がある。それぞれ1号鏡の鉢及び乳の圧痕である。1号鏡西側にあった最大の断片38は12.2cm×8.0cm、厚さ2.8cmをはかる。棺身材39は東鏡群の下に遺存していた。36cm×32cm、厚さ3cmをはかり、3号鏡の三角縁及び鉢の圧痕が顕著に認められる。材の一方には節であろうか、鰹節形の遺存状態がとくに良好な部分がある。

横板材は幅8.5～10cm、厚さは最大で1.2cmをはかる。遺存状態が悪く本米の形状寸法は不明であるが、出土状態からみて棺内に渡された横桟様の材で、間仕切り的機能を担っていたことが考えられる。図版第39bに取上げ後の横板材2・3下面の状況を示した。2は北寄りの西側半分を残して材下方の坑底との間層(砂礫層)を除去した状態、3は間層をすべて除去して材下面を露出した状態である。墓坑中央寄りにあった横板材3-1、3-2右側の直交方向の木質は、棺身材の残片である。

f. 土器

墓坑埋土及び周辺から2点出土している(図37、図版第40a・b)。1は埋納坑上位から出土したもので、4cm×3.5cm、厚さ0.5cmをはかる。小形の壺などの肩部から体部上位にかけての小破片である。表面の風化がはげしく外面の調整は不明。内面にはヘラケズリがほどこされている。胎土は径1mmほどの砂粒を含み、焼成はやや甘くて内外面ともに暗灰色を呈する。

2は排水洗浄中に検出したもので、出土状態は不明である。3.5cm×2.2cm、厚さ0.5cmをはかる。小形の壺の肩部から体部上位にあたり、外面には口頸部の剥離痕がみられる。表面の風化がはげしいが、外面は縦方向のハケ調整のあとナデ調整、内面もハケ調整のあとナデ調整



図37 土器 古墳出土

がほどこされている。口類部との間に稜はみられない。胎土は精良で焼成は堅緻である。内外面とも明黄褐色を呈する。

第2節 その他の遺物

古墳北側の緩斜面北西部から石器及び須恵器片が出上している(図38、図版第40c・d)。表土除去・遺構検出作業中に検出したもので、遺構に伴うものではない。東方、萩之庄遺跡や一帯にひろがる横穴式石室をそなえた安満山古墳群との関連が考えられる。

尖頭器 長さ5.0cm、幅2.3cm、厚さ1.8cmをはかる。重量は約11gである。サヌカイトの分厚い剥片を用い、両面に打撃調整をほどこして仕上げたもので、にぶい光沢のある黒灰色を呈す

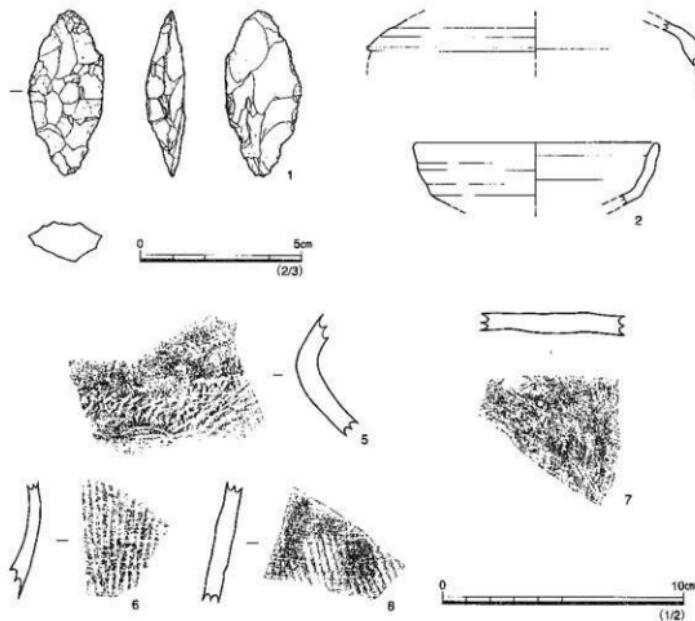


図38 石器・須恵器 表様

る。弥生時代後期に属するものであろう。

須恵器　杯蓋4、無蓋高杯の杯部2・3、壺または甌の体部片5～8がある。いずれも時期は6世紀中頃～後半と考えられる。

注1　奈良国立文化財研究所・肥塚隆保氏ご教示。權現山51号墳2号鏡で観察されている細かい布目状の压痕と同じものである。

2　中間成果が文化財保存修復学会第21回大会ポスターセッションで公表されている。高妻洋成、佐藤昌憲、鐘ヶ江一朗、成瀬正和、好地伸、肥塚隆保、沢田正昭「安満官山古墳より出土した布の保存科学的研究」。要旨は同大会『講演要旨集』(1999 文化財保存修復学会)に収録されている。要旨集段階で布の「織り密度のバラツキは織りムラによる可能性が高い」としている点は、本発表で「2種類の布が存在した」と訂正されている。

第5章 安満宮山古墳をめぐる諸問題

第1節 古墳の占地

安満宮山古墳は、眼下に弥生時代の拠点的な安満遺跡をとらえ淀川と大阪平野を一望する安満宮山塊の中腹、標高125mの高みにある。安満山の頂きからはいくつもの尾根が派生しているが、古墳はそのうち南西方向へのびる尾根のひとつを占拠している。この尾根は、現状では山麓を横切る名神高速道路によって分断されているが、本来は数ある尾根のなかで平野部へもっとも突き出した、安満山の主尾根ともいえる尾根である。平野部からたとえば、松尾川からすぐ立ち上がる尾根の下方に前山が丸い頂きを見せ、そこから鞍部を経て山頂へつなぐ尾根上、全体のほぼ中央に古墳が見える。いま、復元整備され小さいながらも存在感のある墳丘を平野部から見上げると、その位置は阿武山における阿武山古墳にも似て叢林の一画を開き、距離感は郡家川西遺跡に対する弁天山古墳群に通じるところがある。

この地点が選ばれた理由を推測するに、古墳の被葬者の墓盤が安満遺跡にあったことは疑いない。そして安満遺跡からみる安満山の位置と形状、そして古墳の所在する尾根の麓に鎮座する安満の鎮守・磐手社神社がひとつのヒントを与えてくれる。安満の人々にとって背後に聳える安満山は、狩猟採集の糧を育み物質的な支えとなるにとどまらず、聖なる山として永らく精神的な中心にあり大きな位置を占めていたことが十分に推測される。もとより史料を提示するに至らないけれども、磐手社神社の社伝及び宮司・藤林藤文氏からの聞き取りによれば、安満山は古くから同社の神域として守られ、かつては山中での祭祀もおこなわれていたという。古墳北側の平坦地で検出された配石遺構はそうした祭祀跡のひとつとも考えられる。磐座信仰との関連が思い浮かぶが、その本源は遠く弥生時代まで遡るのであろう。前山の名称も、たんに手前にある山というのではなくて「聖地の前にある山」に由来すると思われる。安満山の中央にこの首長が奥津城を定めた理由は、そこにあると解したい。

古墳築造後、墳丘がどれほどの期間持ちこたえ、その存在を誇っていたか知るすべはない。しかし安満山一帯に群集墳が営まれているなか、いまだこの尾根に横穴式石室をそなえた古墳が見つかっていないのは、安満宮山古墳とその被葬者の記憶が受け継がれていた表れではないだろうか。本古墳の被葬者と平野部・安満の人々との深いつながりが感じられる。

ちなみに磐手社神社は、もと安満神社といい、12世紀に安満一帯が奈良・春日大社の莊園となって春日神社と改められ、明治44(1911)年に現在の社名になった。祭神は武甕槌命・大兒屋根命・齋主命・姫大神で、社伝は天智天皇五年に藤原鎌足の願によって勧請されたと伝

える。境内の森は弊手の杜と呼ばれ歌枕として広く知られていたようだ。境内地にのこる小字「宮山」は、本古墳命名のもとになっている。境内から尾根沿いに山道をたどると古墳のすぐ東側へである。被葬者の葬送の列が歩んだ道であろう。

なお聞き取り調査のなかで、古墳一帯が国有林であった昭和20年代に、営林署が古墳周辺で防災工事を行ったことが知られた。斜面を段切りしたり石垣を設けて上の流出をとどめようとしたらしい。したがって古墳南側斜面で検出された階段状遺構や低い石垣は、このときほどこされたものと考えられる。

第2節 墳丘の復元

安満宮山古墳は、墳丘の大半がすでに失われ、墓坑の上部も削平されていた。尾根上の企而精查によっても、墳形や規模を端的に示す手がかりはわずかしか得られなかった。

そこで墳形規格に関連する調査結果から、墳丘復元を検討した。

- a. 安満宮山古墳は、古生層を基盤とする北東方向から南西方向にのびる幅20~30mの急峻な尾根上に立地する。
- b. 古墳北側は表土直下に赤褐色~灰褐色の岩盤や礫土の地山があらわれ、約7m四方の人為的な平坦面が形成されている。古墳南側は幅約13mの斜面地である。東側と西側は深さ30mを越える深い開析谷が大きく迫り、古墳の東西の規模を制約している。
- c. 墓坑は尾根の先端部に位置し、尾根筋にはほぼ直交して設けられている。墓坑底の周縁には円礫や角礫を充填した幅0.2~0.3mの排水溝をそなえ、その中央に木棺埋納坑を設けている。現状で墓坑の遺存深は最大で0.4m程度、埋納坑は深さ約1.2mである。
- d. 墓坑及び木棺埋納坑の埋土は、ほぼ坑底まで均質で分層できない。木棺埋納坑上方に陥没に伴う堆積土等は認められない。
- e. 古墳西側から小開析谷が南北3か所尾根を抉り込み、中央谷によって墓坑西辺排水溝の南半分が流出している。これら小谷の形成発達は古墳築造後のことである。
- f. 墓坑中央部北側では約1.5m×2.0mの範囲に最大厚さ0.2m程度の盛土が遺存していた。墓坑はこの盛土を切って設けられている。
- g. 墓坑の南側、墓坑中軸から約9.5~11.5m地点では地山を削り出した直線的な傾斜面が検出されている。そこには厚さ最大0.5m程度の流出土が堆積し、同層の下位にはさらに水平方向の盛土層が認められた。その先端は標高120.5m、墓坑中軸から14mの地点にある。

- h. 南側斜面とくに西側半分は尾根筋にほぼ直交するととった傾斜面を形成していて、わずかに崩落を免れている西斜面とゆるやかな稜をかたちづくっている。この稜は、墓坑中心ラインの西8m付近で鞍部を形成している。
- i. 北側緩斜面の北西側には小開析谷が貫入しており、一方、東側ではそれとほぼ対応する位置に浅い窪みが認められた。両者を結ぶラインは墓坑中軸から北7m、標高124.8m付近にある。
- J. 古墳北側に区画溝・陸橋部・突出部などの遺構は認められない。埴輪・葺石も検出されていない。他の三方も同様である。

以上の調査所見から、この古墳は尾根地形を利用して、地山整形と盛土によって墳丘を構成していると考えられる。そこで復元作業を進めるにあたり以下1)～5)を仮定した(1)。復元の基本になる墳頂高は、墓坑北側の遺構検出面より約1m上、墓坑底面からは約1.5m上にあたる、標高125.5mに設定した。山側からみて墳丘の区別がつくためには一定の高さが必要であり、排水溝の規模(c)からして墓坑底面上1.5m程度の排水機能は優にそなえていると判断した。この場合、流出盛土厚は墓坑周辺で1～1.3m程度となり、埋納坑埋土上位に陥没土層が認められなかったことも理解される。また墓坑掘形の規模は、縦高1.5mのうち下方0.5mを斜面角50°、それより上方を75°程度とみて、東西8.4m・南北4.2mと推定した(2)。

- 1) 墳頂部はほぼ平坦である。
- 2) 墓坑は墳頂部の中央に位置する。規模は東西8.4m、南北4.2mと想定する。
- 3) 復元の基本になる墳頂高は、標高125.5mと設定する。
- 4) 南側斜面の状況(h)を勘案して、墳形は方形を基本とする。
- 5) 古墳の南北方向の規模は、g・iから墓坑中軸の南側14m、北側7mを基本とする。

作業は古墳縦断面・横断面を作図、想定旧地形上で平面形を検討する手順で行った。以上を経て復元された古墳規模は次のとおりである(図39・40)。

- ・墳丘の形状 長方形墳
- ・墳丘の規模 南北方向21m、東西方向18m
- ・墳頂部規模 南北方向12m、東西方向10m(墓坑掘形上縁南北4.2m、東西8.4m)
- ・墳丘の高さ 南側5.0m、北側0.7m
- ・墳丘斜面角 南側30°～35°、北・東・西側30°～40°

推定復元された古墳は、南北にやや長い長方形墳である。西側の小開析谷が未形成として旧地形を想定した場合、復元墳丘から算定される盛土厚は南西側最大約3.0m、南東側同3.0m、北側同0.7mであり、盛土総量340m³程度となる。全量が古墳の所在する尾根から集められた

として、北側数10m四方はほぼ岩盤までむき出しにされたのではないかと思われる。古墳北側の平坦部もこのとき一定土取りが行われ、のちさらに改変がなされた可能性が高い。墳頂部は南北方向12mとなり、中央部に幅4.2mの墓坑掘形をはさんで南北にほぼ3等分される結果となった。東西方向は墓坑掘形からそれぞれ0.8mの余裕しかとれないが、これはこの古墳の残存状況を理解する手がかりになるかもしれない。木棺埋納坑の陥没でほとんど墳頂部を横断する窪みができ、それが西側へ崩落したことが引き金となって中央の小開析谷の発達を促した可能性が考えられるからである。

墳丘の各斜面の裾は、地形の制約を受けて弧を描き、斜面の長さや角度も一定にはならぬ

測点	距離m	断面積m ²	平均断面積m ²	土量m ³
E10	0	0	0	0
E6	4	24.85	12.42	49.68
E5	1	33.60	29.22	29.22
NS0	5	20.75	20.17	100.85
W4	4	20.9	220.83	83.32
W5	1	31.90	26.41	26.41
W6	1	23.60	27.75	27.75
W8	2	0	11.80	23.60
合 計				340.83

表7 墳丘盛土量の算定

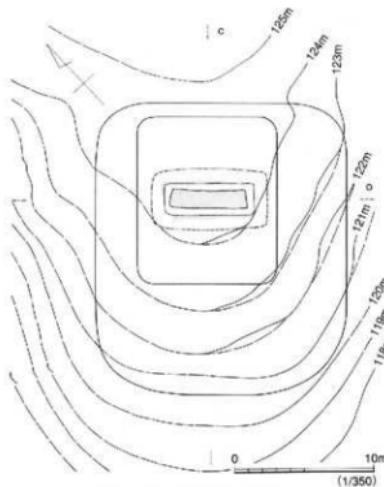


図39 旧地形と墳丘の復元

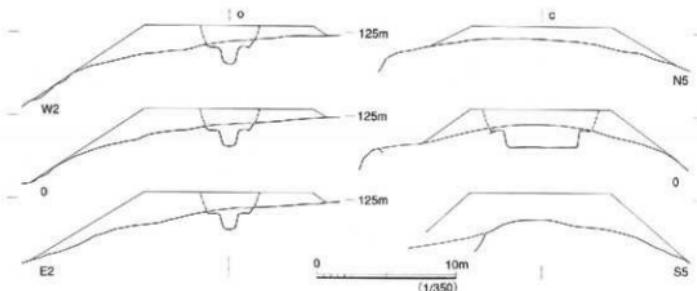


図40 復元墳丘断面図

い。しかし古墳の占地からして、整正な墳丘よりも平野部からの眺望を第一義に兼ねられたことは容易に想像されるところであり、地形の制約を受けつつ平面形を尊重した結果であろうと考えられる。

第3節 埋葬施設及び葬送の方法

本古墳の主体部は、墓坑底周縁に排水溝をめぐらし、その中央に異例に深い木棺埋納坑を設けるという構造をそなえている。前節で検討した古墳の推定復元が的を射ているとすれば、その規模は墓坑が上縁東西8.4m×南北4.2m・深さ1.5m、木棺埋納坑は上縁東西5.6m×南北1.1~1.3m・深さ1.2mあって墳頂部から埋納坑底まで2.7mとなる。これが二段墓坑の系統上にあるものか、かねて指摘があるように韓半島南部の墓制の影響を受けたものか⁽¹⁾、あるいは岩盤を掘り抜いて深く納めることで棺の保存を全うしようとした特異例なのか、可能性はいろいろ考えられるけれども、ここでは検出状況から推定される本古墳の埋葬方法について検討する。

さて、木棺埋納坑は墓坑底中央に設けられており、上縁長5.6m・西端幅1.1m・東端幅1.3m、坑底長5.2m・幅0.75mをはかる。深さは約1.2mだが東側が約9cm深い。横断面の形状や坑底ほぼ全面から検出された朱・木質、坑底両端部に置かれた台石などから、木棺の規模形状に合わせて掘り上げられたことが明らかである。ここに埋置された棺については、木棺埋納坑の形状や台石の位置、同質の棺蓋・棺身材が遺存していたことなどから長さ5m、径0.8m規模の削竹形木棺と考えられた。棺横断面の形状や小口部の構造など具体的な仕口は不明であるが、棺内寸は少なくとも肩幅45~50cmを納める幅が必要となろう。断面形状や材の乾燥の程度など変数が多いが、材の比重0.4として全体重量を試算するとおよそ400~550kg程度となる⁽¹⁾。棺蓋・棺身それぞれ200kgは超え、棺を運びあげて埋納坑へ据え置き被葬者を埋葬するにあたっては、格段の注意が払われたことと推察される。墳頂部から埋納坑の底まで2.7m、途中に墓坑底が幅0.5mのテラス状にめぐらものの、綱をかけて下ろすしか方法がない。葬送に先立って棺を墳頂へ運び上げ、棺身材を坑底へ仮置きして台石をぬませレベルを調整する作業が繰り返し行われたことであろう。そして葬送の日、首長の遺骸が副葬品とともに、坑底へ据えられた棺内へ横たえられることになる。

粘土床をそなえた竪穴式石室や粘土郭などに削竹形木棺を安置するのとは違い、安満宮山古墳のように深く掘り込まれた木棺埋納坑では、木棺の搬置と遺骸や副葬品の埋納とが一体になされたとは考えにくい。鏡群やガラス小玉、鉄製品などがほぼ原位置を保っていると考

えられること、排水溝の右の上面に朱が認められたことは、これを証するに足ると考える。埋納坑上縁から棺身まで少なくとも70cm以上、副葬品の埋納は坑底に据えられた棺内において行われたことであろう。副葬品とともに0.2m間隔で出土した直交方向の板材は、出土状況から間仕切り的機能をもつとみているが、仕切り板とは違って横棟のように坑底から浮いている。これが遺骸の安置及び副葬品配置に先立って棺内に架けられ、視覚的に棺を区切っていたことは、ほぼ疑いない。棺中央以西は木部がほとんど遺存しないため検証できないが、おそらく棺西側にもこうした横棟が架けられてあったと思われる。棺内を区画することは前期古墳ではむしろ一般的であり、こうした横棟状の間仕切りから仕切り板による区画、あるいは遺骸部だけの割り込みや副室などへ発展していった可能性が考えられる。なお本古墳の場合、この横棟は区画施設としてだけではなく埋納の際の足場としても用いられたかもしれない。

さて、遺骸は東枕に安置され、副葬品は頭部近くにガラス小玉、その東側へ西鏡群(4号・5号鏡)、東鏡群(1号～3号鏡)が配置されている。そして足元近くには鉄製品が一括されていた。最大の特徴は三角縁神獸鏡を含みつつも、鏡を積み重ねて置いていたことで、兵庫県・権現山51号墳や京都府・椿井大塚山古墳、奈良県・黒塚古墳などで明らかにされた頭部または頭位を向むるように立てかける前期古墳のスタイルとは大きく違っている。西鏡群は神獸鏡2面(4号・5号鏡)、東鏡群は方格規矩鏡1面(2号鏡)と三角縁神獸鏡2面(1号・3号鏡)であるが、西鏡群は鏡背面を上におそらく木箱に納めてあり、東鏡群は鏡面を上に3号鏡と2号鏡をじかに重ねた上に布で包んだ1号鏡を鏡面を下に置き、朱を撒いている。なぜそれぞれに扱いが違うのか、すっきりした説明を見つけられそうにないが、被葬者たちにとっての鏡の価値一たとえば入手の事情など一が、そこに投影されている可能性はある。政権中枢から各地の首長へ配布され、その地位を内外に示す器物と考えられている三角縁神獸鏡よりも、後述の鏡の年代観からして最も古い4号鏡と、神獸鏡ではそれに次ぐ平縁の5号鏡が遺骸により近く置かれている。東鏡群では古式三角縁の1号鏡が布で包んで一番上に置かれ、神獸鏡ではない2号鏡「青龍三牛」鏡や最も新しい3号鏡はその下にあって埋葬段階では見えない。鏡の製作年代と配置が対応しているかのようである。このことは5面同時に入手したのではなくて、何回かに分けて配布を受けたことを示唆しているように思われる。紀年銘鏡といえども、方格規矩鏡より神獸鏡に重きをおいていたことがうかがわれるのも興味深い。前期古墳の類似鏡にくらべ、4号鏡がシャープな鋸上りがそのままに出土している点も注意を引く。おそらく4号鏡を賜った首長自身が葬られているのであろう。

また1,641個を数えるガラス小玉については、南北2群ほぼ対称に置かれていた。装着状態でないため本来の用途を確定できないが、大小2顆の頸飾りの可能性がある。ただし勾玉・

管玉をまじえず、ほかに碧玉製品などの機器も出土していないところに本古墳の特性の一端がうかがわれ、威信財としての意味はむしろその量にあったのではないかと思われる。こうしたガラス小玉の大量副葬は、京都府・芝ヶ原12号墓に例がある。鉄製品は、未着柄で埋納されていたが、武器と農工具という組み合わせは前期古墳にみられるところである。

遺骸は、さきの横板材のうち最も西側の材と有袋鉄斧の間約1.6mが空隙地となっていて、朱面も鮮やかに認められたことから、棺中央よりやや西寄りに安置されたと考えられる。なお遺存していた棺蓋材の上面や棺身材の下面に朱はみられず、4号鏡上面にも朱が認められなかったことからすると、棺埋置前に坑底に朱を撒いたり、棺蓋の内外面に朱を塗布した可能性は考えられない。

東鏡群1号鏡やガラス小玉付近にとくに厚く朱が撒かれたのは、棺蓋を閉じる直前のことである。その段階ではすでに排水溝の縁は敷設され、黄褐色～赤褐色の墓坑内に黒っぽい縁どりを見せていて、溝内の縁のひとつに朱が付着したのはこのときである。そして会葬者の眼前で棺蓋が下ろされ、つぎに木棺埋納坑に木蓋一天井板一が架けられて土がかぶせられていった、という状況が想定される。

木棺埋納坑の西端部では、地山由来の細疊混じり粘質土層が埋土下位に検出され、木棺埋置後に埋納坑側壁の一部が崩落して流入したものと考えられた。木蓋が架けられて木棺周囲に空間があったことを示唆するものであるが、墓坑底周縁に排水溝をそなえること、埋納坑西壁に小井戸板が倒れかかった形で朱が認められたこと、側壁下部の一部で棺材木質が密着して検出されたことなどもこの想定を補強する材料として挙げられよう。木棺に直接土がかぶせられ間隙を充填していたなら坑壁と木質の間に間層が介在するはずである。墓坑底面で木蓋の痕跡等は見いだせなかつたが、以上から木蓋が存在した蓋然性は高い。棺を囲む施設という意味で、この木棺埋納坑は堅穴式櫛の一種とみなすことができる。石櫛の大井戸を木蓋で覆う例は、いずれも長大な割竹形木棺を納めるものではないが、兵庫県・西条52号墓や岡山県・黒宮大塚墓、広島県・弘住3号墓にある。また山口県・国森古墳や芝ヶ原12号墓は同程度の規模の埴輪・墓坑を有する点で類似している。この点では弥生時代後期～末期の出雲・吉備・丹後の台状墓・埴輪墓にも匹敵する規模のものがあり系譜的にはつながる可能性がある。

墓坑底周縁に排水溝をめぐらして郴内に長大な割竹形木棺をそなえ、紀年銘鏡1面・三角縁神獸鏡2面を含む銅鏡5面、鐵製武器・農工具5種、ガラス小玉を副葬し多量の朱を撒する。こう表現すれば安満宮山古墳は、前方後円墳の祭祀と変わることがない。反面、墳形は長方形墳で規模は一辺20m前後、区画溝・葺石・埴輪等の外表施設は不明。棺頭位は東南で、郴は墓坑底を深く掘り込み木蓋をそなえている。副葬品はすべて棺内埋葬で鏡は積み

重ねて置き、ガラス小下を多量副葬する。これらはむしろ弥生墳丘墓に通じる特徴であり、前方後円墳祭祀の諸要素がのちに欠落あるいは変容した姿とみることはむずかしい。したがって本古墳は、古墳祭祀が定型化する以前の墳墓とみなすことができる。

第4節 出土鏡及び古墳の年代観

安満宮山古墳は出土遺物が墓坑内に限られ、埴丘流出が著しいこともあるから外表施設・祭祀上器等もまったく検出されなかった。したがって墓制と副葬品、とりわけ鏡の年代・組合せ等によって古墳の位置付けを検討するほかはない。

出土鏡5面については、すでに森田克行によって複数の論考が発表されており、系譜的・型式的位置づけが整理されている⁽⁵⁾。要約すると、1号鏡(三角縁「吾作」環状乳神獸鏡)は後漢の画文帶環状乳神獸鏡をモデルに、鏡径を拡大し三角縁神獸鏡に仕立てたもの。「正始五年」銘鏡や類似鏡・甯雄丸山鏡との比較で安満宮山1号鏡は型式的に遡る。鏡座の小突起・匙状の外縁断面形状は備前車塚古墳の三角縁二神六獸鏡と類似する。図像文・鏡式・縁の断面形状から三角縁神獸鏡の初期のタイプにあたる。2号鏡(「青龍三年」方格規矩四神鏡)は丹後の大田南5号墳出土鏡と同型異范で、魏・青龍二年(西暦235)年製作。岡村分類⁽⁶⁾により図文をみると、十二支銘は直線的な「b」、四神と瑞獸の組合せは「b」、銘帯は「L」タイプ援用、外区は「鉄a1」で、長方形鉢孔であることをのぞけば全体として後漢前半の漢鏡5期VA式をモデルにした復古鏡ととらえられる。3号鏡(三角縁「天・王・日・月・吉」獸文帶四神四獸鏡)は定型化した三角縁をそなえた三角縁神獸鏡で、岸本編年⁽⁷⁾の第Ⅲ段階にあたる。同型鏡の現物がなく唯一の現存資料で、類似鏡も含めた序列は椿井大塚山古墳鏡(同範鏡番号24)→東京国立博物館所蔵写真資料・安満宮山3号鏡→権現山51号墳1号鏡と考えられる。4号鏡(斜縁「吾作」二神二獸鏡)は、岡村編年⁽⁸⁾の漢鏡7期の所産。5面のうち唯一長方形でなく隅丸台形の鉢孔をそなえる。類似資料は国内に40余例、楽浪郡・華北に若干数。銘文の系統と外区の菱形珠点付き複波文の特徴は出雲の造山3号墳鏡と和泉黄金塚古墳鏡などにあり、序列は鏡座・神獸像・銘文の比較から和泉黄金塚鏡→安満宮山4号鏡→造山鏡となる。5号鏡(平縁「陳是作」同向式神獸鏡)は後漢の画文帶神獸鏡をモデルとし、図像文の親縁性から「景初三年」・「正始元年」三角縁神獸鏡に先行し、「景初二年」画文帶神獸鏡と同時期の所産と判断される、というものである。

ついで後漢の画文帶神獸鏡・画像鏡・方格規矩鏡からの系譜を検討し、長方形鉢孔によつて1・2・3・5号鏡をいずれも魏鏡と考え、製作順に4号鏡→2号鏡→1号鏡・5号鏡→

3号鏡とみる。年代的には2号鏡の青龍二年、5号鏡の景初二年を定点として4号鏡を2世紀後半から3世紀前半、2号鏡は235年、1号鏡・5号鏡は239年-240年、3号鏡はこれらよりやや下る、とした。さらに所論は諸鏡が製作から間を置かず倭国へもたらされたとみて、『三国志』魏書東夷伝倭人条所載の第1回の卑弥呼朝貢に際して魏から下賜された「銅鏡百枚」は、安満宮山2号鏡・1号鏡・5号鏡を含むさまざまな鏡式の鏡で構成されていた可能性を指摘した。そして古墳の築造年代については特異な埋葬法を古墳祭祀の定型化以前の手法ととらえ、古墳時代の当初に位置づけられるとした。

森田が提示した鏡の年代観については、紀年銘鏡と三角縁神獸鏡の組み合わせや製作技術論的立場からみる三角縁神獸鏡論とも整合すると考えられる。したがって以上の見解を支持する立場から、安満宮山古墳の築造年代については、出土鏡群が3号鏡を最新として世代を超えた伝世鏡を含まないものであることを基本に、木棺を深く埋設するための墓坑の形状や鏡を積み重ねる埋納法が古墳祭祀の定型化以前の手法と考えられること、などから3世紀後半の早い段階ととらえておきたい。

本古墳は、推定復元した南北21m×東西18mというその規模からすれば、三島地域の首長墓にはとうていあたらない。墳形・規模、以後の展開からみれば3世紀末段階に成立する弁天山古墳群こそこの地域の首長墓である。とはいえたが、安満宮山古墳を定型化以前の古墳と位置づける立場からすれば両者を同列に論じることはできない。ここでは三角縁神獸鏡に先立つて配布された可能性がある後漢鏡(二神二獸鏡)が、安満宮山古墳では一例限りで、他方弁天山の首長系譜においてはC1号埴輪造時点まで累代の家宝として引き継がれていく点に、首長の性格の違いをみることができるのでないかと指摘するにとどめたい。

いずれにしても被葬者は眼下の安満遺跡との関連が強く想定されるなか、本古墳は日本最古の紀年銘鏡や古式の三角縁神獸鏡など5面の鏡を出土したすぐれて特異な古墳とみられ、その特異さは瀬戸内と畿内中心部を結ぶ淀川水系の要地というこの地の特性に多分に負っていると考えられる。^{注1}

注1 和田晴吾、原口正三氏よりご助言を得た。

2 堀宮大塚や瀬山島打1号など背生埴丘墓では70°~80°に達するものが珍しくない。雪野山古墳の石室裏壁の場合中軸方向で60°ないし70°・直交方向で約70°、弁天山C1号墳の場合58°~60°をはかる。

3 1997.8.8付座談・京都新聞で菅谷文則氏が伽耶地方良洞里遺跡との比較で、また1998.5.10歴史シンポジウム「検証邪馬台国」で原口正三氏が嶺南地方の事例をあげて発言されている。

4 棚両端に小L板を想定しており、棚全長にわたり割り込まれているとして試算した。全体重量400kgは平均10cm、550kgは平均15cm残して割り込んだ場合の概算値である。稀有な遺存例である下池山古

壇では、身の断面ほぼ半円で両端部分が長く削り残され全長6m強と想定されているから、重量はさらに増すことになる。

- 5 森田克行 後掲文献1998-2・1999にくわしい。
- 6 岡村秀典 後掲文献1993
- 7 岸本直文 後掲文献1995
- 8 岡村秀典 後掲文献1990
- 9 大田南5号墳の「青龍三作」方格規矩鏡についても、今回本古墳で同型鏡が出土したことで政権中枢から配布を受けた可能性が高まつたといえ、畿内中心部と日本海側を結ぶルートの重要性がより明確になったといえる。

参考文献

- 梅原末治 1943『漢三國六朝紀年鏡圖說』京都帝國大学文学部考古学資料叢刊第一冊
- 岡林孝作 1998『下池山古墳 Ⅲ木棺』『下池山古墳・中山大塚古墳調査概報』櫻原考古学研究所編
- 岡村秀典 1990『卑弥呼の鏡』『邪馬台国時代』
1993『後漢鏡の編年』『国立歴史民俗博物館研究報告第55集』国立歴史民俗博物館
- 鎌ヶ江一朗 1999『24大阪府高槻市安満宮山古墳』『日本考古学年報50(1997年度版)』日本考古学協会
- 岸本直文 1989『三角縁神獸鏡製作の工人群』『史林』第72卷第五号
1991『稚兒山51号墳出土の三角縁神獸鏡について』『稚兒山51号墳』同刊行会
1995『三角縁神獸鏡の編年と前壙古墳の新古』『要望考古学』考古学研究会
- 神戸市教育委員会編 1995『西求女塚古墳第5次・第7次発掘調査概報』
- 近藤義郎 1986『前方後円墳の誕生』『日本考古学』岩波講座第6巻
1998『前方後円墳の成立』
- 城陽市教育委員会編 1987『芝ヶ原古墳』
- 鈴木博司 1970『守屋孝藏菟東方格規矩四神鏡圖錄』京都国立博物館
- 高槻市教育委員会編 1998『安満宮山古墳』(改訂版)
1998-2『検証邪馬台国—安満宮山古墳をめぐってー』(歴史シンポジウム資料)
- 1999『邪馬台国と安満宮山古墳』
- 田布施町教育委員会編 1988『国森古墳』
- 奈良県立櫻原考古学研究所編 1997『下池山古墳・中山大塚古墳調査概報』
1998『黒塚古墳』
- 新納 泉 1991『稚兒山鏡群の形式学的位置』『稚兒山51号墳』同刊行会
- 種口隆康 1979『古鏡・古鏡図録』
1989『日本出土鏡の諸問題』『諺の鏡—卑弥呼の鏡と景初四年鏡—』
1992『三角縁神獸鏡総譜』
- 1998『昭和28年柄井大塚山古墳発掘調査報告』京都府山城町

- 広島市教育委員会 1983 「弘佐遺跡発掘調査報告、広島市の文化財第25集」
- 福永伸哉 1991 「三角縁神獸鏡の系譜と性格」『考古学研究』第38巻1号
- 1994 「三角縁神獸鏡の歴史的意義」「倭人と鏡」その2（第36回埋蔵文化財研究集会発表要旨資料）
- 岡壁忠彦・岡壁茂子 1974 「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』10
- 岡壁忠彦・岡壁茂子・藤田恵司 1977 「岡山県真備町黒宮大塚古墳」『倉敷考古館研究集報』13
- 森田克行・鍾ヶ江一朗 1997 「安満宮山古墳の調査」（現地説明会資料）高槻市教育委員会
- 森田克行 1998 「青龍鏡と三角縁神獸鏡—高槻市安満宮山古墳」『季刊考古学』第63号
- 1998-2 「青龍三年鏡とその伴侶—安満宮山古墳をめぐってー」『古代』105号
- 1999 「銅鏡百枚考」『東アジアの古代文化』1999年春号
- 弥栄町教育委員会 1998 「大山南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡第2次～第5次発掘調査報告書」
- 雪野山古墳発掘調査団 1996 「雪野山古墳の研究」

第6章 保存と公開

第1節 経過

安満宮山古墳は、「青龍三年」鏡と三角縁神獸鏡を出土した貴重な古墳として発見当初から注目を浴び、調査の進捗につれてその認識はさらに深められた。高槻市教育委員会では、文化庁・大阪府教育委員会とも協議しつつ、古墳の取り扱いについて関係部局と調整を重ねた。古墳は市有地内にあり、その公園墓地拡張計画では修景ゾーンに位置していたこともあり、調査収束段階では現地保存・公開を念頭において作業がすすめられた。そして一連の保存協議の結果、古墳部分の保存整備及び維持管理を教育委員会で行うことを前提に、古墳の現地保存が決定されたのである。そして全国的にも貴重な安満宮山古墳とその出土品を、地域が誇る歴史遺産として保存・活用していくために速やかな事業実施が必要であると判断され、復元整備及び関連発事業を翌平成10年度事業として展開していくこととなった。

事業は高槻市の市制施行55周年記念事業として位置づけ、埋蔵文化財調査センターが主担となって古墳の復元整備工事、出土品の複製品製作、歴史シンポジウムの開催等を行った。この間、平成10年3月9日付で出土品は一括して国保有の文化財となり、文化庁主催「'98発掘された日本列島展」に出土鏡5面が公開されている。

第2節 古墳の復元整備と出土品複製

1. 復元整備工事

a. 復元整備の方針

安満宮山古墳の復元整備は、活用に向けての重要な課題として保存協議段階から認識され、その方針・手法について部内で検討が重ねられた。そして古墳の重要性に鑑み、先行して史跡保存整備がなされた新池ハニワ工場公園(新池埴輪製作遺跡)の整備基準を基本におき、雄大な景観のなかで臨場感のある墓坑露出展示を行って古代のロマンを感じ取ってもらえるような手法を採用することとなった。

当初計画の整備概要は次のとおりである。

・対象面積 約800m²、うち古墳復元約370m²

・整備内容

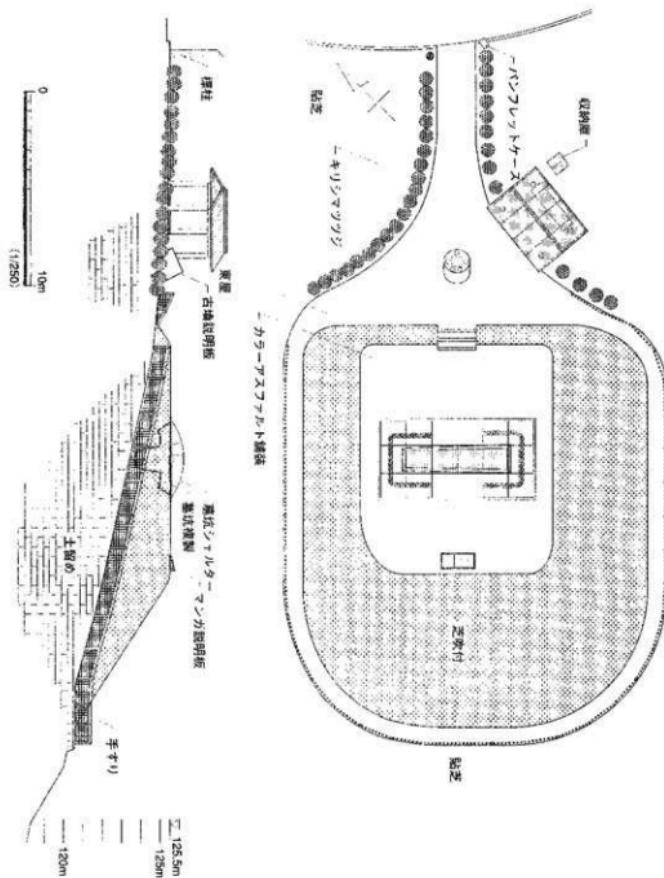


図41 復元整備平面図・西立面図

1) 墓坑の露出保護展示

遺構保存のため、精密な複製品によって行うこととし、強化ガラス製覆いを設置する。

墓坑内には結露防止のため強制換気設備を設ける。

2) 墳丘及び旧地形復元

遺構検出面を保護しつつ墳丘及び旧地形を復元するため、現状地盤に盛土を行う。

3) 説明板等展示

調査成果等を陶板製説明板にて解説。カラー写真・図面を含む。

4) 植栽

斜面保護及び修景のため、芝・低木植栽を行う。

整備内容については文化庁及び大阪府教育委員会とも協議したうえで細目を決定した。

b. 実施体制

工事は高槻市建設部営繕室に依頼し、実施設計・重点監理は委託、工事は指名競争入札による請負工事とした。

実施体制は次のとおりである。

指導助言 文化庁、大阪府教育委員会

事業主担当課 高槻市社会教育部埋蔵文化財調査センター

工事主担当課 高槻市建設部営繕室計画課

設計監理受託者 株式会社文化財保存計画協会

工事請負者 土木工事：有限会社大山組

本体工事・付帯工事：株式会社三和工務店

協力業者：株式会社古永工務店、株式会社日興サッシュ製作所、

株式会社京都科学、大塚オーミ陶業株式会社

復元整備工事は平成10年11月30日に完了し、同年12月11日に竣工式を行って一般に公開した(図版第41・42)。公開にあたり、整備地には「青龍三年の丘」を冠し、以後「青龍三年の丘・安満宮山古墳」として普及啓発を展開していくこととした。

なお復元整備工事に要した総経費は74,718,000円であり、平成10年度大阪府市町村振興補助金24,900,000円の交付を受けた。

c. 整備工事各説

墳丘及び地形復元 古墳の推定復元値を基本として、南北21m×東西18m、高さ5mの長方形墳を復元した(図版第41a)。復元にあたり、墳形の明示及び維持管理のため墳丘嵩に幅1m

の管理用通路をめぐらせ、西側小開折谷の崩落部については所要の土留め・盛土を行った。西側崩落部の土留工法については、岩盤がもろくアースアンカーによる擁壁固定も検討したが、近年斜面養生に採用されているPNC板工法(コンクリート板で挟んだ改良土を壁体とする)を採用して工期の圧縮と効率化を図った(図42-3)。管理用通路はコンクリート造で填丘側に圓形側溝、外側に高さ0.8mのフェンスを設置し、表面はアズキ色の吹き付け薄層舗装をほどこしている。

填丘の盛上施工にあたっては、地山面を清掃して改良土をなじませたうえ、機械及び人力にて填丘しつつ水平方向の盛土を繰り返した(図42-4)。盛土厚は填丘幅で0.3m、最厚部で2.8m程度である。盛土材には撒入粘性土にセメントを重量比で6~8%現場混合した改良土を使用した。

墓坑露出保護展示施設 ステンレス製のフレームに強化ガラスを嵌め込んだシェルター内に墓坑・出土品の複製を設置し、発掘状況の再現をめざしたものである。シェルターは墓坑全体をカバーするため東西8.1m×南北4mとし、景観を考慮して高さ0.7mの低い蒲鉾形をしている。中央部にはデッキを設け、埋納坑を見下せるようにした。強化ガラスは厚さ10mmで、内側に紫外線カットフィルムを貼ってある。シェルター内は常時小形換気扇2台で強制換気している。吸気口はデッキ正面側のフレームに、排気口は東西の小口中央に設けた。南北デッキ下にはイベント等にそなえスポットライトを各2灯取り付けた。また点検扉はシェルター上面を避け北側デッキ正面に設けた(図版第42c)。

墓坑複製 遺構を型取りし、5分割してFRPで製作した。西南側の墓坑底崩落部は復元した。木棺埋納坑底には、出土品を復元模造して取り付け、彩色をほどこして発掘状況を表現してある。鏡は青銅の復元鋳造品、鉄器は樹脂製で、型は複製品製作にあたって作成した型を利用した。ガラス小玉・棺材は模造である。遺骸の位置は被覆針金で示した。

支持枠を含め全高1.7mあって盛土高1.5mを上回るが、その差0.2m分は木棺埋納坑上部へ入れ子になっている(図43)。養生盛土上の独立基礎から吊り下げて支持しており、埋納坑養生土との間隙は要所にウレタンフォームを充填して支えている。遺構本体は養生埋め戻しを除去してシリコン樹脂にて型取りしたうえ、ウレタンフォームで養生してから川砂で埋め戻した(図42-1・2・5・6)

古墳説明板 鏡をイメージして円柱を傾けた形とした。円柱の径1.3m、高さは奥側1.1m・手前側0.65mで、上面は黒御影石、側面は人造石研ぎ出し仕上げである。上面には60cm角の陶板製説明板と、1号鏡~5号鏡の復元鋳造品を嵌め込んだ。鏡背面の文様に直接ふれてその凹凸や質感を肌で感じ取ってもらえるようにしたものである(図42-7・8、図版第42a)。

マンガ説明板 黒御影石張り1.8m×0.8m、高さ0.1mの台座に、30cm角の陶板10枚を嵌め



42-1 墓坑型取り作業



42-2 養生埋め戻し作業



42-3 谷部土留め状況



42-4 塗丘盛土作業



42-5 基礎施工状況



42-6 墓坑複製据え付け作業



42-7 復元鏡 鋳造作業



42-8 復元鏡 取り付け作業

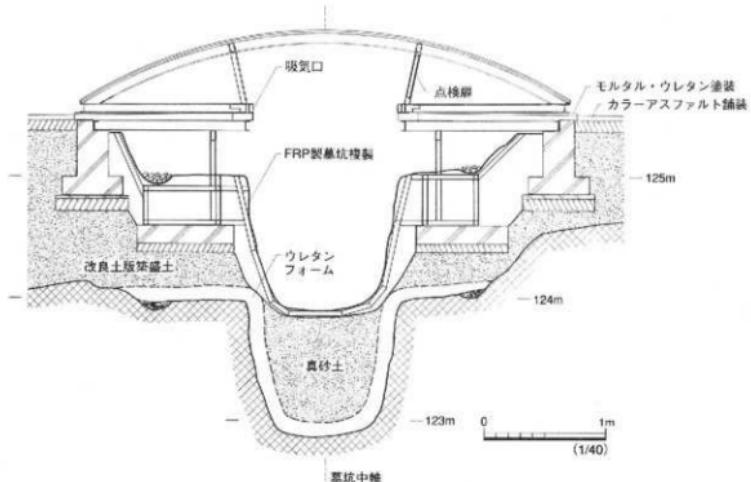


図43 墓坑シェルター断面図

込である(図版第42b)。陶板には「魏志倭人伝」の抜粋と古墳からのパノラマ画(4枚)、卑弥呼と銅鏡をめぐるマンガ(6枚)を焼きつけた。原画は京都精華大学美術学部教授・吉富康夫氏に依頼した。

標柱 アプローチ西側に設置した。形状は削竹形木棺、色は朱をイメージさせる鮮赤色とし、径0.27m、高さ2.1mの立柱の上端を斜めに落としてある。真鍮切り文字で古墳名を表示した。なお公園墓地内の2か所に古墳の方向案内板を設置している。

東屋 柱間2.7m×1.8m、高さ3.1mの東屋を、古墳北東側の園路外側へ設置した。4柱はコンクリート製で、屋根回り及び柱間に設けたベンチはステンレス製である。とくに無人状況下での維持を重視した。

園路・植栽等 園路は、幅2mのアプローチから古墳北辺両隅へ向けてカーブさせ、広がりをもたせた。両隅で管理用通路と接続する。墳頂部・園路とも、明茶灰色のカラーアスファルト舗装をほどこした。植栽については、墳丘斜面は芝吹き付け、園路及び管理用通路外側は張り芝とした。また園路沿いにサツキツツジ及びヤマモモ、土留工壁体にフユヅタを植栽した。

以上のはか、一般道から公園墓地への分岐点に古墳案内板、古墳アプローチ東側に見学者向けの郵便ポスト形パンフレットケース、墳頂四周に緑化推進及び転落防止のため植栽ボックスを設置した。

トを、それぞれ設置している。

2. 出土品の複製品製作

出土品の保存並びに研究と展示公開に供するため、銅鏡5面・鉄製品9点・ガラス小玉出土状況の精密な複製品を業務委託して製作した。業務受託者は株式会社京都科学である。

銅鏡・鉄製品については保存処理後の状態、ガラス小玉出土状況は坑底を含めた幅80cm×奥行き65cmの範囲を対象とし、作業は遺物保管場所である高槻市立埋蔵文化財調査センターで行われた。

いずれも樹脂製で、実物を精密に写し取ったシリコン樹脂型にエポキシ系樹脂を注入して成形し、顔料にて彩色をほどこしたものである。銅鏡については、とくに金属光沢の表現に工夫が払われた。表面にごく薄い金属箔を貼ったうえに研磨・彩色をほどこす手法が採用され、出土当時の白銅色の色調・質感が精密に再現されている。ガラス小玉出土状況は、現場から別々に取り上げた2群の複製を坑底模型に嵌め込んで製作された。

また古墳の復元整備工事のなかで、古墳説明板や墓坑発掘状況の再現にあたり鏡などの復元品を取り付けたが、その製作には本委託で作成された樹脂型(難型)を利用した。鏡は青銅製で、難型からつくった樹脂製難型を原型として、砂型の技法によって鋳造された。いわば「踏み返し鏡」である。青銅の成分組成はおよそ漢鏡に倣っているが黄味がかった銅上がりとなるため、研磨後に表面処理をほどこして白銅色にととのえてある。鉄製品は樹脂製である。ガラス小玉出土状況は、大小3種のガラス製模造玉を複製品を参考に直接配列した。棺材は実物資料を参考に樹脂で模造、着色したものである(図版第42d)。

3. 古墳の維持管理

復元整備区域約800m²については、公園墓地を所管する高槻市環境衛生部と古墳整備を実施した教育委員会の間で管理協定を締結し、教育委員会が表面の日常的維持管理を行っている。整備地及び周辺が墓地であること、ガイダンス施設がないことなどからして、新池ハニワ工場公園のように年間を通しての人的配置はなじまないと判断し、1回2時間程度の管理人派遣で対応することとしている。具体的には、隔日の巡視・点検・パンフレット補充と、月3回の清掃・除草・水遣りなどを組み合わせて、シルバー人材センターへ委託している。また新池ハニワ工場公園同様、シェルターなど整備地の諸設備については全国市有物件災害共済に加入している。整備公開後、1年余りを経過した現在まで管理面での障害は生じておらず、この方式で一定水準を維持できていると考えている。

しかし保存施設に関してはいくつかの問題が生じた。例挙すれば強雨時の墓坑シェルター

内への雨水侵入、墳丘斜面の芝枯れ、墳頂部の水溜まりなど、いずれも水絡みである。たとえばシェルター内への水の侵入は、吸気口外面を伝い落ちる水が吸いあげられたものとわかった。また墳頂の水溜まりは、急勾配の斜面へ雨水を流さぬよう逆勾配をつけた配慮が逆目にでたものであった。前者は吸気パイプ内側に仕切りを設け、後者はシェルター両側辺に皿溝を設けることで対処したが、雨水処理の難しさを痛感させられた。

シェルター内部の環境は、おおむね想定した範囲におさまっている。冬の早朝や降雨時、内側に結露していても日差しがあるとみると晴れていくから、強制換気の効果はめざましい。とはいえた日中温度は、冬場でも外気から数°C~10°C前後高く、夏場では50°C近くに達する。なにぶん遺構にとっては、この場合は複製だが、熱線や紫外線を完全にはカットできず、保存環境としては変動の大きい過酷な条件であるのは事実である。この点で遺構の精密な複製は、遺構本体を埋め戻して保存を図りつつ、実物同等の効果が期待できるという大きな利点がある。水を通さないので苔やカビの心配がほとんどない。本市の場合、新池ハニワ工場館(18号窯)の露出展示で地下水の浸出に伴う苔やカビ、石灰華などの心配事が絶えないことにくらべれば、こちらはほとんどメンテナンスフリーといってよい。長期的には樹脂の劣化という課題はあるとしても、今後さらに追究されてよい手法だと思われる。

なお見学者からは眼下の平野部の雄大な眺望や墓坑の露出展示とともに、説明板に嵌め込んだ復元鏡が大変好評を得ている。平成10年12月から平成11年12月末まで、見学者数はおよそ1万2千人であった。その大半が徒步、公園墓地入り口から安満宮山古墳に至る約1.4kmの急な坂道を利用していることからすれば、大きな数字であると考えている。

第3節 普及啓発事業

安満宮山古墳に関してこれまで実施したものを表にまとめた。

市域に所在する歴史遺産の保存と整備活用という点では、これまでに安満遺跡・今城塚古墳・島上郡衙跡附寺跡の3史跡の公有化事業のほか、阿武山古墳・新池埴輪製作遺跡・島上郡衙跡において整備事業を実施し、今城塚古墳においては規模確認・調査を継続実施中である。時代的には古墳時代後期~奈良時代を中心とし、多くは市西部にある。普及啓発事業もそれらを拠点に行ってきましたが、本古墳の調査と整備は、あらためて安満遺跡の存在をも浮かび上がらせることとなった。また平成10年夏には高櫻城二の丸跡でキリシタン墓地が調査され、二支十字が墨書きされた木棺やロザリオが出土するなど、市域の歴史の奥行きと広がりがいっそう鮮明になってきている。この点で安満宮山古墳は、新池埴輪製作遺跡につづき全国レベル

ルでの情報発信の一方で、「郷土高槻」の歴史遺産を訪ね歩き、市域の歴史文化を見つめ直そうとする「高槻歴史紀行」を開催するきっかけとなるなど、本市埋蔵文化財普及啓発事業のいっそうの展開の転機となったといえよう。

平成9年度 関係普及啓発事業

事 場	実施日	実施場所	内 容
現地説明会	8月23日	現地	調査状況及び出土品を現地公開。参加者6,500人
調査報告会 (図44-1)	8月31日	高槻現代劇場	調査収束段階の知見と記念講演。参加者353人 基調報告 「安満宮山古墳の調査」 錦ヶ江一朗 市立埋蔵文化財調査センター技師 基調講演 「青龍三耳鏡とその伝説」 田代克行 市立埋蔵文化財調査センター次長 記念講演 「邪馬台國への道」 原口正二 甲子園短期大学教授 「卑弥呼女王の紋章から」 水野正好 奈良大学学長
出土品連絡展示 (図44-2)	10月1日 ～6日	高槻市役所	「第3回小さな展覧会」(生涯学習センター展示ホール) 連報コーナーにて、銅鏡など安満宮山古墳出土品と弁天山C1号墳出土鏡など関連資料を展示。参加者4,383人
展示映像製作			「安満宮山古墳－卑弥呼を映した鏡－」7分30秒 発掘調査の記録。現在新池ハニワ工場前映像展示で上映。 製作・談笑映画社
資料刊行等			『安満宮山古墳』A4判8ページ1997年8月31日発行 同改定版 1998年3月30日発行

平成10年度 関係普及啓発事業

事 場	実施日	実施場所	内 容
シンポジウム (図44-3-6)	5月10日	高槻現代劇場	市制施行55周年記念歴史シンポジウム 「検証 邪馬台國－安満宮山古墳をめぐって－」 安満宮山古墳の調査成果をもとに、古代史最大の謎とされる 邪馬台國論に迫る。講師8名による基調報告とシンポジウムの 2部構成。会場ロビーでは保存処理を終えた出土鏡と後漢鏡 などを特別展示した。参加者1,146人 コーディネーター・水野正好 奈良大学学長 基調報告「後國・女王國・卑弥呼」



44-1 発掘調査緊急報告会



44-2 出土品速報展示



44-3 歴史シンポジウム



44-4 同左



44-5 歴史シンポジウム



44-6 同左



44-7 出土品・複製品特別展示



44-8 高槻歴史紀行

事項	実施日	実施場所	内 容
シンポジウム			<p>パネリスト 門脇浪二 京都橘女子大学学長 「地域国家論からみた邪馬台国」 原口正三 前甲子園短期大学教授 「三角縁神獸鏡から邪馬台国を解く」 石野博信 鎌倉文理大学教授 「邪馬台国と大和」 都出比呂志 大阪大学教授 「邪馬台国から倭政権へ」 酒井龍一 奈良大学教授 「邪馬台国時代の社会」 福永伸哉 大阪大学助教授 「三国時代の鏡と三角縁神獸鏡」 森田克行 市立滋賀文化財調査センター次長 「安満宮山古墳と『銅鏡百枚』」</p> <p>主 催 高槻市・高槻市教育委員会・高槻ライオンズクラブ 協 賛 株団法人高槻市文化振興事業団 後 援 朝日新聞社・産経新聞社・毎日新聞社・読光新聞大阪本社・NHK大阪放送局・高槻ケーブルネットワーク株式会社</p>
資料刊行等			歴史シンポジウム資料「検証邪馬台国—安満宮山古墳をめぐってー」A4判78ページ1998年5月10日発行

平成11年度 國際普及啓発事業

事項	実施日	実施場所	内 容
出土品特別展示 (国44-7)	4月5日 ～5月31日	高槻市役所	1階ロビーにて、安満宮山古墳出土品と平成10年度に製作したその複製品を比較展示し、一般の観覧に供した。
高槻歴史紀行 (国44-8)	11月21日	現地	市域の歴史遺産を訪ね歩き、地域の歴史的・文化的環境を見つめ直す機会を提供する歴史ウォーク。そのルート1として、阪急高槻市駅→安満道路→安満宮山古墳を結び、全行程4kmのコースで開催。参加者165名 現地講演会 「発掘川柳邪馬台国」 酒井龍一 奈良大学教授
資料刊行等			「邪馬台国と安満宮山古墳」四六判上製230ページ 歴史シンポジウム「検証邪馬台国—安満宮山古墳をめぐってー」の記録集。高槻市教育委員会編、古川弘文館刊。 1999年11月20日発行

付論1 墓坑出土赤色顔料の分析

本田光子（別府大学）

1. はじめに

大阪府高槻市所在の安満宮山古墳から出土した赤色物について、その材質と状態を知るために顕微鏡調査とSEM調査及び蛍光X線分析を行った。

墳墓出土例に関する現在までの知見によれば出土赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第2鉄 Fe_2O_3 を主成分とするベンガラと、赤色硫化水銀 HgS を主成分とする朱の2種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹があるが、出土例はまだ確認されていない。ここでは、これら3種類の赤色顔料を考えて調査を行った。

2. 試料

依頼を受けた試料について、実体顕微鏡下でできる限り調整（混入土砂等夾雑物の除去）し、赤色物を針先につく程度の量を採り検鏡用に、残りを研和して蛍光X線分析に供した。X線分析試料には土砂がかなり含まれている。

3. 顕微鏡検査

実体顕微鏡により透過光・反射光40~400倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類、2種以上の赤色顔料があれば混和の状態と相対量、夾雑物の有無等を観察するものである。3種類の赤色顔料はとくに微粒のものが混在していないければ、粒子の形状、色調等に認められる外観の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。朱粒子は、やや角張った塊状、落射光観察時に認められる独特の反射・光沢、透過光観察時の透明度及び赤色の濃淡の調子等に特徴が認められる、ベンガラ粒子は、塊状、棒状、板（扁平）状、球状、不定形等様々な外観を持ち一様でない。

本試料には赤色顔料として朱粒子のみが認められ、ベンガラ粒子は認められなかった。

4. SEM調査

赤色物の種類、とくにベンガラの種類と状態を調査するために行った。フィリップス社製XL20で観察を行った。朱は0.5~60ミクロンの粒子径をもつ。

5. 蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。別府大学設置の(株)堀場製作所製エネルギー分散型蛍光X線分析装置M E S A 500を使用し、15kV-440 μ A；50秒、50kV-20 μ A；50秒、真空、の条件により測定を行った。

赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄があるので、2種の元素の有無のみ表中に記した。他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されたが、それらはみな主として混入の土砂成分に由来すると考えられるので表では省略した。但し、鉄は土砂成分にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものとの区別は蛍光X線強度から判断した。なお、鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかった。

NO.	分析試料の採取位置・色調
①	埋納坑東端部坑底・淡紅色
②	1号鍾錠背面・鮮赤色
③	棺材材北寄り上面・鮮赤色
④	南群ガラス小口附近・鮮赤色
⑤	埋納坑中央坑底・鮮赤色
⑥	埋納坑西側台石付近・濃紅色
⑦	埋納坑西端部坑底・淡紅色
⑧	排水溝上面赤色物粒・鮮赤色

試料	顕微鏡	SEM	蛍光X線分析		赤色顔料の種類
			鉄	水銀	
①	朱	朱	+	+	朱
②	朱	朱	+	+	朱
③	朱	朱	+	+	朱
④	朱	朱	+	+	朱
⑤	朱	朱	+	+	朱
⑥	朱	朱	+	+	朱
⑦	朱	朱	+	+	朱
⑧	朱	朱	+	+	朱

表8 分析試料と分析結果一覧

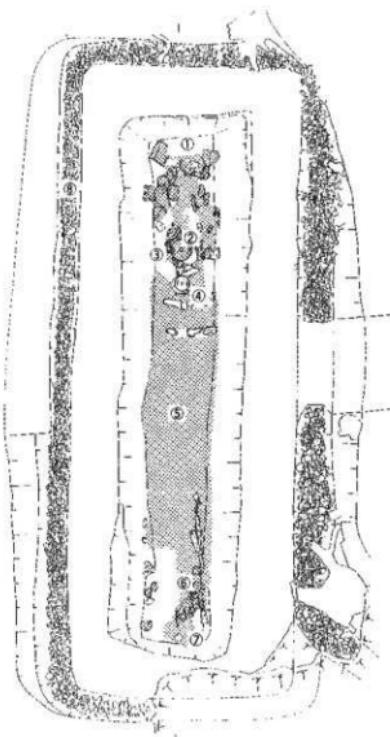


図45 分析試料の採取位置

6. 結 果

調査結果は表に示したとおりであり、赤色物は赤色顔料の朱であった。

弥生時代後期から古墳時代の墳墓では埋葬施設の構築過程、埋葬施設内及び遺骸に、赤色顔料の朱とベンガラを使い分けながら施す場合が多い。とくに古墳時代前期の前方後円墳では「埋葬施設にベンガラ、遺骸には朱」という使い方が最もオーソドックスな在り方である。とくにベンガラを構築過程に多量に使用したり、壺などの容器に納めた赤色物が周溝や盛土内から出土したりする例が近年多く報告されるようになってきた。これに対してベンガラが認められず、朱だけの場合は古墳の築造時期や被葬者の性格等を考えるうえで考慮すべき情報となる。

付論2 ガラス小玉の分析調査

肥塚隆保（奈良国立文化財研究所）

1. はじめに

古代ガラスを科学的に調査することは、古代におけるガラスの流通や交易を知る基礎的データとなる。現在、千数百点のガラス遺物が分析調査され、ガラス材質の歴史的変遷が次第に明らかになってきた。このなかで、弥生時代の終わり頃から古墳時代前期はガラス材質が大きく変化する重要な時期であり、ある意味では流通・交易に変化が起ったことを意味している。今回、安満宮山古墳の墓坑出土のガラス小玉について、まず非破壊的な手法によって物性及び構造・材質について測定したので、以下、その結果と若干の考察を記す。

2. ガラス小玉試料

分析・測定した試料は、南群737点、北群836点のなかから、それぞれ10点ずつ任意抽出されたものである。いずれも透明ないし半透明で淡青色を呈する。肉眼的には表面はやや白っぽくなっているが、特別に風化が進んで劣化しているようには見えない。いずれの試料とも本来は透明であったが、風化によりやや半透明を呈するようになったと考えられる。

3. 測定の方法

今回は比重の測定、蛍光X線法による化学分析、X線透過撮影による内部構造の調査などを行った。

(1) 掛け比重は、遺物をアクリル樹脂（樹脂濃度2%）により強化したのち、アルキメデス法（空中での重量と溶液中での重量から容積を求める）にて比重の測定を行った。なお、測定溶液はアルコールを使用した。

(2) ガラスの化学組成を知るため、微小領域エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて、真空中にて測定を行った。ガラスは見掛け上風化していないよう見えて、その表面の化学組成は大きく変化しているため、表面の微小な領域(1mm ϕ)を研磨して新鮮な部分を測定した。測定条件は励起電圧20~40kV、電流4~0.5mA、コリメーター1mm ϕ 、計測時間500秒である。

(3) ガラスの加工方法などを調べるために、内部の孔部分の構造調査をX線透過撮影法により調査した。今回はガラスが小型で、かつ鉛成分を含有しないため、ソフトX線による撮影を行った。撮影フィルム：F P、電圧60kV±、電流：最大5mA、照射時間：3分、フィルム－焦点間距離：1.2mである。

4. 測定結果

各試料の比重を測定した結果、見掛け比重は2.2から2.5の範囲におさまった。この測定方法は非破壊法によっているため、ガラス内部に存在する気泡の容積分だけ真の比重よりやや小さな値を示していると考えられる。いずれにしても従来のデータと比較すると、アルカリ珪酸塩ガラスの比重を示しており、鉛珪酸塩ガラスとはまったく異なる。参考のため筆者らが測定した日本出土ガラスの比重を示すと、カリガラス：2.3±0.2、ソーダ石灰ガラス：2.4±0.2、鉛バリウムガラス：4.0±0.3、鉛ガラス：5.0±0.5であり、カリガラスとソーダ石灰ガラスは近似している。なお、ガラスの比重は、化学組成がわかっている場合は各酸化物の構成比から計算によって近似的に求めることが可能である。

蛍光X線分析の結果、主成分は酸化カリウムと二酸化珪素で、酸化アルミニウムをわずかに含有するカリガラス(K₂O-SiO₂系)である。また、銅が検出されたことから淡青色は銅イオンによって着色されたものと考えられる。なお、微量に検出された鉛は着色材料の銅に含有していた可能性がある。

X線透過撮影の結果については、多量の微小な気泡が存在することがわかり、引き伸ばし法(管切り法)によって作られたものと推定できる。

まとめ

今回測定した淡青色ガラス小玉は、すべてカリガラスである。弥生時代に多量に流通し全盛を極めた材質のガラスで、古墳時代の後期頃には衰退していくガラスでもある。

弥生時代～古墳時代のカリガラスは、中国で製造されたガラス素材が日本に伝えられていたものと考えられる。今後さらに定量測定を予定しており、正確なデータが揃ったところで、従来出土しているものと比較検討を行いたい。

直徑mm	厚みmm	空中重量g	水中重量g	比重
3.5	2.5	0.0440	0.0252	2.34
3.5	3.0	0.0503	0.0290	2.36
3.5	3.0	0.0449	0.0257	2.34
3.5	3.0	0.0471	0.0280	2.47
3.2	3.8	0.0484	0.0280	2.37
3.5	3.2	0.0422	0.0238	2.29
3.0	2.0	0.0298	0.0174	2.40
3.5	3.3	0.0634	0.0359	2.31
3.5	2.6	0.0448	0.0262	2.41
3.5	2.5	0.0424	0.0241	2.32
3.5	3.5	0.0599	0.0337	2.29
4.7	3.1	0.0418	0.0238	2.32
3.0	2.5	0.0254	0.0144	2.31
3.5	2.2	0.0374	0.0214	2.34
3.5	1.6	0.0302	0.0170	2.29
4.5	3.5	0.0435	0.024	2.31
4.9	4.2	0.1084	0.0601	2.24
4.9	3.3	0.1021	0.0579	2.31
5.1	4.1	0.1162	0.0667	2.35
5.0	3.3	0.1054	0.0602	2.33
			平均	2.33

表9 ガラス小玉の比重測定結果(浮力法)

あとがき

平成9年7月7日午前10時半ごろ。安満山中腹の確認調査現場から「ショ、ショショー、鏡が出てきましたっ！」うわざった声で埋文センターへ第一報を入れた。空壙？環濠？墓坑？時期???、首をひねりつつ溝状造構を掘り下げていた最中のことである。それから約3週間、2度の台風の合間にねって調査をすすめ、報道発表時には古墳の概要をほぼ示し得た。振り返っても実に凝縮された日々だったが、とりわけ7月16日深夜に森田次長がこの方格規矩鏡はあの「青龍三年」鏡!?と気づき、翌朝、現場で破片を裏返した瞬間「青龍三年」の4文字が日に飛び込んできた感激や、台風の最中に発表内容をめぐって延々と論議したことが忘れられない。また新聞報道の際には、市職員が出張先の北海道で一面に掲載された銅鏡発見の記事を見て驚き、連絡してきたということもあった。つづく現地説明会では参加人数もさることながら関東や沖縄からも参加された方がおられ、反響の人気さをあらためて認識した。

古墳の重要性と市民の大きな関心、そして古墳が市有地内にあって開発計画策定の事前調査というさまざまな要素が重なり、幸運にもこの古墳は調査途上の段階で保存と整備公開の道が開かれた。新池埴輪製作跡の調査と「ふるさと歴史の広場」整備や島上郡街跡の仮整備などで培われた実績ももって、調査と整備公開・普及啓発を一連の流れに位置づけることができた。担当者としてこの貴重な古墳の調査と保存、整備に立ち合うことができ、技師冥利に尽きると思っている。

本書は、調査とこれまでの整理により判明した事実と観察、所見をまとめたものである。保存処理等の詳細な報告は後日に期したい。さらに類例調査や比較検討は大きな課題として今後取り組んでいきたいと思う。

最後に、現地調査以後今日に至るまで、さまざまな助言と協力をいただいた多くの市民の方々、研究者各位に、心よりお礼申し上げる次第である。

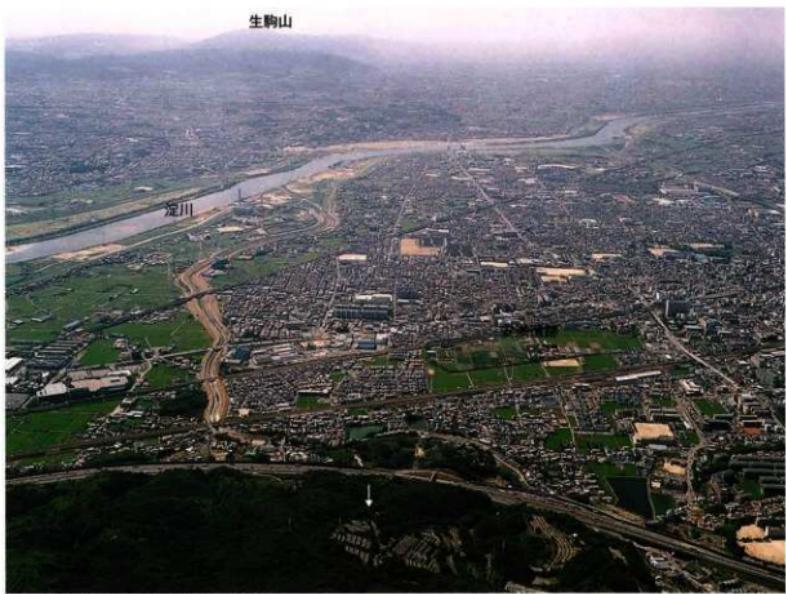
図 版



安満宮山古墳出土品 国保有（文化庁所蔵）



a. 安満宮山古墳 遠景（南西側から）



b. 安満宮山古墳 遠景（北側上空から）



a. 安満宮山古墳 全景（南西側から）



b. 安満宮山古墳 全景（北西側上空から）



a. 墓坑断面（東側から）



b. 木棺埋納坑 坑底（東側から）
c. 墓坑西半掘形検出状況（南側から）



d. 填丘盛土検出状況（墓坑北側）
e. 填丘盛土検出状況（S14m付近）



a. 北側地山検出状況（トレンチ3 西半）



b. 北側地山検出状況（トレンチ3 東半）



a. 北西側地山面の状況



b. 南西側地山面の状況（トレンチ6）



c. トレンチ7 全景（南西側から）



a. トレンチ9 全景（南東側から）



b. トレンチ8 全景（西側から）



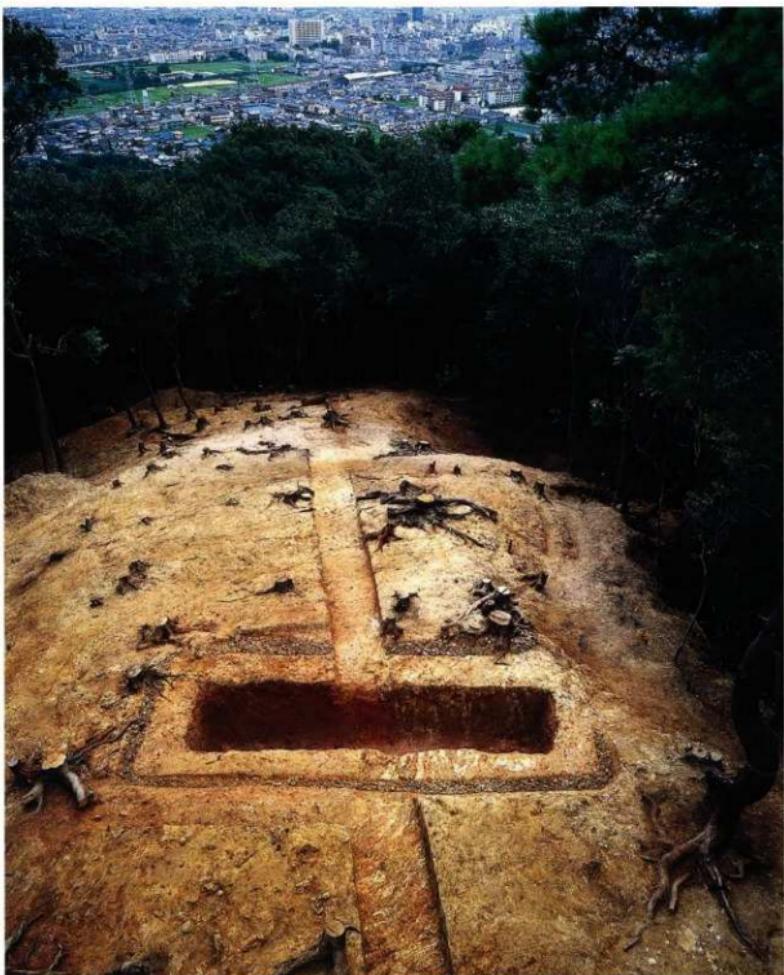
c. トレンチ10 全景（南西側から）



a. トレンチ11 全景（北側から）



b. トレンチ12 全景（南側から）



安満宮山古墳 全景（北東側から）



墓坑全景（西側から）



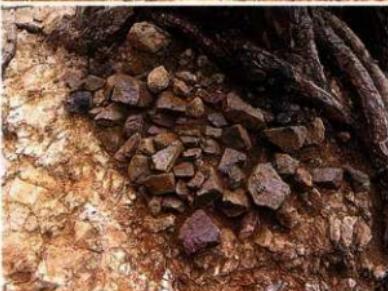
a. 北辺排水溝 部分（東側から）



b. 未検出状況



c. 南辺排水溝 部分（北側から）



d. 排水口付近（西側から）



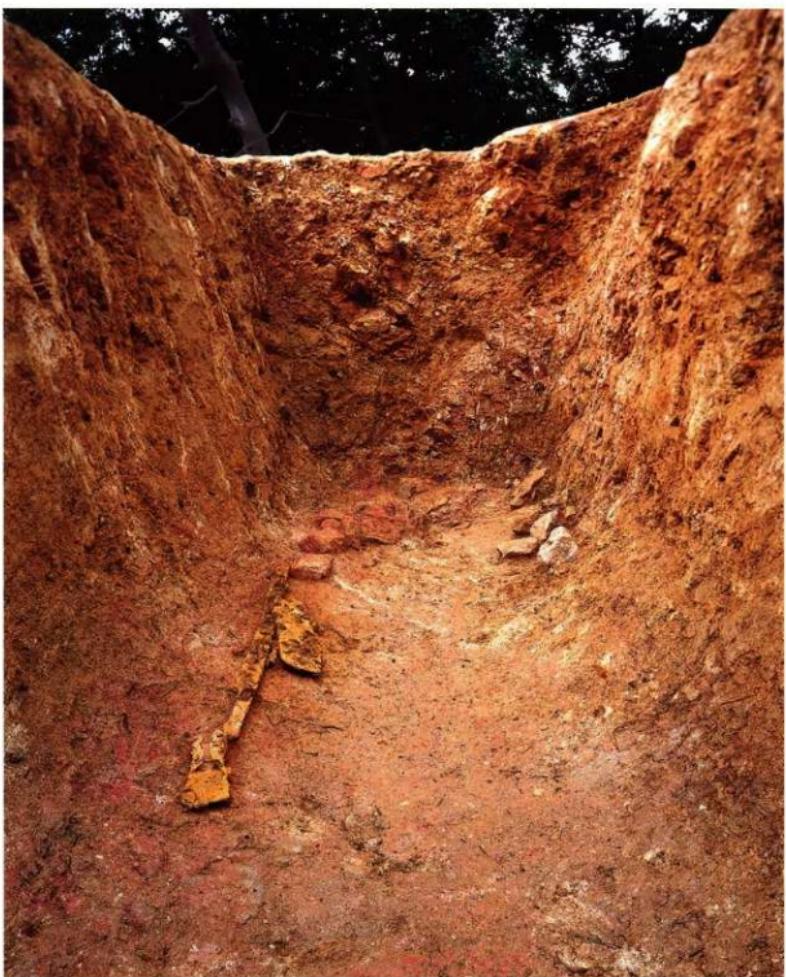
e. 排水溝 断ち割り（北辺中央、西側から）
f. 排水溝 断ち割り（南辺中央、東側から）



木棺埋納坑



木棺埋納坑 東側遺物出土状況（中央部から）



木棺埋納坑 西側遺物出土状況（中央部から）



a. 東端部掘り下げ状況（北側から）



b. 東半部掘り下げ状況（北側から）



c. 西鏡群検出状況 1



d. 西鏡群検出状況 2（清掃後）



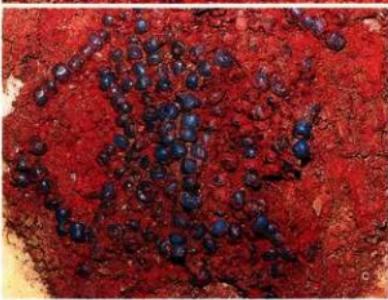
a. 鏡群出土状況（西側から）



b. 鏡群・横板材取り上げ後の状況（西側から）



a. ガラス小玉出土状況（西側から）

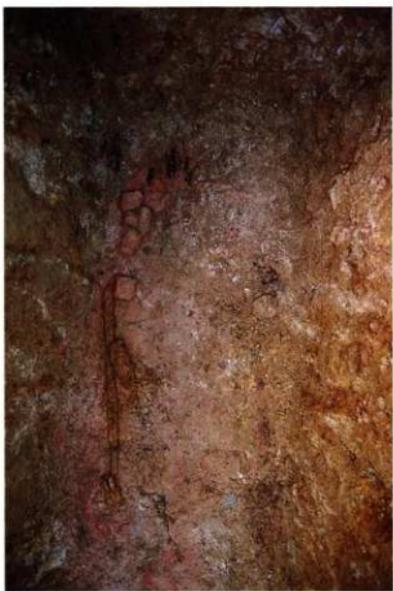


b. 同上 南群（北側から）

c. 南群中層細部



d. 北群下層細部



a. 西端部崩落土検出状況



b



c

b. 崩落土断ち割り（東側から）

c. 鉄製農工具出土状況（北側から）



d. 西端部完掘状況（南側から）



a. 木棺埋納坑東壁（西側から）



b. 北壁東部工具痕（南側から）



a. 配石造構 全景（南側から）



b. 配石造構 全景（北側から）



a. B地区 全景（北側から）



b. B地区 全景（南側から）